THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年 第二號

第二百廿七號

本廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被上度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味六十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味九十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸同　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸同　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸同　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸同　同目方正味百十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸同　同目正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

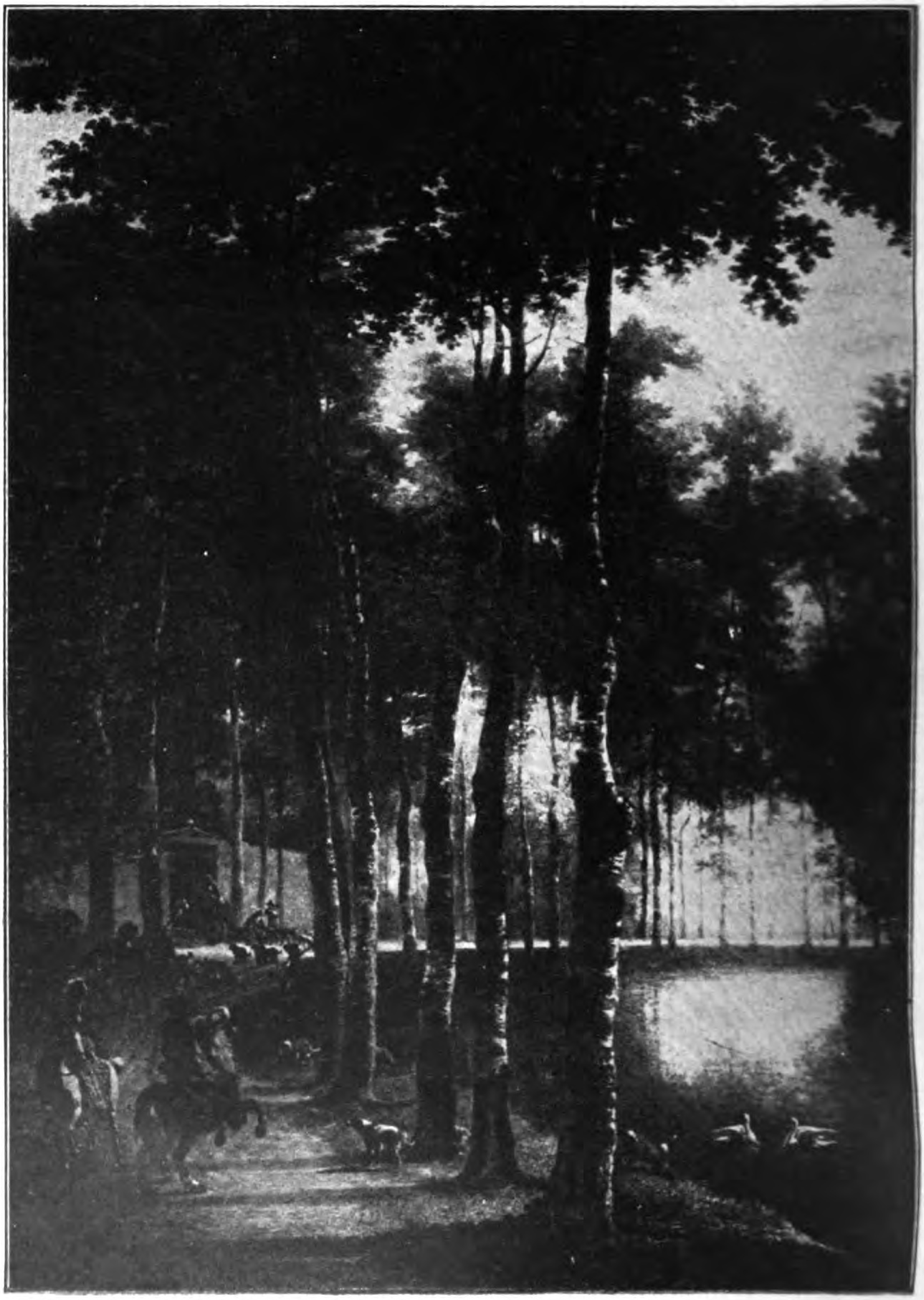
●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割増（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限内ニ死亡セバ）の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都市下京區油小路御前通角（電話 七貳貳番）京都本店
東京市京橋區南植町壹番地（電話本局五壹八番）東京支店
大阪市東區大川町御靈筋角（電話東壹貳五參番）大阪出張所
長崎市榎津町六十五番地（電話 七貳六番）長崎出張所
廣島市紙屋町（秦 忠兵衛方）（電話 六〇八番）廣島出張所

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

中央公論第二十三年第二號目次

"THE ASH TREE AVENUE,"



By JEN HACKAERT.



第二十三年
第二號
(第二百二十七號)

意外なる政變

(一)

西園寺内閣は、吾人が前號に敍說したりしが如く、桂侯の調停に由て繰延と增稅とを行ひ、兎も角閣僚と山縣、松方、井上の諸元老とを一致せしめ得たりき、此が爲めに内閣の信用と聲望とを減じたると素より少からざるも、兎も角一難關を通過したりと信ぜられたるに、其の難關は何處までも難關にして、竟に一時は内閣總辭職を爲すの餘儀なきまでに遭遇し、幸ひにして大藏、遞信兩大臣の更迭丈けにて一時を彌縫し得たるも、内閣の動搖は實に大なりき。

是れ實に吾人の意外に出づ、否、多くの閣僚も一月十四日の閣議に於て總辭職を爲すまでは、幾んど寢耳に水の感ありしといへば、世人の驚異せるも怪むに足らず。

斯る政變を公平に叙說するとは、必らずしも無益ならじ。多くの新聞紙は其の顛末を叙するに於て、黨略又は政治關係に由て故らに多少の斟酌を報導に加へ、然らざるものは頗ぶる事情に遠きと幾んど驚ろくに堪へたるものあれば也。

（二）

桂侯の調停案が山縣、松方、井上、桂の四元老と西園寺首相等との間に評決せられて、各自之に署名し捺印（又は書判）されしは、實に舊臘十二月上旬なりき、然るに遞信省は前年の閣議に於て、鐵道國有の條件として每年三千萬圓宛の建設兼改良費を支出するに內定し、閣僚等總て署名調印したりしを以て、此の費目も當然元老會議に認可せられたるものと解釋し、大藏省當局と交涉の上、相當の繰延額を定めて之を豫算に計上し、且つ十二月下旬の鐵道會議に提案して其の承認を經たりき、後に大藏大臣が此の費額の元老會議の決定以外なるとに氣付きて、其の削除撤回を求むるや、遞信大臣は强硬に之を支持し、此がため辭職を爲すの決心をも暗示したりき、當時藏遞兩大臣間には、必迫せる爭議を現出したりしも、結局大藏大臣之を承認して一月十日の閣議亦之を是認し、遞信大臣も始めて意を安くしたりしといふ。

然るに此の事の諸元老等に報告せらるゝや、松方井上の兩侯主として之を攻擊し、殊に元老に豫告し謀議する所なくして、恣に前の決定案を變更したりしを怒り。殊に大藏大臣が其の職責として遞信省の要求を拒絕し得ざりしを責め、幾んど其の職に止まると能はざらしむるまでに痛言したりき、西園寺首

相が其の十二日諸元老を歴訪して調和を求むるや、松方井上兩老は頑として態度を改めず、桂侯は所謂變更案を撤回して、前の元老會議の決定に復舊するの外に途なきを述べ、西園寺侯と共に伊藤公を訪へるに、公も亦之を然りとしたりしといふ。

玆に於て遞信大臣山縣氏は其の要求の容れらるゝの難きを察し、先づ十三日を以て辭表を提出したり、松方侯より此の際内閣のため辭職の至當なるとを切言せられたりし大藏大臣阪谷男も、亦同時に辭表を提出したり。

諸元老の藏遞兩大臣を怒るは、西園寺首相を怒る也、總ての閣僚を怒る也、但だ藏遞兩大臣を痛擊して而して首相に然かせざりしは他なし、首相の地位と人格とに憚れるがためのみ、然るに諸元老の怒りは首相また避くべからず、玆に於て西園寺侯亦十三日夜を以て辭表を認め、翌十四日閣僚を招集して斯くと告ぐるや、閣僚の多數は實に愕然たりしも、亦總辭職の餘儀なきを認めて、同時に總て骸骨を乞へり。

伊藤公は即日宮中より召命を拜せり、公は參内前先づ桂侯を叩きて其の意見を確め、至尊の御垂問に對しては、此の場合容易に後任者を得がたきが故に、兎も角も藏遞兩大臣を更迭せしむるに止め、西園寺侯を留任せしめ、且つ兩大臣更迭を擧げて侯の措置に一任せしめ玉ふの外なきを答奏したりき、玆に於て更らに西園寺侯を召して優詔を賜ひ、公また辭を盡して侯に說くあり、侯は竟に恩命を拜受し、歸りて之を閣僚に告げ、且つ即夜奏請して内務大臣原氏をして遞信大臣を兼ねしめ、司法大臣松田氏をし

て大藏大臣を兼任せしめたり。

伊藤公は宮中より退出の後、再び桂侯を訪ひ、告ぐるに如上の顛末を以てしたりしといふ、表面の經過を概說すれば斯の如し、吾人は更らに進んで裏面の事情をも語らざる可らず。

（三）

世多くは此の政變を以て前內閣系の機略に出づと做す、一半は然るべし、然れども其の全部にあらず。

山縣遞信大臣の辭表は前例に反して、豫算の不成立を理由とし、其の責任を引く所以を明記しあり、西園寺首相は始め辭職の意思なかりしも、此の辭表の異例なるを視て怫然色を作し、竟に自からも辭表を提げ、閣僚また留まること能はずして一併に辭表を差出せしなりといふ、然れども當時豫算の不成立なりしは事實也、其の責任を引きて辭職するの當然なる、理に於て毫も山縣氏を非難すべきものあるなし、唯だ首相が此の場合に尙ほ辭意なかりしといふは、頗ぶる首相を輕侮したる說也、思へ、閣外に居て責任なき元老なるものゝ調停によりて始めて豫算の大體を構成しながら、更らに豫算案を具體的に作成するに及んで、元老の決定案に違ふの故を以て元老に怒らるゝや、閣議を以て斷然之を排除することを爲さず、再び之を變更して元老案に復歸せしめんとするが如きは、是れ理に於て閣議を元老の言說以下に置くもの也、而かも之がために議會を招集し、既に開院式をも終りながら、未だ豫算案をすら決定するに至らざるが如きは、如何なる內閣に於ても失體と稱せらるべきもの也、若し伊藤公の如き體面を尊重する政事家ならば、直ちに其の職を抛つて飄然閑雲野鶴に伴ふべし、政友會の人々假令總選擧まで隱忍し

て現狀を維持するに鋭意し、此がため何樣の垢辱をも甘受すべしとするも、西園寺侯其の人の人格に於て、理義に於て、如何ぞ恬然として其の位にある可んや、且つ藏遞兩大臣が始め一致せざりしも、其の竟に元老案に背戻したるも、責任の在る所斷じて兩大臣に止まらず、之を統率する首相其の人に在るや爭ふ可らず、之と倶に共にせし總ての閣僚にも亦同じ責任あるや多言を要せずとす、故に藏遞兩大臣が如何なる事情の下に辭職せしにもせよ、首相其の人は決して其の地位に晏如たる理あるとなし、西園寺侯豈之を知らざらんや、侯に辭職の意なかりしといふは、寧ろ侯を誣ゆる也、否、侯を目して責任を解せざるものと做す也、侯を侮蔑するものにあらずして何ぞや。

侯の留まれるは、實に後繼者なきが故ならん、伊藤公の之を留めたるも亦之に外ならざらん、而して優詔の侯に下れるも、亦深く侯の心事を憐ませ玉へるが故ならんのみ。

（四）

前内閣系の人々、殊に謀略に富める清浦子の如き、鬪志熾んなる大浦男の如きは、決して西園寺内閣を悅ぶ人にあらず。

其の悅ばざる所以は、徒らに政權に渴するが故に非ず、其の意蓋し以爲らく、總選擧に於て政友會假令絕對の多數を占むるも、時に及んで之を割裂せしむると難からず、必らずしも憂ひ且つ畏るゝを要せざるも、地方所在に於て放縱にして忌憚なき政友會員等、原氏の内務大臣たるを笠に着て、町村役場を始め總てを自黨に誘致せば、其の事假令内務大臣の意思に非ざる論なきも、地方朴直の徒、政友會員の

強誘を理ありと爲し、若くは強誘を斥くるを不利なりと信じて、多く相率ひて之に投ずるなきを保せず、若し然らば地方の大部分は全然政友會の領域となりて、政友會の地盤牢として容易に拔く可らざるに至らん、是れ啻だ地方自治體を擧げて黨人の蹂躙に委する大弊害を實現するに止まらず、政友會の暴横竟に奈何ともす可らざるに至るべし、故に如何なる手段を以ても總選擧以前に今の内閣を更迭せしむるを必要とすと。

彼等は實に斯の如き事情よりして常に西園寺内閣の運命を咒詛するもの也、機會だにあらば必らず之を打擊して致命傷を與ふるか、之を倒さずんば止まずと做すもの也。

桂侯が始め繰延增税の立案を以て、西園寺首相のために元老閣臣等を調停するや、彼等は之を目して西園寺内閣の前驅となつて難關を排除し、兎も角もして更に閣運を永くせしめたるものと做し、頗ぶる不平を鳴らしたりき、現に侯の顏を目して苦説したるものもありしと聞く、勿論侯が眷々君國を念ふて、身恰かも其の局に當るが如き誠意に感孚して、竟に其の不平を消したりしと雖も、其の意圖や乃ち察すべきのみ、桂侯と雖も亦彼等の意衷を諒とせざるに非ざるべく、爾來西園寺内閣のために、飜然敵位に立つに至らざること素より言を俟たずと雖も、また從前の如く進んで努力することをせず、少くも多少手控ゆるに至るや推想すべし。

遮莫、彼等は其の主持する意圖よりして、或は何等かの機緣に由て、遞信大臣の辭職を促がしたりしと必無と斷言す可らず、遞信大臣にして若し折れて元老案に復奮すべしとせば、素より然かし得べかり

しを以て也、少くも西園寺侯が辭意を飜へし、不面目を忍びて現職に留まりしが如く、遞信大臣も亦部下の不平を抑へ、自家の體面を忍びて元老案に隨從すると難からざりしを以て也、其の然らざりしは、或は他に其の腰を押し氣を勵ますものありしが故ならざらんや、而して其の人の仲小路次官に止まりしや否や、抑も又背後に前內閣系の人の潛伏せざりしや否やは吾人俄かに之を否定し得ざる也。

然れども遞信大臣の辭表提出は、政變の一結果のみ、其の最大動機は素より元老の激怒に在り、而して元老を激怒せしむることは、彼等前內閣系の人々の力及ばざる範疇に屬す、俗にいへば、是れ齒の立たざる部分なり、思ふに彼等の機敏なる、元老の激怒したるを速かに聞知し、若くは察知して、之に處する謀略を逸せざりしとは或は之あらん、元老間に斡旋して內閣との間を離反せしめたりといふが如きは、全く見當違ひの說也、隨つて政變の一部分に前內閣系の潛匿せるを疑ふは當然なれど、其の全部を擧げて前內閣系の陰謀に出でたりと做すは斷じて事實に非ず。

（五）

吾人は茲に本問題と直接の緣故あるを機として、少しく元老と閣臣との關係を敘し置くの甚だしく無要ならざるを思ふ。

元老會議なるものは、日露戰役の開始に際して、擧國一致の思召を以て、當時の桂侯の內閣の外、伊藤、山縣、松方、井上の四元老をして君國の大問題に參與せしめられ、殊に媾和問題の定まるや、爾今列國と親交を重ねて國是を衍らざるがため、閣議の外尙ほ元老會議に於て之を決定すべき旨勅諚ありき、

西園寺侯の内閣成るや、桂侯も元老に加はりて四元老竟に五元老となれる也。

勿論元老なるものは世間の呼稱のみ、其の會議に何等官制あるに非ず、法制的にいへば元老も元老會議も之を認識するに由なきが如きも、其の元首の意思に出でたるに於て、又全く非合法的には非ず、而して西園寺内閣以後、日韓日露日佛の諸協約の如き、總て元老會議に於て決定せられたることは世の知る所也。

元老の閣臣を視るや、幾んど大人の小兒に於けるが如し、伊藤公は法治主義にして又秩序を重んじ、大官を稱して總て至尊の任命し玉ふ所なりと做し、公私共に文書に於ては相當の敬稱を用ゆるを例とすと雖も、直接公私の會合に在ては、國務大臣を呼捨にすること珍らしからず、現に一昨年銀行倶樂部の晩餐會に於て、大藏大臣阪谷氏を呼捨にして、恰かも上官の下級官吏を待するが如く、一座の耳目を驚かしたることありき、公すら然り、況んや松方侯をや、又況んや放膽無遠慮なる井上侯をや、近時の政變前、此の兩侯が大藏大臣を叱責したりし口調の嚴厲なるは、頗ぶる世の異とする所なるも、平生素と然るのみ、寸毫も恠むには足らず。山縣公は資質謹嚴なるがため、桂侯は元老中の後進なるがため、比較的國務大臣を尊重す。

蓋し諸元老は國務に當れること三十餘年、内外の情僞に委しくして至尊の信頼し玉ふこと甚だ篤し、國家の大問題毎に其の議を悉させ玉ふこと必らずしも非議す可らず、之を以て元老漫りに國務に干渉すと做し、其の無責任を論ずるが如きは、寧ろ事情に迂なるもの也、夫れ伊藤公、山縣公、桂侯の如き、政治上に

聲望重きも、之を排するに斷乎たる鬪志を以てせば、必らずしも多く恐るゝを要せざるべし、然れども松方井上兩侯に至ては、三菱三井住友を始め、財界の有力者をして幾んど擧て其の前に俯伏せしむるが故に、兩侯の意思に反しては、到底財界に關する政事を圓滑に遂行す可らず、是れ歷代の大藏大臣が巨然樞位に立ちながら、兩侯に小兒視せられ屬官扱にせられても尙ほ唯々たる外なく、其の激怒に遭ふや、多く職に留まる能はず、延きて內閣の死活をも決せざるを得ざる所以なりとす。

此の情勢より推察せは、今回の政變が殊に松方井上兩侯の激怒に原由する所以また自から瞭然たるべし。

（六）

或は曰く、閣臣總辭職を爲すや、單に伊藤公を召して其の意見を御諮詢あらせ玉へるに止まりて、元老會議を開くに至らざりしは異例なり、而して西園寺侯に賜へる優詔中、實に『朕の信倚するもの今卿を措きて他に多からず』といふの意味ありき、以て西園寺侯に對する御信任の一斑を窺ふべしと。

九重雲深くして素より臣子の窺ふを容さず、假令少しく窺ふも、漫りに揣摩臆測を試むべきに非ず、勿論西園寺侯其の人が至尊の厚き御信任を辱ふするは、幼時御學友たりし緣故と、門葉甚だ高くして陛下との御交情他に超ゆるものあるが故なること、吾人の再應說明して、侯を天成の總理大臣とまで評隲せる所なりとす、唯だ今回の政變に於て、元老會議を開かれざりしを以て、御信任厚きの故と爲すは如何はし、何となれば伊藤公若し一存を以て奉問し得ず、元老會議に由らんことを答奏せば、素より之を召

集し玉ふ可ければ也、公や既に桂侯の意見を確むる所あり、今に及んで急に後繼者なきを知て留職の外なきを奏上す、御信任の厚きは寧ろ公にありと爲すを當然とす、而して元老會議の開かれざりしは、別に他の故あるに非ざるのみ。

若し夫れ國民の信用如何といはゞ、西園寺侯の内閣は、遺憾ながら大に之を失ひたりと斷せざる可らず、豫算案編成にまで諸元老の干涉を求め、非募債非增税（假令浮誇なる人氣取りの標幟なるにせよ）の宣言を弊履の如くに打捨てゝ、却つて增税を行はんとし、而かも兩度まで豫算案の編成を變更して、屢々元老に怒られ、竟に樞要なる藏遞兩大臣の更迭を來し、其の間の情僞悉く外間に暴露したりしが如きは、啻だに其の鼎の輕きとを天下に表白したるに止まらざる也。

今にして沈着剛毅、責任の大節を明かにするの態度を執り、誠意事に當つて識者を心服せしむべき經綸に出でざる以上、到底國民の信用を回復し得べからず、區々黨事にのみ重きを措くが如きは、斷じて善良なる經綸に非ず、寧ろ他の輕侮と嫉妬とを招きて奇禍を求むる所以なるのみ。

（七）

西園寺内閣の將來は如何、其の運命の期間幾何ぞや、或は政黨内閣に改造して前内閣系と絕緣し決戰すべきか、吾人は之に就て卑見の概要を陳述して以て本記事を結ばんとす。

第一責任論より嚴正に論ぜば、今回の政變は單に藏遞兩大臣のみに責任を誘すべきものに非ず、首相以下閣僚擧て其の職を去るを當然とす、但し議會の開議中、豫算案をすら決定せずして直ちに内閣を明け渡すが如きは、後繼者の甚だ迷惑する所にして、豫算の編成を變更するがため、議會の延期を爲すか、若くば前年度豫算を實行するが如き不便を忍ばざる可らず、是れ伊藤公等の勸告によりて、西園寺侯一

時暫らく其の職に止まるに過ぎざる所以なりと爲すは、侯の人格を尊重したる理論也、利害を別問題として、純然たる責任の大義より立論せる堂々たる識見也。

第二政友會には、西園寺内閣の後見役たる伊藤公の在るを幸ひ、侯の掩護によりて兎も角も閣運を支持し、以て總撰擧に臨むべしとするものあらん、是れ尤も俗論也、唯だ政黨を本位とし、總撰擧に官權を藉りて以て多數を制せんと欲するのみ、斯の如き利益專一の方策に出でば、却つて國民の信用を失ふに止まらず、又必らず反對者の乘ずる所となりて土崩瓦解するを免かれざるべし。

第三政友會中眞に意氣あるものは、此の際斷然元老と手を絶ち、内閣を擧げて純然たる政黨内閣と爲し、以て元老及び貴族院と惡戰し、斃れて後止まんと主張するなるべし、是れ敗るゝと雖も聊か政黨内閣を作り出して平生の理想を實現する也、利害論以外、尙ほ多少の理想を有するもの也。

然れとも西園寺侯は果して然かく大決心を以て大奮鬪を爲すべきや否や、侯の資性淡泊洒落なるは、侯の長所にして而して又實に短所也、桂侯は極端まで抗爭するを欲せずと雖も、死中に活を求めて形勢を一變する手腕あり、此がため時としては勇往邁進、先輩元老と雖も必らずしも容赦せざる意氣を示すとあり、西園寺侯に此の段の本事あるや否や疑はし、且つ西園寺侯は現内閣成立の當初に於て、其の政黨内閣たらずして帝室内閣たるとを明白にし、桂侯にも、伊藤公山縣公にも其の旨意を傳へて納得せられたりき、此の關係よりして、今俄かに政黨内閣と爲し若くは準政黨内閣と爲すが如きは、侯の最も難んずる所ならざる可らず。

假りに今政黨内閣に改造したりとも、如何にして其の閣臣を求め得るぞ、松田氏を大藏大臣專任とし、新たに進歩黨より誘拐し來れる鳩山和夫氏を司法大臣として雅量を示し、以て未附の進歩黨員を招來す

る素より妙也、原氏を内相に据置て長谷場、大岡、元田、杉田の諸氏中より遞信大臣を求めば、假令黨中多少の異論ありとも、之を鎮撫するに難からざるべし、松岡氏を農商務省より逐ふて、茲にも政友會員を据付くる亦不可能に非ず、但し陸海軍大臣は孰れに求めんとするや、全然前内閣派と絶て之と惡戰せんとする以上、陸海軍大臣を更迭する決心なかる可らず、或は別に薩摩派と結托する乎、凡そ此等の諸點を檢するに、政黨内閣に改造すること易きに似て甚だ難し。

西園寺侯が諸元老（伊藤公を除く）と絶つことも亦最も其の難んずる所なるべし、伊藤公と雖も然かせざるを得ざる切迫の事情なき限り、今之を敢行する程の勇氣莫からん、公既に然る以上、公と別路を取ることを得ざる侯如何ぞ容易に元老と絶たんや。

概して之を論ずるに、西園寺侯は前内閣系に對して慊焉たらざること多かるべし、然るを此がため斷然開戰を布告し、彈丸盡き粮食絶ゆるまで苦鬪し惡戰する決心ありや否や、侯にして若し原氏の如き執着心と鬪志とあらば、勿論之を敢てすべし、唯だ侯の健康と資質とは、恐らくは之を許さゞらん。

桂侯は其の部下の心事を諒とせざるに非ずと雖も、器宇自から大にして、亦多く伊藤公西園寺侯等と相似たる所あり、内に於て區々政爭にのみ熱中することを悅ばす、且つ餘儀なき事情あらざる限り、政友會の如き大政黨を敵に廻すを好まざること、猶ほ西園寺侯が貴族院の多數を包容し且つ元老の多數と相善き前内閣系と容易に絶つことを欲せざるが如し、二侯の人と爲り斯の如くにして、近時の交情また全く冷灰と爲らず、殊に伊藤公を連鎖として二侯絶たんと欲するも容易に斷つ可らざる關係あるに於て、今直ちに政黨内閣の出現を期し、兩侯鎬を削りて相爭ふと做すは、寧ろ早計に失せん乎、吾人は斯く想像して今後徐かに政局の推移如何を注視すべきのみ。



大變せんとする支那

竹越與三郎

私が北京、上海の間を旅行した三ヶ月間に於て得た所の結果の中、最も特筆大書すべき事は、遲くとも七八年以內に於て清國は一大變亂に出逢ふであらうといふ觀察である。其內憂たるや將た外患たるやは明言することは出來んが、兎に角國家の運命に關する大變亂の起るべきことは、自分は豫言して憚らぬのである。而して是れ實に中外の人々の深く注意して置かねばならぬことと思ふ。

其變亂なるものは何より起るかといはゞ、是れといふことはなくとも、所謂舊き制度と新らしき氣運との際會する途端に生ずるのは、自然の勢にして天然の約束といふも亦可なりと思ふ、然しながら此舊制度と新氣運との衝突を刺激する原因に至ては略ぼ之を數ふるを難しとせない。卑見によれば、

其第一は立憲政體の設立にありといふを憚らぬ。立憲政體は今や支那の國是であつて、下は民間の不平の讀書人より、上は安樂椅子に座する滿洲の大官に至るまで、心あらんものは一人として立憲論者ならざるはないのである。若し此事について議論の分裂があるとすれば、立憲政體の手段方法についての爭に過ぎないと思ふ。故に立憲政體は早晚清國內に行はるゝものに相違ないが、扨此立憲政體は如何なる結果を生ずるかといはゞ、水門を開く、之を開くことは一人の愚人と雖も之を開くを得べし、已に開けたる以上は、千人の智者ありと雖も之を止むる能はず、所謂橫流四出の勢

奈何とすることが出來んのである。一例を擧げていへば、立憲政體の豫備として湖北、直隷の二省に地方議會を設けるといふ事である。此議會は地方議會といふもの丶、其實は日本の議會の稍々小なるものであらうと思ふ。故に我府會縣會を以て律することは出來ない、矢張り我國民議會の稍々小なるものと思はなければならない。處が此議會は先づ財政の監督から出掛けるに相違ない。扨、現今支那人民が支那政府に拂ふ租税は幾何であるか分らない。其の分らない中から各省の總督は北京政府に向て一千三百萬テールを奉る。其一千三百萬テールは北京中央政府の維持費である。然しながら北京中央政府は實際は四千萬テール乃至五千萬テールかゝつて居るであらうと思ふ。何うして一千三百萬テール丈けてやつて行けるかといふに、其實、表面の朝貢の外に總督巡撫以下各々中央の大官に向て種々奉る所あり、其れで生きて居るのである。今若し議會が財政の監督を初めて、總督巡撫の人民より收入した財政を明にするとなつたら、一切の關係が分つて、來て、總督巡撫より吐き出させたものも表向きになつて湖北から出たものは湖北に使ひ、直隷から出たものは直隷に用ふるといふやうに地方獨立主義になるであらうと思ふ。さうなれば北京政府は一千三百萬テールの外、最早や收入の源が涸れ、新たに地方政府に迫て朝貢を增さしむるの外に途がなくなる。而して之には非常に反對が多からう。然るときは政府は財政上餓死することになる。之れは立憲政體なるものが、新、舊。中央、地方。上、下の衝突を激成すべき一例であるが、之を類推して他に及ぼせば、かゝることは他にもいくらもあらうと思ふ。而して支那の政治家は我國の政治家よりも餘程彈力に乏しい。朝野相爭へば必ずや、君士小人の爭、忠奸、倶不戴天の論となる。故に若し議會が政府と衝突して解散せらるれば、千人若くは千五百人の國會議員は悉く文天祥となり、悉く胡澹菴となつて地方の民心を聳動しよう。茲に於てか、從來地方に散在した五十萬の秘密結社員は直ちに此燃料によつて火を得て、あらゆる政府反對黨は一つの勢となつて

燃ゆるであらうと思ふ。

第二、皇帝陛下の健康は我々が日本て想像して居た時よりも惡るいやうてある。又西太后は外間て種々なる取沙汰をするが、其實は日本人が想像するよりは餘程聰明なお方て、確かに四億萬の人民に君主たるべき天品を備へて居る人と思はるゝ。が奈何せん、是れ亦寄る年波に抵抗が出來ぬ。かく西太后の年寄られた事と、陛下の健康とを併せ考へれば、皇太子を立てらるゝは止むを得ざる勢てある。此問題は今年若くは來年から起るであらうと思ふ。扨、誰れを皇太子に立てるか。誰れても聰明な人を立てればよいとは行かん。雍正年間に一種の皇室典範があつて、各々大統を享けらるべき人の資格を限つてある。扨、今の天子は載恬といふ人だが、其皇室典範によれば、載恬の次ぎには溥といふ字を名とする皇族が位を繼ぐべき順序になつて居る。其溥といふ字を名とする人の第二字に人扁の附いた人でなければならぬ。此典範に從へば、今日我國に渡來せられた溥倫。恭親王溥偉。順親王の嫡子溥儀。此三人が大統を享くべき順序になつて居る。故に獨逸の政治家の如きは恭親王を目がけて此人大統を繼ぐべしといふので其意を迎ふるに全力を盡して至らざるなきの有様てある。予は誰が之を繼ぐべきかを豫言することは出來ん。併しながら誰れが今帝に代て天子になるかといふことは支那歷代を通じて、國家の運命に關する陰謀禍亂總て此中にありと斷言するを憚らぬ。

第三は利權回收熱である。近頃浙江省の民が江蘇浙江鐵道について非常の騷動をして居ることは新聞紙に見えて居るが、之れは或は一時治まるかも知れん。然しながら利權回收熱は益々進んで止まらざるものであらうと自分は信じて疑はぬ。支那となつて見れば此れには一種の理屈がある。又之れを助成して支那人の利權回收熱を助けて居る人がある、現今の政府は即ち之れである。蘇江鐵道の如きは英國と假條約をしてのつぴきならぬ場合てある故に政府は民論を抑へるが、さもない時は此政府は民論に乘て居るのである。上には此民論に乘る政府あり、中には之をおだてる日本留

學生あり、下には輕擧妄動を好む人民がある。而して北京には七つ八つの新聞紙があるが、其新聞紙を人民に縱覽せしむる爲めに各所に閱報所といふものがある。此閱報所に、日本でいはゞ、有志家の如きものがあり、頻りに新聞紙をとつて縱覽者に說明をして居る。其說明は皆排外的の口調でやつて居るのである。又北京より張家口に至り砂漠を橫斷して露國の鐵道と通ずる計畫の鐵道があるが、今已に張家口までの半ば、即ち居庸關まで建設せられて居る。之れは支那人の資本で、支那の技師が、支那の勞働者によつて作る、所謂國民的の鐵道である。若し之れが張家口まで達して盛大なる儀式を以て開通を祝ふといふやうの事あらば之れ亦利權回收熱に向て萬斛の油を注ぐものといはねばならぬ。利權回收熱大いによし。又一理なきにあらず。併しながら勢の激する所不測の變なきにあらじ。列國又此運動に對して互に相提携することなきを保すべからず。否な已に其徵候を備へて居る。列國相提攜して支那に加ふるの日は即ち利權回收運動中の最も保守なる匪的要素が活動するの時なるを思はねばならぬ。玆に於ては再び三十三年の役を繰り返すことなしとは誰れも保證することは出來まいと思ふ。

人或は支那を素通りして學校が一通り出來、制度が一通り整ひつゝあるを見て、又支那の大官學士が外國に對して甚だ禮節ある言葉を弄ぶを見て、大いに前途に樂觀を抱くものなきにあらずと雖も、一幕切て落せば、斯くの如き危機を伏藏して居る。故に日本は充分此危機に對して今より計畫せねばならぬのである。眼前區々の小問題は敢て支那と爭ふの要なし。小問題によつて支那の排外心を助成する必要なし。そんな事は支那に讓りやつて其心を和らげて、更らに大いに解決するの時を待つがよからうと思ふ。而して其時は又來るであらうと思ふ。先づ其れ迄は日本の政策は一言にして盡す。曰くカーム(沈靜)であれ。而してウオッチユフル(用心深く)であれ。

憲政の現狀

田中穂積

日本今日の如き奇怪なる立憲政治が何處にあるてあろう、憲法發布せられ、議會の設けられて以來既に十有餘年の間、朝には國務大臣があつて國政を料理し、野には政黨があつて輿論指導の任に當り、毎年召集せらるゝ議會は國政に參與して政府を監督すると云ふが此れは唯單に名のみである、即ち形式上の國務大臣、形式上の政黨であつて、議會も憲法の規定により、毎年召集せらるゝが、此れ又形式のみであつて、殘念ながら眞實の大臣、政黨、若しくは議會は未だ我邦にないのである。

即ち我邦には印璽を帶びざる宰相があつて、此れが印璽を帶べる大臣以上の權力を握つて國家の重大事件は多く此れによつて決せらると云ふ奇怪極まれる現象があるので、古人はこの印璽を帶びさる宰相を稱して元老と云ふのである、而して所謂元老とは、伊藤、山縣、松方、井上、桂の公侯爵五人を指すのであつて、此等の人は皆過去に於て大臣の要職にあつたものてあるが、今日に於ては 陛下の至高顧問部たる、樞密院の一員であると云ふに過ぎないのであつて、實際の政治には無責任の閑地にある、然るに政治上の重大問題と云ふと、忽ち此等の隱退せる元老政治家が馳せ參じて内閣會議に列席して政務に容喙をするのてある、否單に容喙するのみでなく、印璽を帶べる國務大臣は元老政治家の指揮監督によつて國政を料理すると云ふ有様である、故に我邦の國務大臣は其の實傀儡に過ぎずと云ふも必しも誇張の辯てはない、眞實宰相の權力を振ふものは即ち元老政治家である、國務大臣は元老の鼻息を窺ひ、其の承諾を經るにあらざれば國務を左右するとが出來ないのである。

然らば元老は如何にして此の如き實權を握つて居るのであるかと云ふと、素より憲法にも法律にも命令にも元老若くは元老會議と云ふものは規定してないので

其の職務其の權限如何と問はるれば、漠然として雲を攫むが如くてあるが、實際不思議の權力を政界に振ひつゝあるとは明かなる事實てある、即ち惡魔の如く鬼神の如く、目親しく此れを見るとは出來ないが、怖るべき働らきをするものが此の明治の聖代にあると云ふに至つては、咄々怪事と云はねばならぬ、のみならず此の不思議なる元老政治家の權力は、日に月に益々强大になり行く傾きがある、即ち其の起源に遡つて此れを調べて見ますると、元來元老會議なる者は、薩長藩閥の間に於ける權力の爭から偶然に產出せられたものてあつて、薩長以外に身を起して一時政府の主班と仰がれた大隅伯が明治十四年の政變の爲めに野に下つて以來と云ふものは、政權は全く薩長二藩の出身者によつて壟斷されたのてあるが、此れと同時にこの二藩の間に於ける權力の均衡が又甚だ至難の問題であつて、動もすると兩者の間に衝突を來す患があつた、そこで內閣の改造若くは更迭と云ふ場合には必ず兩藩出身の長老が會議をして內閣の役割を定めたが抑々元老會議なるものゝ起源てある、且つ其の初めにあつては勿論憲法もなく、議會もなかつたので、從つて主義主張によつて內閣の更迭を見るとが出來なかつたから、一時便宜の方法として、國の大臣が內閣改造の議に參したと云ふとは事情已むを得ざるに出たものであるとして此れを認めるとも出來る、乍併この權宜の籌策が、憲法發布せられ議會既に開設せられたる明治二十三年以後に於ても、尙ほ依然として繼續したのみならず、初めは唯內閣動搖の時のみ容喙した元老が、其の後次第に平時に於ても頻りに國政に容喙する樣になつて、殊に日露交戰の開始以來と云ふものは、元老は常に閣議に列して、國務大臣の指揮監督をした、國家の政治が如此名分もなく責任もなき二三の政治家によりて左右せらるゝに拘らず、大臣自ら傀儡たるに甘んじ、國民も亦た此れを認めて怪まざるに至つては奇怪至極と言はなければならぬ。

翻つて政黨を見るも、亦形式的の政黨はあるが、眞正なる意義に於ける政黨は未だ我邦にないのてある、

即ち朋黨の比周はあるか、明瞭なる主義主張の旗幟を立てて、輿論を代表し、國民一般の同情若くは後援を得て、國政を監視する政黨のないことは爭ふべからざる事實である、議會開設以前より幾多の政黨は存在したが何れに主義主張によりて團結した眞正の意義に於ける天下の公黨は存在したか、又内閣の匪政を攻擊して正々堂々取つて代はると云ふ樣な國民の同情を得た政黨が何れの時存在したか、成程議會の開設より日清戰爭に至る數ヶ年間の在野黨なるものは、常に内政の整理財政の緊縮を標榜して内閣に肉迫したが、其の所謂在野黨なるものは、幾多の小黨派の一時合同したに過ぎないものであつて、自由黨とか或は改進黨とか稱するものは、其の主義主張に於て何等の差別なきに拘らず、尙ほ且つ渾然として融和することが出來なかつたのみならず、若し内閣を明渡すと云はれても此れを受取るべき準備の整つて居なかつたこと——換言すれば國政の料理に當るべき人才を網羅して居らなかつたのである、即ち彼等は聲を大にして政府の攻擊はしたが、國民の同情及其後援によつて自立するの力はなかつたのである、故に彼等にして若し遠大の計があつたならば退いて靜かに其勢力を蓄へ政黨として自立し得べき基礎を作るに努むべき筈であつたが、日清戰後に至つて彼等の急躁突飛なる意外にも自己を滅ぼす愚策に陷つて、昨日までも主義主張に於て相容れずとなした伊藤内閣と在野黨の一部即ち自由黨は野合をして、政黨たる面目體面を自から破壞し去つた、進歩黨も又其覆轍に在つて、政黨の發達に一大打擊を加へたのは呉々も殘念なことであつて、國民の先驅となつて輿論を代表し政府の施政を監視すべき政黨か、藩閥内閣と苟合して殆んど其の走狗たるに至つては、政黨の精神は茲に消滅して朋黨比周し、以て政權を爭ふ者と云はねばならぬ、即ち松隈内閣の沒落以後今日に至るも政黨の行動は全く權勢利祿の爭であつて、松隈内閣に代つて伊藤内閣が出來ると自由黨は再び板垣伯の入閣を要求し、此の要求か拒絕せらるゝと鋒を倒にして伊藤内閣に肉迫し、伊藤内閣が倒れると、黨人の理想とした政黨内

閣は始めて大隈伯によりて組織さるゝこととなつた、却說彼等の宿望が達せられ、彼等の理想が實にされた結果は果して如何であつたか、權力の爭ひ地位の爭奪は其の極點に達して、百鬼夜行の狂態を演じ殆ど無政府の狀態に陷つて内閣は策の出づるを知らなかつたと云ふ有樣である故に大隈内閣が幻の如く現はれて夢の如く去り、僅か八ヶ月にして内閣の土崩瓦壞を見るに至つたのは少しも怪しむに足らない、此の如き無政府の狀態が長く續けば續く程國家の進運を防害することは明かであるから其の土崩は寧ろ國家の慶事であつたが、この八ヶ月間繼續せる黨人の狂態は遺憾なく其の眞相を國民の目前に曝露して政黨に對する信頼、希望同情は地を掃て空しくなつて仕舞つた、昨日までは尙多少政黨員を天下の公人として見たのであるが、其の眞相を明かにするに及んで、世人は此を我利々々亡者の集團と目するに至つた、誠に止むを得ない次第である、即ち政黨の鼎の輕重は既に一般の問ふ處となつたのである、山縣内閣以來政黨は常に内閣の頤使する所となつて、從順に其の走狗たるに甘んじつゝあるのは少しも怪しむに足らないではないか、かくして彼等は權力に近付くことも出來なければ、國民の同情も得ることが難いと云ふ逆境に陷つたから、窮して濫し、遂に幾多の惡德が彼等によつて演ぜらるゝに至つたのである。

即ち以上述ぶる如く、我邦には形式的の内閣はあるが、眞正の意義に於ける宰相はない、又朋黨の比周はあるが、直正なる政黨は存在しない、從て議會も形式に過ぎないのは必然の結果である、年々歲々議會は召集せられて、三百七十人の議員は形式に於ては國政に參與するが、彼等は國民の輿論を代表するものでもなければ、又政府の匪政を攻擊して取つて代ると云ふ譯でもない、唯だ苟も機會の乘ずべきあれば、權勢利祿に近きたいと云ふに過ぎないのである、故に彼等が聲を大にして政府に肉迫することがあるとすれば、主義主張の爲めと云ふよりは寧ろ政權爭奪の爲めである、又彼等が從順に沈默を守つて居ることがあるとすれば、政府と政見の投合したと云ふよりは、寧ろ其の間に或る

醜惡なる默契が行はれた爲てある、即ち神聖なるべき議院の內から頻々として醜聲外に漏るゝに至つては如何にしても國民の選良が國政を議する場所とは認められぬてはないか、此の如く我邦に於ては國務大臣も形式のみてあれば、政黨も議會も殆ど有名無實のものてあつて立憲政治と稱するものゝ、其の實立憲の衣を着けた寡頭政治てあつて、上下三千年の歷史を通じて東西古今未だ曾て此の如き政治上の變態はなかつたのてある、故に今日立憲有終の美を望む如きは、恰んど痴人夢を談るの類てあろう、却說此の如き歷史上比類なき變態は何によりて現はれたのてあるか、此れを探究するにあらざれば、時弊を一洗して憲政の發達を望むとは出來ないのてある。

思ふに今日時弊の源は、愚見を以てすれば國民の政治的修養が極めて幼稚てあつて權利思想の殆んど絕無なるに源因する樣に信ずる、即ち僅々四十年以前まては所謂依らしむべく知らしむべからずと云ふ主義の下に治者は生殺與奪の權までも握りて、被治者は如何なる苛政誅求にも唯命維れ從て居たのてある、故に義務の觀念は驚くべき發達をなしたか、權利の觀念に至つては國民の頭から一掃されて仕舞つたのてある、故に大政維新の鴻業以來今日に至るまて、政治上の大事件にして、國民の輿論によりて成功したと云ふ例はない、孰れも社會二三の先覺者の力によりて、國民は唯此れに盲從したのてある、即ち社會の先覺者の議論の是非善惡は素より判らないのみならず、又此れを探究し樣とも努めない、たゞ極めて從順に西と命ぜらるれば西に向ひ、東と命ぜらるれば東に向つて居た、其の間に國運は次第に隆盛に赴いたと云ふのは爭ふべからざる事實てある、現に維新の鴻業の如きも、國民の力と云ふよりは、寧ろ薩長土肥を始めとして、各藩有志者の力てある、又專制政治に代ゆるに代議政治を以てしたのも、矢張有志の力によつたのてある、憲法も治者によりて與へられたものてあれば、明治三十一年に於ける選擧權擴張も矢張時の政府たる伊藤內閣の提出したものてある、如此重大事件に對して國民は輿論の勢力

によつて斷行したと云ふ事實は一つもない、而して又吾々の眼前に現はれつゝある事實を見ても如何に我が國民の權利思想の缺乏せるかは明かに證據立てらるゝのである、何づれにか我が邦の如く敎育の進歩し、知識の發達せる國に於て、選擧權の甚だしき制限を被つて居る國はあるか、之れを列國に就いて見るに、墺、地利の如きは人口千人に對して選擧權を有するもの〻數は平均二百七十三人に當り、米國に於ては二百七十二人、佛蘭西に於ては二百六十二人、獨逸に於ては二百六人、英國に於ては百六十人に當つて居る、日本に於ては僅か十六人に過ぎぬ、國民の最大多數は政治上に於ける人格さへも認められぬと云ふ憐むべき狀態に陷つて居る、彼等は國民として中々重き租税の負擔を荷ふて居る、のみならず、一旦緩急あれば國家の干城となつて生命を差出すと云ふ重大なる義務を荷ふて居ながら、其の國家の政治に對しては何等の權利をも與られないと云ふ不都合なる狀態にあつて何等の不平も鳴さぬと云ふに至つては唯々驚き入る外ははいのである、

彼の英國に於ては婦人さへも選擧權擴張請願のため大騷動をして居る、昨年來示威運動をする、大道演說をする、新聞雜誌に正々堂々の論陣を張る、遂には議會をして此の請願を提出させるため、議院に押し懸けて、守衞との間に大衝突を惹起し、五六十人の婦人は此れが爲め拘引せらるゝと云ふ始末に至つても、彼等は尙ほ權利の主張の爲めには倒れて止むと云ふ大決心を示して居る、即ち孱弱なる婦人さへも、敎育あり、財產あり、地位あるに拘らず、單に婦人であると云ふ爲めに政治上の人格を認めざるは不都合千萬であると云ふて渾身の精力を傾注し、縲絏の屈辱を忍んでも尙ほ且つ此れがために奮鬪しつゝあるに對して、日本の有髯男子は果して何の面目を以て彼等英國婦人に對するとが出來るか、英國は素より憲政政治の祖國であつて、權利思想の發達せる點に於て世界比類なき國ではあるが之れを意氣地なき日本國民と比較するに至つて其の相違の著しきたゞ〳〵驚くの外はないのである。

即ち日本國民は數百年來の因襲によりて義務の觀念

は發達したが、權利思想は甚だ缺乏して仕舞ひ、政治上に於て人格を無視されて居ながら、平然として顧ないと云ふ有樣であるから、政府の施政の方針を是非し、或は之れを批評しやうなど云ふ考は毫もないのである、從て國民多數の政治に對する統一せる意嚮、換言すれば眞正なる意義に於ける輿論のないのは必然の結果と云ふべきである、既に輿論がない、眞正なる政黨の存せないのも又怪しむに足らぬ、今日の政黨は一部政治家の嗜好若くは要求から存在して居るに過ぎぬのである、即ち國民の同情もなければ後援もない、徒らに朋黨比周して國家の政治を縱論して居るのみである。如此黨人の集合せる議會はまた嚴格なる意義に於ける國民の選良でもなければ、輿論の代表者でもない、形式的の議會である、故に此の議會は奈何に政府と衝突して內閣を倒しても、取つて代はることの出來ないのは已を得ざる次第である、若し日本の議員が英國の議員の如く眞實國民の選良であつて、議會は確實に輿論を代表するものであれば、政府が之れと衝突して敗北した曉には、何んとしても國民多數の勢力に敵せない譯であるから、其の輿論を代表せる者に向つては內閣を明け渡す外はないのである、而して議會に多數を得た政黨が內閣を組織することになれば、彼等は强大なる國民の同情及其後援によりて樹立したものである、其の施政方針に對して、責任もなく名分もなき外部の隱退せる政治家、元老などの容喙を許さないことは明かて若し元老政治家などが、苟も實際の政務に容喙すれば、一言の下に此れを刎付けることは何んでもない事である併しながら悲い哉日本の議會は、輿論を代表して居ないのである、故に政府は議會と衝突しても此れに內閣を明け渡さないのである、唯如何に形式的の議會であつても、此れと衝突しては政治は出來ないから、已を得ず內閣は之れを他の藩閥政治家に讓り渡す、そこて內閣讓渡の際には必ず所謂元老なるものが出掛けて內閣の產婆役を勤めるのである、即ち既に產婆役をするから、愈々內閣成立の曉、施政の方針に關し、常に元老に容喙せられ制肘を被るは當然の事である、彼等

は元老に擁立せられた義理として不本意ながら其の指揮監督に服從すると云ふ事になるのである、かくして立憲政治の假面を被つて、其の實寡頭政治が行はれて居ると云ふ、未曾有の現象が呈せられて居るのであるかゝる時弊の根源は全く國民の權利思想の缺乏に基するので、政黨が惡いでもなければ、國務大臣が惡いでもない、寧ろ如此逆境に立てる政黨員及國務大臣は憐むべきであろう、去ればとて罪を元老政治家に嫁する事も出來ぬ、要するに國民自から招ける禍のみと斷言せざるを得ない。

今日の如く憲法政治の幼稚なるは、全く國民自ら招ける不幸ではあるが、此れを今日の儘に放任して置くは何んとしても堪へられない事である、政界の亂調子今日の樣では國運の進步の甚だしく阻まれるは免れない勢である、故に一日も早く此の積弊を打破して、憲政有終の美を濟すに努むべきは目下の急務と信ずる、却說如何にして數百年來蠱毒され侵蝕された國民の權利思想を振起させるか、これは仲々の難事業であつて一朝一夕に企て及ぶべき事ではない、併しながら一日遲くるゝは國家の發達に一日の損がある譯だから、この際巧遲よりは拙速を貴び、果斷なる方法を取るより外はあるまいと思ふ、即ち國民教育によりて權利思想の發達を永遠に期すると云ふ手段は、最も穩健なる革新方法であるが、如此緩漫なる方法では四十年五十年の將來を待たなければならぬ、寧ろ此の際選擧權を大いに擴張して、國民に先つ參政の權を與へ、實物教訓によつて代議政治の何ものたるを知らしむれば、自から權利思想は養ひ成さるべく、旣に權利思想が發達すれば眞正なる輿論も產出すべく、始めて政黨らしき政黨議會らしき議會が出來、玆に責任內閣なる者は成立すべき道理である。

要するに憲法政治の大蹉躓は以上述べたる如く、其の大源因は全く國民が封建制度の舊習を脫せざるに職由するのであつて、此の積弊を打破するには是れ其選擧權擴張に依賴する外手段はあるまいと思ふ、吾輩は愚見を陳べて江湖の一考を煩はしたいのである。

投機的悪風を排すべし

安部磯雄

△投機熱の流行

我國に於ては久しく富籤を嚴禁せしを以て一般國民は極めて投機的の事に冷淡なるが如く思はれしも、何がさて一たび政府が勸業債券に富籤を公行し、臺灣の富籤を公許し、競馬に賭博を試みることを是認し、捕鼠にも富籤類似の事を行ふに至り、國民は俄然として僥倖心を遺憾なく暴露するに至つた。凡そ自由競爭場裡に立つて勝を制せんとするものは國民の此射利心に訴ふることを最も有効なる方法と考へて居るらしい。見よ新聞雜誌に懸賞福引を用ゆることの如何に頻繁になりしを。數年前商店が大賣出と稱して店頭桐簞笥を飾り以て顧客を釣らんとしたる以來、今日は殆んどこれを實行しないものはなきに至つた。殊に昨年末に於ける東京市の有様は如何てあつたか。各所の商店は音樂隊を雇ふて大福引の廣告をなしたるが爲め、全市は殆んどこれが爲に狂奔したる觀があつたてはないか。或人がこれを評して僥倖心の結晶てあると言ふたのは決して誣言てはなかつた。聞く所に據れば政府が大々的富籤を行へば二十億の債金を償却することは容易の事なりと論ずる人があるそうだ。如何にもこれは名案てあらう。若し普魯西に於けるが如く政府監督の下に富籤を行ひ、一度に一億萬圓位の額となし、半額を政府の收入とし、半額を籤として分配することにしたならば如何てあらう。殊に一等賞は一千萬圓、貳等賞は五百萬圓といふことにしたならば如何てあらう。僥倖心の盛んなる國民は衣服を質に入れても必ず富籤を購ふに相違はない。斯くて政府は一年に二回位これを行へば毎年の收入一億圓となり、これを國債の償還に宛てることが出來る。是は決して不可行の事てない。極めて成功し易きことてある。然れども斯る方法に依りて國債を償還し得たる國民は精神的に大打擊を受けざるを得ない。負債の重荷を卸したると同時に亡國の民となる蓋し疑ふべからざる事てあらう

△投機辯護論

「泥棒にも三分の理あり」とかいふ諺がある通り、如何なる事に對しても相當の理由がないではない。臺灣の富籤を辯護する人はこれを以て新事業の經營に必要なりと言ひ、競馬に行はるゝ賭博を辯護する人はこれを以て馬匹改良に利益ありといふのである。中には投機其ものを辯護する人があつて、大略左の如き詭辯を弄するのである。凡そ此世の事は一として多少投機的の意味を含まぬものはない。商人が物品を多く仕入れるに當りても、其物の價格が其後に於て騰貴するや否やは全く疑問である。故に如何なる商人と雖も普通の手數料以外に多く儲けることもあれば、却つて損失を招くこともある。然らば投機者が常に米相場や株相場を爲して一時に輸贏を決せんとするのと、單に其度合を異にするのみで、實質に於ては何の異なる所がないといふのである。吾人は論者と同樣に現社會に於ける商業には多少投機的原素を含んで居ることを承認する。然しこれは現時の經濟組織に伴ふ必然の弊害であるので、吾人は決してこれを正當の事として是認すべきものではない。若し出來得ることならば、なるべく經濟組織を改めて、投機的分子を含まない所の交換制度即ち商業制度を設けたいものだ。吾人は茲に繰返して言ふて置くが、今日の商業に多少投機的分子を含んて居ることは現時の經濟組織が不完全であることを表白するものであるから、目下吾人の勉むべき所は、なるべく此弊害の區域を縮小して、これを他に擴張せしめぬ樣にすることである。されば商業にも投機的分子を含んで居るから、米相場や株相場は差支ないと論ずるのは、恰も外交官や商業家は權謀術數を用ゆるから吾人も亦これを用ゐて差支ないと論ずる樣なもので、吾人はこれを一種の詭辯なりと評するを憚らない。

相場を辯護する人は更に次の如きことを言ふのである。凡て物價の定まるのは取引所に於ける賣買の結果であるから、今日の如き複雜なる市場に於ては株式取引所や米穀取引所の必要は明である。東京市民は毎日正午のドンを聽いて各其時計の誤りを正すが如く、株

式取引所や米穀取引所に於ける相場を見て、全國の市場は其向ふ所を知るのであると、これは一應尤なる說てあるが、吾人は茲に二種の相場あることを言ふて置かねばならぬ。即ち實際に取引することゝ、投機的空賣買を爲すこととである。實際に取引所に於て賣買することは殆んど普通の商業と大差なき者であるから、吾人は强いてこれをも撲滅せんとするのではない。然れども投機的空賣買に至りては決して辯護者の言ふが如きものではないのである。若し市價に標準を與ふる必要ありと言はゞ取引所に於ける實際の賣買のみにて足れりてはないか。空賣買を是認するが如きは未だ其弊害の如何に大なるかを知らざるものゝ議論である。天野爲之氏は嘗て東洋經濟新報に於て痛快に空賣買の弊を論じて居る。左に其一節を紹介しよう

東京商品取引所に於ける昨年中(明治卅二年を指す)の賣買高及受渡高を見るに、賣買金額三千八百萬圓の實際の受渡高は僅々四十九萬圓なるに、投機的空賣買の高三千七百万圓餘にして受渡金高は全取引高の百分の一に足らず。又東京株式取引所の實例に徵するも昨年中の賣買高は五百四十萬餘株にして月末受渡高合計は五十餘萬株に過ぎず。今一株の代價を五十圓と見積らば賣買高は二億五千萬圓にして受渡高は二千五百萬圓なり。現賣買の高は實に全取引の十分の一に足らず、其空賣買の金額は二億圓以上に上れり。又東京米穀取引所の有樣を見るも其昨年中に於ける賣買高に對する受渡高の割合は僅々七の一に足らず。而して此空賣買の金額は一億三千萬十分圓以上にあり。然り而して商品の三千七百圓、株式の二億圓、及米穀の一億三千萬圓を合すれば約三億七千萬圓を得るなり。之に場外の秘密取引を加ふる時は東京のみに於ける空賣買の金高は五億の上にあらん。況んや之に加ふるに横濱、大坂、神戶、名古屋、其他全國各所の百有餘ヶ所の取引所を以てする時は、空賣買の高は少くとも數十億に達すべきを疑はず。何ぞ其れ盛なるや。而かも空取引の實際は凡べて差金賣買なるを以て、是等の金額は直に以て實

際に運轉する資金を代表せしむる能はずと雖も、假りに差金を一割と算するも、全國取引所の空賣買の爲に實際に授受運轉せらるゝ資金尙ほ數億を下らざるを推知すべし。資金の濫費此に至りて極まれりと云ふべし

以上は空相場の弊を經濟の立場より見たるのみであるが、國民がこれによりて受くる所の精神上の打擊は果して如何であらうか

△投機の精神に及ぼす影響

人は自己の手腕によりて自己の運命を開拓するといふ覺悟がなくてはならぬ。自己の勞力に據らずしては一錢の金をも受けぬといふ獨立心がなくてはならぬ。僥倖によりて利益を得るも、他人の恩惠によりて利益を受くるも、自己の手腕に據らぬといふ點に於ては同一である。勸業債劵の抽籤に依りて千金を僥倖せんとし、商店の福引に依りて桐簞笥に當らんことを希ふのは勿論小事には相違ないけれども、其國民性を害することは果して如何であらう。僥倖を希ふ國民は必ず勤勉心に乏しい。確乎たる獨立心が少ない。斯る國民は決して競爭場裡に立つて勝を得るものではないのである。獨立の手腕に賴ることの出來ない者は先づ父母の遺產に賴らんとする。富豪の娘を娶りて其後援を借らんとする。然れども吾人は獨り此等の青年を酷評するのは甚だ不公平であると思ふ。福引國民、富籤國民、競馬國民の中より斯る腰拔青年を出すのは寧ろ至當の事ではないか。吾人の希望する所は一切僥倖的の事を排除するにあるけれども、若し今日これを實行することが出來なければ、せめてはこれを減少するの策を講じたい。健全なる國民を造るの秘訣は一に自己の手腕に依賴する所の青年を養成するに在る

余は拙著「理想の人」の中より左の話を拔き書きして此一節を結びたい

よくは記憶しないがレムブラントといふ有名な畫工のことであつたと思ふ。一日彼の知人が來つて金儲の相談をした。其當時は未だ科學が進んで居なかつたから、鉛や錫を化して黃金となすとの出來ると

いふ空想に耽つて居た者もあつた。其知人も空想者の一人て、株式會社の樣なものを設立して黃金製造を始めたいから、レムブラントにも其株主に加はることを勸めて來たのだ。然るに彼の返答が面白い。『余は煉金術に聊かも興味を有しない。余は書に依つて大金を儲くることが出來る。余の筆の觸るゝ所化して黃金となるのだから煉金術の力を借るに及ばない』

吾人は此書家が斷乎として煉金術を退けたるが如く、あらゆる投機をば一喝の下に退けたいものだ。

△如何にして投機熱を除去すべきか

泥棒は餘り有利な職業てはないと或囚人が語つたそうだが、一度に多くの金銀衣服を分捕つて來るだけを考ふれば如何にも甘い話の樣てあるが、アレ丈の苦心を以て正業を營めば却つて多くの利益が得らるゝに相違はない。投機をやる者も同樣て、アレ程の熱心を他の事に應用したならば如何てあらうか。吾人は救濟の第一法として福引や富籤の實に馬鹿々々しきことを説明せねばならぬと思ふ。福引の如きは言ふまでもなく商店が顧客に無代價て與ふるのてはない。桐箪笥ても、其等の價はチヤンと我等が購ふ所の代價の中に含まつて居るのだから顧客全體から見れば少しも利益になつて居ない。商店の方から見れば少しも損失になつて居ない、富籤の如きは何千人に一人とか何百人に一人とかいふのだから、之に當らうなどゝ慾張るのは隨分お目出度話だ。殊に獨逸の富籤や臺灣の富籤の如きは掛金の半額は引き去られて殘りの半額だけが籤を購ふたる人に分配せらるゝのてあるから、買手全體より見れば千圓を拂ふて五百圓だけ返して貰ふ譯になる。隨分詰らない話てはないか。然し此等の理屈を說法しても餘り効能がないから、余は左の事をなるべく多くの人に願いたいのてある。

(1)兩親たる者は自ら投機的たる事に手を出さゞるのみならず、其子女に訓へてこれを嚴禁すること

(2)小中及び大學の敎師は學生に投機心の甚だ野卑なるものてあることを叮嚀懇切に敎ゆること

(3)新聞紙が各自に福引制度を採れば殆んど自由競爭の手段としては効力がなくなるから、寧ろ協議して一切福引投票の如きことを廢止すること

(4)政府は國民の利害をよく考へて、先づ勸業債券の抽籤を廢し、其他競馬に關する賭博の如きものを全然廢止すること

投機熱の流行は決して看過すべき問題でないと思ふから、余は先づ本誌に其卑見を陳べて讀者諸君の賛助を得たいのである。

次號の本欄には**徳富蘇峯氏**、**中島徳藏氏**の論文掲げらるべく、其他**新渡戸稻造**、**谷本梨庵**等外數名家に寄稿の依頼中なり



大西洋艦隊の廻航

山縣五十雄

米國の大西洋艦隊は愈々昨年十二月十六日を以て太平洋廻航の途に上りたり。浮べる城の如き戰艦十六隻、堂々として長さ四哩にわたる列を爲し、折好くも麗らかに晴れ渡れる冬の青空を戴きて、青き浪を蹴破りつゝ船首に銀の珠玉の如き泡を立て、喇叭の音、軍樂の調子も勇ましく、祝砲の響轟き渡るうちに、快艇メーフラワー號に座乘せる大統領ルーズヴエルト氏の見送りを受けて、艦隊は一萬四千哩の長き航海を始めたり。司令長官エヴアンス少將以下乘組の將校兵士等意氣軒昂ならざらんとするも得べけんや。彼等が歡呼の聲は實に海水を沸騰せしむるばかり盛なりしと報ぜらる

るも寔に宜なりといふべし。

此歷史的廻航につきての米國人の感想は、吾人旣に前號に於て其一斑を講究したり。今は歐洲諸國の論評につきて少しく見る所あらん。

英國の論評

倫敦の週刊雜誌『アウトルック』は米國の此擧を以て政治的意味ありとなし、進んて、

太平洋沿岸の諸州が發展したる事、米國が布哇を併有したる事、非律賓群島を買收したる爲め極東に於ける米國の商業が發展したる事及び日本が新に强國として勃興したる事は米國今後の運命に非常の影響を及ぼし、將來の戰場として米國の注意を要するは大西洋に非ずして一太平洋となれり。

と論じて、此等の理由及パナマ運河の軍略上非常に大切なることを示し、且つ現在の海軍力は大西太平兩洋の沿岸を防禦するに足らざることを國會に示すが爲めに、此艦隊の廻航は企てられたるものなるべし、されど亦日米の關係面白からざるものあるが故にも因ることとなしとは思はれずと評したり。

又倫敦の『サンデー、オブサーヴアー』誌は述べて曰く、

此廻航が日本の興起に對する威力を以ての政治的偵察なるは明白なる事實なり。蓋し艦隊の任務は米國の武力を表彰し、且つ米國の國民は飽くまて其利益を保護し且つ發展するの意思を有する事を表白せんが爲めに太平洋へ米國の國旗を携へ行くに在り。されば此擧は恐嚇にして且つ頗る無分別なるが如く思はる。吾人は恐る、米人にして若し日本人の耐忍强きをよき事となし、餘りに專橫の行動に出づるならんには、遂に大に悔ゆることあらん。兎にも角にも此廻航には一大危險の潜めることを否むべからず。

有名なる『評論之評論』記者ステッド氏は艦隊の廻航を以て米國にとり策の拙なる者なり、米國はこれが爲に却て日本の制肘する所となるべしと評せり。其理由として左の意味の如き頗る奇拔なる意見を立てたり。

大西洋艦隊が太平洋に在るの間、日本は何時にても之を襲擊し得る機會を有す。日本は恰も米國より高價なる此艦隊を質として收め得たるの觀あり。故に米國は艦隊が太平洋に在るの間、其艦隊の價だけ日本に憚る所なからざるべからず。

最も無遠慮なる論評を試みたるは倫敦の『グローブ』新聞にして「ロビストヴエンスキー第二世」と題する論文の中に於て、エヴアンス少將を以て露國の敗將に擬し、筆を極めて廻航の拙策なる所以を論じたる後、左の如き痛快なる評を下したり。

一萬三千哩は一の戰鬪艦隊にとりて甚る長途の航海なり、吾人はエ

ヴァンス少將の率ゆる諸艦が其目的地に到着したる時に其狀態が今日の如く良好なるべやきを疑はざるを得ず。南米の極端ホルン岬は風浪順る嶮にして航海甚だ危險なる所、幸にマゼラン海峽のあるありて、其危險を避くることを得るも、其海峽も亦一萬六千噸の大艦が全く安全に通過するを保し難き所なり。大艦の底には介殼甚だ速に生ずれば大西洋艦隊が豫定の如く太平洋に廻航して、メキシコ沿岸のマグダリナ灣に集合する頃には、其速力大に減ずべし。而して艦隊は此灣に於て現在の太平洋艦隊と聯合する筈なるが、吾人は日本人が此聯合を以て彼等に對する挑戰と解することなからんことを誠實に希望す。もし彼等が然か解するならんには、そは世界にとり思ふだに恐ろしき一大災害となるべし、何となれば彼等は必ず先づ行動して然る後にこれにつきて論議すべければなり。國會又は其他の所に於て其名譽につきて論議するは彼等の習慣ならず、彼等は其名譽を傷けられたる場合には直に斷然として有効なる行動に出づるを常とす。米國の水兵は其任務に熟練して勇氣に富み、エヴアンス少將は大膽にして且つ戰術に長けたる司令長官なり、然しながら日本海の勝者はエヴアンス少將が嘗てサンチアゴに於て擊破したる西班牙人とはいさゝか撰を異にし、東鄉大將は西班牙の敗將セルヴエラ中將とは種類の異なりたる敵將なり。大西洋艦隊の長途の航海が大膽なる敵に如何なる好機會を與ふるか、又彼の如き大艦隊を其航海中完全に保つことの如何に困難なるかは、エヴアンス少將が何人よりもよく知る所、日本人は此擧を以て例の米國流の空威張りとなして一笑に附するやも知れず、吾人も亦彼等が然かせんことを希望すれども、然れども彼等が全く異なる見解を取ることなしとも言ひ難し。然る場合には大西洋艦隊の廻航は樂しき物見遊山として終ること六かしからん。

佛國の論評

大西洋艦隊の廻航に對する佛國人の見解は樂觀と悲觀との二樣あり。樂觀派の考ふる所は佛國人多數の意見にして、日本は此擧につき米國に對して何等不快を感ずべき理由なし、刻下兩國間の形勢には全く危險の分子なしとはいふべからざるも、葛藤は必ず平和に落着するならんといふに在り。悲觀派の主張する所は、日米兩國の間に蟠れる葛藤の眞因は移民問題に非ずして、日本人が太平洋を制御せんと欲するの野心なり、故に若し日本人がいつ迄も此野心を捨てざるに於ては日米兩國の衝突は到底避け難しといふに在りて、此派の一名流は左の如く論評せり。

大西洋艦隊が太平洋に行くは米國をして日本と同等の位置に居らしめ、日本の要求に對し强硬なる返答を爲さしめんが爲めなる事は今や殆ど公然たる外交上の秘密なり、日本にして遠大なる計畫を有せざるに於ては即ち可なり、有するに於ては遂に大事とならん。

獨逸の論評

獨逸は近年頻りに米國に向て秋波を注ぎ、常に其歡心を得んことを努む。大西洋艦隊の廻航につきて、獨逸の諸新聞が筆を揃へて、其成功を祈るは當にあるべき事にして、該艦隊が航海頗る困難なりとの聞えあるマゼラン海峽を安全に通過するや否やにつき、一樣に心配らしき氣色を示したり。廻航の政治的意味につきては、海軍の事項につき最も精通せりと謂はるゝエルネスト、フオン、レウエントロウ伯述べて曰く、

該艦隊が桑港に到着したる後、如何に配置さるべきかは頗る興味ある問題なり。若し非律賓に派遣されなば、極東の平和を維持し且つ米國が該群島の永久的保有を確實にすべし。然れども若しそれが米國の西海岸に留めおかるゝ場合には、日本の非律賓若くは布哇に對する野心を防止する能はざるべし。蓋し軍略的及び政治的見地によりて判斷すれば、艦隊が近き將來に大西洋に歸還すること萬々無かるべし。米國政府が之を太平洋に送るは單に練習の爲めにするに非ず、一の政治的行動にして、今後十年間危險は大西洋方面より太平洋方面に多きことを認知したるに因るなり。種々の事情は實に吾人をして米國と獨逸とが海上に於ける危險の場合に互に相助け合はざるべからざることを思はしむ。

と。見るべし、如何に獨逸の策士等が日米を離間し、其國と米國とを親近せしめんと腐心するかを。

露敗將の論評

敗軍の將は兵を語るに足らずと云ふと雖も、兎にも角にもリボウより遠く對島海峽迄ボルチック艦隊を廻航するに成功したるロゼストヴエンスキー中將が大西洋艦隊の廻航を評するの言は全く興味なきにあらず。中將は該艦隊が愈々拔錨したりと聞くや、一新聞記者との會見に於て、廻航の實行し得べきを說き、左の如く語りたりと報ぜらる。

大西洋艦隊の廻航は平時に於ても亦戰時に於ても共に安全に行ふことを得べし。石炭積入につきては、多くの安全なる港灣のあるあり、而して南米諸政府がこれに干涉する患は毫もこれあるなし。マゼラン海峽の通過は熟練なる司令官に何等の困難をも與へざるべく、夏時に於ては殊に容易なるべし。ボルチック艦隊の廻航に當りては石炭積入を洋上に於て爲さゞるべからざりしが、大西洋艦隊には此困難あるなし、エヴアンス少將が出會ふべき唯一の困難は、其率ゆる各艦を豫定の時に豫定の碇泊處に集合せしむる事にあるべし。器械的缺點の爲めに各艦の速力に多少の遲速を生ずるは免れ難き事にして、遲るゝ者を落後せしめざるやうに計るは頗る骨の折るゝ仕事なるべし。英國の艦隊は其實力世界に冠たりといふと雖も、猶ほ近頃の演習中落後の諸艦を捨て去らざるを得ざりき。斯の如きは實戰の際非常の損害なるなり。

中將は最後に恨み重なる我國に向ひ、左の如き評言

を放ちて一矢酬ゆる所ありき。

此航海は艦隊の全部を均一の武器となすに頗る効あるべく、且つ日本人の野心を抑制するに與りて大に力あるべし。此計畫の發表されし以來彼等の慢心は著るく減縮したるに非じや。

一世紀間の世界の進歩

テニスンの詩中に「世界は成長し又成長す」(The word grows and grows) なり一句あり。これ實に眞を言へるもの。「世は澆季となれり」とは人のよく言ふ所なれども、實際に於て世界は精神的にも將た物質的にも進歩し成長しつゝあるなり。宗教的迫害の殆ど跡を絶ちたる、慈善事業の進歩し普通したる、赤十字組織萬國平和會議等に博愛主義四海兄弟主義の現はれたるいづれも人類の精神的進歩を證するもの。物質的進歩も亦同樣にして、殊に第十九世紀に於て最も著るきものあるを見る。

近頃米國政府の統計局は世界の交通運輸に關する一冊子を公にしたるが、其中に一千八百年より一昨年に至る迄百六年間世界の人口、商業、生産及び運輸が進歩したる狀況を表示したるものあり。紐育のサン新聞は之を拔萃して述べて曰く、

一千八百年に於ける世界の人口は六億四千萬なりしと計算さる、之を一昨年世界の人口十六億に比ぶれば、百餘年間に於ける世界の人口增加の割合は十五割なり。即ち一世紀と六年の間に十八の世紀と更に紀元前幾世紀かを經て六億四千萬となれる世界の人口が、九億六千萬を增加したる次第なり。一千八百年に於ける計算は推測に出づるものなれば、正確ならざるが如しと雖も、其後に於ける增加の割合を參照すれば、大なる誤謬ありとは思はれず。其割合は如何といふに、一千八百年に六億四千萬なりしもの、一千八百三十年には八億四千七百萬となり、一千八百五十年には十億七千五百萬となり、一千八百八十年には十四億三千九百萬となり、一千九百年には十五億四千三百萬となり、更に一千九百六年には十六億となれるなり。

第十九世紀に於ける世界人口の增加は斯の如く驚くべきものなれど同じ百年間に於ける世界商業の發達は更に驚くべし。第十九世紀の初年に於ける世界の商業は總額僅に十五億弗弱なりしが、其終年に於ては二百億弗以上となれり。一千八百年の世界の商業の頭割額は三弗二十一仙に過ぎず然るに一千九百年には十三弗二仙となり、一千九百六年には十六弗五十仙となりて、其總額は二百六十五億弗に上れり。而して此世界の商業を行ふに要する船舶は一千八百年に於ては其の總噸數四百二萬六千噸なりしが、一千九百六年には八千九百八十四萬五千噸に增加し、鐵道の哩數は一千九百六年に於て五十六萬七千哩に達し

て、殆ど其半は北米合衆國に在り。石炭の產出額は一千八百年に於ては一千一百萬噸なりしが、一千九百六年には八億八千五百萬噸となり、鐵は五十萬噸より四千七百五十萬噸に增加したり。

サン新聞は此等の驚くべき世界の進步の實例を擧げたる後、人口過多の爲め世界が困難するとあるべしとの悲觀說を排斥して左の如く說けり。

世界の人口今日の半數にも及ばざりし頃、既に高名なる學者思想家のうちには、世界の人口漸次に增加して過多となる曉に一大災害來るべしとの杞憂を抱く者ありしが、今日人口の增加斯の如く大なるにも係はらず、いまだ何等の災害も來らず。若し亦今日猶此種の杞憂を抱く者あらば、其人口は次にいふ二つの事實によりて安心すべし。其一は即ちいまだ開墾耕作されざる土地が猶ほ多く殘れる事にして、他は土地の生產力が多大に增加され得る事なり。若し今日の人口增加の度合連續せば今後三四百年を經たる後、世界の住民は或は少し手狹に感ずることあらん、然もこれが爲めに彼等の多數が此世に告別せざるべからざるが如きことは萬々なかるべし。

英國社會黨首領の日本觀

讀者諸君は昨年の秋の頃英國社會黨の首領ケーア、ハーディ氏が我國に來遊したる事を記憶せらるゝなるべし。氏は日本を辭したる後、印度に遊び、次で濠洲を訪ひたるが、同國に於て一新聞記者の質問に答へて、我國に對する觀察を左の如く述べたりといふ。

日本の發達は甚だ速かなり、今後二十年間は同國にとりて頗る多忙なると共に又甚だ苦しき時期ならん。元來日本人は政治に參與することなかりしが故に、慣ひ性となりて政府の命に盲從するを常としたり近頃の軍事及び實業の方面に於ける發達に於ても亦然り。然れども今や彼等は覺醒し始めて、各々其選ぶ所の首領に從はんとしつゝあれば遠からずして能力ある民主勞働運動は同國に起るべし。

ハーディ氏は「日本人は皆帝國主義に心醉し、濠洲加那陀の如き海外に殖民せんとするの野心を有するや」との問に對して答へて曰く、

一般の人民はかゝる野心を抱藏することなし。日本國民が刻下最も腐心しつゝあるは人民の要するだけの食物を何處に得べきやといふ問題なり。余は人民の間にありて所謂帝國主義を感じたることなし、元來日本人は平和を愛する國民なるなり。

英國名士の日本觀

ハーデー氏の我國に對する觀察と相並べて吾人に多大の興味を覺えしむるは英國下院議員ヴイリアース氏の觀察なり。氏も亦先頃我國に來遊したりしが、氏に最も強き印象を與へたるは東洋人の繁殖力の强盛なる

事及び日本に於ける勞働問題の將來なりし由にて、前者につきて氏は「濠洲、歐洲及び米國の白人種が今にして多數の兒女を有する事の極めて大切なるに心付かずんば、久しからずして淸國、日本及び印度は優勝の地位に立つに至らん」と述べ、後者につきては左の如く論述したり。

日本の資本家は久しからずして勞働者と衝突するに至らん。日本に於ては賃銀頗る廉價なるが爲め、資本家の得る所の利益は法外に多大なり。されば勞働者が團結して賃銀の增加と其狀態の改善とを迫るは遠き將來の事に非らざるべし。此の如き資本家對勞働者の大衝突を防止するの途は、勞働者をして利益の分配に與らしむるの他なし。

ハーディ氏といひ、ヴイリアース氏といひ、共に我國に遠からずして勞働問題の盛に起り來るべきを豫言すること斯の如し。我國の經世家たる者大に注意せざるべからず。

南米の排日論

北米に於ても濠洲に於ても我移民は激烈に排斥されつゝあり、之に反して南米の諸國は廣く門戸を開きて彼等を歡迎するならんとは吾れも人も常に想ふ所なりしに豈に圖らんや此處にも亦排斥の聲を聞かんとは。智利の有力なる一新聞『エル、マーキュリオ』は、先頃太隈伯が或所に於て演說せしうちに、「日本の陸海軍は裝飾の爲めに備ふるに非ず、吾人は須く之を利用すべし、吾人が我國の商業を海外に擴張する爲めに之を用ふるは正當なり」との意味を述べ、智利、秘魯、墨其哥は今後日本の勢力範圍に加へらるべき諸國なりと論じたりと報じたる後、智利國民の輿論は日本人の移住に反對なりと斷言して、左の如き論評を附加したり。

日本の帝國主義に伴ふ危險の影が現はれ始めたる今日、南米の諸國が相互間の關係を强固にし、モンロー主義の本家なる北米合衆國と密なる關係を結びて、日本人の野心に對し正當なる墻壁を築くは刻下の急務なり。

我國の人口は年毎に五十萬以上增加しつゝあり、而して斯の如く我が移民は到る處に於て排斥せられんとす今後益々困難となるべきは實に此の海外移民問題ならん。

説苑

現代人物評論（一）

原敬論

△原敬公

福本日南

反省社遙に電を寄せ書を寄せて、我に敬公論を求む。昔我の公と同窓の舊あるを思ひてならん。内に在りて朋友に切々偲々たることは、我も亦人後に落ちざるも外に向ひて朋友を品騭評論するまで、我は生來蠻勇を有せず。論は御免なり。謹んで之を辭す。然りと雖も反省社諸同人も亦朋友なり。一併に其求を拒斥するも何となく缺ぐるものあるやの情あり。已むこと無くんば、敬公との舊を言はん乎。

敬公の法學校に入來りしは、中途よりなりしと覺ゆ。蓋し公は外國語學校より移轉したり一人なりし歟。公は我等より長ずること兩三年、當時の風丰尙目に在り。其色白皙、其長偉大、丹花の唇、蛾蠶の眉、鬒髮を梳りて佛分けにし、校の制帽制服を着けたる其意氣ナ、今語を以て之を謂へば、蓋し高襟（ハイカラ）の上々なる者なりき。加之其性俊敏、學才よりも世才に通じ、誦讀（レシテーション）よりも辯說に長じ、我等は歐語の百語を記取しながら、其十語を使用するだに囁嚅せしも、敬公は僅々十語を背誦し得れば、之を二十語に應用するに靦面あらず。嘗て聞く、故中井櫻洲の始めて倫敦に遊ぶや、英語といへば、未だ二三十の單語を記するに過ぎざりしが、一日知友を訪ひて、歸途一英人に邂逅せり。其人も亦櫻洲の知友を往訪せんとする者なりしかば、其家は何處なるやと立問せり。櫻洲之に答へんと欲するも、生憎是より第三軒目の家なりといふ語を習得せず。乃ち手を擧げて列屋を指點しながら、ツーディ、ツモロー、アフター、ツモロー、ハウスと叫びたるに、問者言下に之を領會し、拜謝して去りたりといふ。今日、明日、明後日の家、尙第三軒目の家を說明するに餘りあり。當時傳へて櫻洲の頓才を稱したりと。敬公の頓才頗る之に幾きものあり。後年早くも櫻洲に知られ、櫻洲の駙馬となりたるの偶然ならざるを見るに足らん。

友の類を以て聚まるは、生物の天則なり。我同窓も

亦此天則には漏れず。我等バンカラ自ら一黨を爲し、敬公等ハイカラ亦一類を爲したるが、敬公は其類中の領袖なりき。我等は公を字して政事家と名けにき。當時我等が此綽名を加へたる、其意義は今日必らずしも言はざるも、是れ此惡戯が好識を爲し、百有餘名の同窓中、唯彼れ一名が今日國務大臣となりたるを視れば書冊を挾みし書生中より、兎も角も政事家の或素質を有せしことを回想するに餘りあらん。

敬公と我等とは出發點より既に其カラを異にしたれば、最初は彼我ともに極めて疎遠の裏に在りき。居ること久うして、第四學年の初期なりしと覺ゆ。我等一夕賄騷動を惹き起して、證人預となりたる事あり。事の起因は、法學校の賄某が日曜の晩は食卓に就く者の尠なきを豫期し、多く飯を炊ぎ置かざりしに、我等の一黨が不意に歸り來り、急に晩餐をと求めたれば、飯と副菜と贍給せず。我等は不平滿々たる間に一先づ食事を了りたるも、賄の横着は擱かんと欲するも得ず。是に於て我は一黨を會して議を建てたり。如何に官費の學校なればとて、生徒の腹を乾して學問せよとはいはざる可し。飯の足らざるは諸君の共體する所なり。去來是より飯を炊かせ、溫かいので一杯遣らんと。一黨贊成して食堂に聚まり、夜半の十二時頃カン〱とランプを輝やかし、賄を征伐して、終に第二の晩餐を催し、人々快哉を叫びつゝ、馬食する眞最中を、幹事に見出され、秋月左都夫、加藤恒忠、陸實及僕以下校則に照されて各々禁足を命ぜらる。我黨之に大不服を唱へ、喙を尖らして爭ひたるも、當時の校長植村氏は薩摩ボーにして、頑たること塊鐵の如く、校則一點張にして、寸毫も我等の主張を容れず。我等は乃ち一歩を讓り、左樣校則が許さずば、形而下の禁足には屈從せん乎、形而上に於て心服は仕らずと。是に於て大激論は起り、曰く心服せよ、曰く心服せずと。論難數回を重ねしが、不心服の結果は終に各自の證人預とはなれり。是時在校の同學は硬軟二派に分れたるが、敬公日頃のハイカラにも關はらず、深く我等に同情を表し、善く同學の間を周旋して、學生の輿論を纏め、自ら輿論の代表者となりて、校長と應答し、進みては當時の司法卿大木伯にまで陳情し呉れたり。是に至りて我等の一黨も深く其好意に感服し、忽ち親善の間柄となれり。顧ふに敬公が一代の政事的運動の第一試歩は此賄騷動善後策の一擧に在りしならん。後年彼が善く政友會の輿論を綜攬したり

しより換骨し、又彼が巧に元老の歡心を惹引するの働は、當年校長司法卿に交渉したるより脫胎し來りしならん。公が政事家の天性は愈々益々見る可きには非ずや。

但だ彼賄騷動は結局我等の敗北に了りたり。我等の證人は孰れも皆六ケ敷事を言はずと歸校せよと强ひ、校長は依然心服論を擲たず。而して當年我等の青襟天窓には早くも多少の自由主義(リベラリズム)は托宿せり。面白く無いネー、ウン面白く無いネー、併し父執の證人に此上楯つくも如何がなり。一先づ歸校して、折を見合せ、個々ばら〳〵に退校す可しとは、我等數名の協約に入れり。是時敬公も亦其調停の奏功せず、校長の頑冥に慊焉たるの結果、亦協約中の一人となれり。前後は忘れたるも、後一年間に敬公、加藤、陸、我等、皆其約を履み、官費を離れたる浪人書生の身となれり。敬公が政事的生活は實に此際より胚胎せり。當時世上に流行り出したる謠に「梅が枝の手洗鉢」節あり。拓川、羯南及我等之を試みるも、白居易の所謂嘔啞嘲哳にして、皆韻を爲さず。唯其調子の巧妙にして三絃に合し、彈奏を俱にす可きものは、獨り敬公ありしのみ。後ち十年にして梅が枝の敬公は手洗鉢として藩閥の長老井上伯を獲たり。叩いて一代の運命を出せり。彼れの身受けせられて辨理公使となり、政務局長となり、遞信大臣となり、內務大臣となりたるも、元はといへば、此手洗鉢を獲たりしに職由せり。彼亦一代の才物には非ずや。

劉君旣に志を得たり。予陵其門を音づるゝに懶うなり。十餘年來相見ざること參と商とに譬へん乎。去りながら當年放逐と廢學との同窓に、其頃組織せられたる放廢會は、無形なる各自の心頭に尙遺存せり。放廢は即ち豐沛に通ずとは、當時氣を負ひたる我黨の誇矜なりき。是れ此放廢會を幾年前なりし歟敬公が遞信大臣の官邸にて催しゝとあり。加藤拓川も來れば、國分靑崖も來り、陸羯南も會すれば、中原鐵蕉も會したり古賀警保は無事に大學を卒へて、法律學士となりたる者なれど、是非にと入會を希望したるより特に會員たることを得るの名譽を與へて、此會に列しにき。相見れば、才も不才も無く、倶に二十餘年の學生に落つ。快感の五內を環るを覺へず。今日此地當年の佳會を思へば、早くも會中の一人羯南を缺げり。衷懷愴然たらざるを得んや。

顧ふに落拓たる東北の書生より起り、閥老の知る所

となり、終に內務の顯地に立つまでには、マキヤヴエリーの君論を袖珍の秘書とする必要は、惜に免がれざりけらし。是に由りて世上の毀誉は今も一身に四集すらん。我等は之を問はんと欲せず。但だ彼れマキヤヴエリーは警語を遺留して、目的は手段を正當にすといへり。君や既に一大政黨の一立物となり、同時に內閣一領袖となりたる以上は、蹭蹬二十餘年のポリチシヤンより、オンムデタとなることを思はざる歟。政事家の境を脱出して、國士の地に立たんことを願はざる歟。天下は多事、身世は知命、幸に邦家の爲に、其れ加餐自愛せよや。

△原敬氏の人物性格

匿名氏

匿名氏は『桂、西園寺時代』の『無名氏』を評して、餘程老辣なる黑う人なるべしと云へり。知らず、桂西園寺時代の無名氏先生も亦『匿名氏』に許すに老辣なる黑う人を以てするや否やを。（編者識す）

原敬と云ふ人は稍々ともすれば世間から誤解せられる傾向があります。陸奧伯に引立てられた非常の利れ物、非常な敏腕家の如く言はれてゐると同時に、亦陸奥の樣に權謀術數にも長じた人と想はれて居る。政友會反對の人々は或は渠を以て自黨の利益を計り反對黨の抑迫をやる場合には、隨分陰險な手段をも用ゐることを辭せざる人の樣に想ふて居る。昨年縣會議員改選の時にも一派の人からは渠が表面何等の干渉をしなかつたが、其の實陰然地方官を指揮して反對黨を困しめたかの樣に猜せられた。それが爲に大分貴族院邊の御機嫌を損ねた樣である。

併し私に言はせると、彼の人は一派の人が想ふ樣なさう陰險なる權謀家では無い。寧ろ豪直で、潔癖で、細心周匝て、常にリーゾナブル(合法的)の手段を採らんとする冷明な事務家である。彼の人は元來が法律出身の人で、故陸實だの、福本日南、蒲生仙、加藤恒忠だのと一所に、司法省の法學校に學んだもので、其の頃學校にストライキが起つて、多數の學生が退校を命ぜられた。原氏は自身ストライキには直接何の關係をも有し無かつたが、親友の不幸を座視するは義に於て忍びずとして、陸などと共に大に爭ふて、とう／＼自分も退校を命ぜられた。則ち友人の爲めに退校の側杖を喰ふことを辭せ無かつたので有ります。こゝいらが彼の人の眞の性格であつて、陰險だとか狡猾だとか評

するのは、評する者が善く原氏を知らぬからであらうと想ふ。原氏は元來根が正直な處へ法律をやつた。冷明（クリアー）な頭腦は愈々合理的（ロジカル）に成つて、自個の言動にも非論理的（イルロジカル）を許さぬと同時に、他人に向ても亦容易に理窟の脫線を默許することが出來ない。のみならず渠は遠慮會釋もなく峻酷なる反擊を降すを常とする、多分此點が世間から陰險家の樣に誤解せらるる所以でありましよう。頭腦はクリアーである、判斷は迅速である、やらうと想ふ場合には一歩も曲げずに遣つてのける、こゝいらが世間からは非常な辣腕家の樣に想はるゝ點てしよう。成る程渠は有數の利れ手には違ひ無からう、併し權謀家と云ふ柄の人では無い、唯だ冷明な頭腦を潜つて來た理窟を正直に、或る場合には強情に通さうと云ふ人で、此の點は善く加藤高明に似て居ると想ふ。

渠は東北人であつて、而もよく東北人の惡口を言ふ人である。故に東北人は餘り渠を悅ばぬ、渠の故鄉盛岡では、郡長をして居る渠の實兄の方が寧ろ渠よりも一般の氣受が善いと云ふ話である。一體東北人は喧しい理窟などには一向拘泥せぬ甚だ不得要領の人種てある。之は渠が嫌はずには居られない所なのであらう。渠は東北人としては多少風變りの男と云ねばならぬ人物である、併し渠にも矢張東北人の通性を喪はぬ所がある。正直であつて、往々自個の利害線外に脫出してまでも、他人の爲に盡したがる風の見えるのがそれである。

然るに原氏が稍々もすれば世間からは險辣な手腕家の樣に誤解せらるるのは何故であらうかと云ふに、之れは渠の過去の行徑が如何にも幸運であつたからであらうと想ふ。

渠は司法省の法學校を退校してから、暫らくはのらりくらりと遊て暮らしたもので、此の時分には隨分放蕩もやつた、歲も若いし色男ではあるなか〳〵持てたものだ。間も無くして渠は報知新聞——矢野時代の報知新聞——に這入つた。當時報知新聞の編輯局は上局下局と云ふ妙な區別を立てゝ居つた。一體當時の矢野龍溪はいやに官吏臭味を帶びてゐたもので、之が爲に改進黨部內でも平民派の沼間などとは善く衝突した、此の上局下局と云ふ區別も矢張矢野が官廳の事務所的に遣らうと云ふ趣意から來たものである。上局は專ら政治だの外交だのを論議する處で、故藤田茂吉、箕浦勝人、尾島行雄、犬養毅、など云ふ連中が居つた。下局はまあ今の雜報書きである、矢野は原を此の下局に入れた。年少氣銳の原敬、雜報書きには少からず不平

である。機に觸れて鋒鋩を顯さうとする、議論も遣れば論文も書く、併し此の論文は屢々矢野の爲めに沒書せられた。渠は矢野に對して益々不平で不平で堪らず一時は報知新聞を去らんとした。

丁度此の頃である、渠は渡邊洪基に知られて、渡邊の東北漫遊に隨行した。當時渡邊と云ふ人は新聞紙條令だの集會政社法だのを立案したので、民間からはひどく憎まれて居た。報知社では原が渡邊の如き藩閥の爪牙に款を通じたのを甚だ面白からず想ふてゐたが、東北漫遊がすんでから、原は平然として報知社に還つて來て、依然筆を執つたので、大に社中の物議を起した。

こんな事で原は報知社が益々面白くない。處へ丁度此の頃大坂に太東日報か出來たので、原は其の主筆として大坂に往つた。大坂に行くや否や渠は直ちに『吾輩が報知新聞を去りたる所以を論ず』と云ふ文章を書いて、凄まじい氣焔に多年の溜飲を下げたのである、併し渠の大坂行きは報知社の舊同志からは、依然一種の變節を以て目せられて居た。果して渠が舊閥に節を屈したものであらうか、どうであらうか、私はどうもさうとは解しない。寧ろ年少氣鋭で氣を負ふた渠は、下局の雜報書きには不平で不平で堪らぬ、頭を抑へられずに何か獨立で仕事をやつて見たい。こんな所から多少面當て的に渡邊にも隨行し、大坂へも往つたものと見るのが、寧ろ當時の眞相であつただらうと想ふ。

兎に角渠が報知を去つて大坂に往つてからは、一時政黨と干係をする機會が中絶した。恰かも此の時朝鮮には江華事件が起つて、井上が往くことに成つた。原は太東日報の通信員として、井上の一行——齋藤修一郎、中田敬義等——と一所に成つたので、此處始めて井上に接近するの機會を得たのである。處が渠は此の機會を空しくしなかつた。間もなく齋藤の周旋に依つて、外務省御用掛りと成り、天津領事と成り、次て佛國公使館書記官と成つた。かくして渠は佛國には大分長く居つたのである。

それから陸奥が亞米利加から歸つて來て、伊藤内閣の外務大臣と成つた時に、渠は後來陸奥伯とは切つても切れぬ間柄と成るべき端緒を開いたのである。尤も陸奥と原とは以前から識り合では有つたが、まださう深い關係では無かつたので有る。處が、陸奥が外務大臣となるや渠は一躍して通商局長に成つた。此の時の次官は今の林董て、政務局長が中田敬義。之れが當時

の外務省の三本柱と云はれた者だ。此の三人と陸奥との關係を言はうなら、林は陸奥の幕下と云ふよりも寧ろ友人の關係であつて、陸奥も充分林を尊敬して居つた。中田は先づ秘書役と云ふ格、獨り陸奥の帷幕に參して、萬事に腹藏なき相談を受けた者は原敬であつたのだ。

　渠は疑もなく陸奥伯には最も親しい幕下の利れ物であつたが、然らば一々伯の意に叶ふことばかりを遣つてゐたかと云ふに、なか／＼さうでない。渠には一旦かうと云ひ出すと何處までも通さねば置かぬと云ふ、強情我慢の所がある。之には隨分陸奥も持て餘した。併し渠の強情な主張は、何時でも一旦冷明なる判斷を潜つて來て居る。渠は強情なると同時に亦極めて聰明である。故に渠の強情な主張が行はれた場合でも、行はれなかつた場合でも、之を事後の事實に照らして見ると、多くは渠の立言の當れることを悟らざるを得なかつたとは、中田なども言ふて居る。此處が則ち陸奥の氣に入つて、深く信ぜられ、重く用ゐられた點であらう。

　日清戰爭後間もなく陸奥は病を得て外相を辭し、西園寺が代つた、西園寺は渠を朝鮮に、林を清國に遣はし、小村を入れて次官として、大に戰後絶東の善後策を試みやうとしたが、偶々伊藤内閣が倒れ、松隈内閣が出來て、大隈が外務大臣の椅子に就いた。強情な原は大隈の下に公使たることを潔しとしない。政府の許可も受けず、勝手に朝鮮から歸つて來て、大隈の前で勝手な豪語を吐いて、勝手に朝鮮公使を罷めたのである。こんな所を見ても渠が決して如才のない當世風のハイカラ才士でないことが解かる。

　渠は井上とは長い間の交際でもあるし、渠の妻君は故中井弘の娘で、娘の母は則ち今の井上夫人であるから、謂はゞ井上の婿分で、姻戚上の淺からぬ關係がある。世間では原が井上の意を受けて遣る事が多い樣に政友會は又井上を經て藩閥の一角に結び付てゐる樣に想像して居るかも知れぬ。勿論其傾向は多少ある、が原の強情には井上の老爺も持て餘してゐるのだとは、都築なども言ふて居る。どうも善く持て餘される強情である。

　強情は強情だが、此の強情は前にも云ふた通り、怜悧なる直覺を細かい理窟の網目に掛けて出來上つた一種の定見を、どこまでも通さうとする執着心に外ならぬのである。

渠は近頃政黨仲間に這入つてから、大分圭角が取れて如才なく成つたと云ふ評判である、或は幾分かさうでも有らう、が併し原と云ふ人は幾ら如才なく成つても、到底骨拔き鰌の樣な當世才士風の政治家に成れる人ては決して無い、渠の身中には曲くべからざる武士的の俠骨がある。渠の家は南部藩ては代々御用人を勤めた門閥家てあつて、渠の實兄なども今日なか〳〵地方て尊敬せられて居る名望家てある。渠が古川家の爲めに盡すのでも、單に自個の巾着の都合上からとのみ解するのは、當らざる酷評てあらう。必ずや陸奥伯の遺孤（古川家の主人潤吉氏）を輔けて、中外に過ち無からしめんと欲する、一片の武士的俠骨が餘程手傳ふてゐるのてあらうと想ふ。

渠は又陸奥伯に見たるが如き一種の執拗心、復讐心になか〳〵富んてゐて恐ろしく意地の強い人てある。一例を擧げやうなら、渠が大坂毎日社を去つた時に、或る人が渠の後釜に矢野龍溪を入れやうとして、旣に俸給の相談なども略々纏まつて居つた。處が、原は之を聽いて俄に駄々を揑ね出した、矢野を遣るならば乃公が還て往つて再び社長をすると云ふので、矢野の大坂往きはとう〳〵流れて仕舞ふた。之れには勿論矢野の如き時勢後れの仙人がと云ふ樣な腹も有つたのてあらうが、報知新聞時代以來、矢野の名はどうも渠の耳には快く響かぬので、幾分か江戸の仇敵を長崎てと云ふ樣な感を抱いたものかも知れない。

渠は今日得意の黄金時代に達して居る。疑もなく西園寺内閣の中心點てあつて、陰然副總理大臣の慨がある。内閣と政友會との楔子は言ふまでもなく原内相てあつて、渠は今日西園寺内閣の最も重要なる役割りを務めて居るのてある。さて渠には故星亨に見た樣な大きい手腕が有るてあらうかどうかは頗る問題てあるが兎に角今日の政友會には渠を除いてこれ丈けの役目に當るべき適當の人物が無いてあらう。渠の頭腦は飽くまでも冷明て、緻密て、行政上の手腕は政府部内でも評判物てある。政務の調作なども極めて緻密に遣るに係らず、又極めて早い。何時かも西園寺侯が政友會の爲めに鐵道の事を調べて見やうとして、其の調作を渠に託した、大分込み入つた調査て普通の人ならば大丈夫一週間も掛るべき處を、原は僅か一晩て調べ上げて大に西園寺侯を愕かしたと云ふ事がある。此の位てあるから今日西園寺侯は少々の事は安心して渠に一委して置いて、氣樂な晝寢も出來やうと云ふものてある。

處て、西園寺と云ふ人は、いつ何時政友會を止めぬとも限らぬ人である。渠の隱退後、原氏は善く政友會を率ゐて一方の首領ともなり、あわよくば他日内閣の組織も遣つて見せやうと云ふ丈けの人物であらうか、どうかと云ふに、其れはどうもさうで無いらしい。彼の人は腕は可なりに有るが、どうも度量が大きくない。今日西園寺内閣の副總理と成つて、非常に羽振りの佳いのも、實は西園寺と云ふ大きな大黑柱を背後に控えて居るからであつて、獨力ではさう偉い事の出來る人では無い。

然らば原氏は今日の政友會内閣の樣な藩閥と政黨との混同内閣に滿足してゐる人かと言ふに、決してさうでは無い、渠は故陸奥伯と同じく、矢張り純政黨内閣を理想として居る政治家の一人であつて、將來風の吹き具合で、どんな境遇に立たうとも、決して藩閥の前に膝を屈する氣遣ひは無い。飽くまでも藩閥に對して奮鬪を續けて往くだけの勇氣は充分持て居る、假令古川の一番頭と成つても、決して藩閥の奴隷に成ることを甘ずる樣な男ではない。

要するに原と云ふ人は、清濁併せ呑んで、どこ迄も獨力で大政黨を運轉して行かうと云ふ故星亭の樣な豪傑ではない。只だ頭腦の冷明な、緻密な、理窟ぽい、情實に拘泥せぬ、判斷に慧敏な、一旦言ひ出すと容易に後へは引かぬ執着心の強い事務家である。

冷明にして容易に感情に動かされぬと云ふことに就ては、面白い話がある。前年渠が外務省の政府委員として何か朝鮮事件の說明を遣つたときに、田中正造が今度の事變には何人程日本人が死んだかと質問すると渠はそらとぼけて少しは死んだだらうと答へた。此の冷淡なる答辯に朽鎮先生、怒るまい事か怒るまい事か手を戟にし双涙共に降ると云ふ勢ひで、烈火の如く吼り狂ふて、馬鹿野郞！國賊！とばかりに怒號した。其の勢ひの餘りに凄しいので尾崎行雄君の如きは、朽鎮は悶絶するに違いないと想ふて、介抱の用意までもしてゐたと云ふ、然るに御本尊の原敬は一向平氣の平左衞門で、澄ましたものであつたと云ふ話である。狂熱な田中正造と、冷明な原敬とは誠に佳いコントラストではないか。併し之れは渠の性質であつて、渠は凡そ馬鹿げた事、理窟に合はぬ事に對しては、甚だしく神經過敏で、いつも此の種の冷淡を以て酬ゆるか、眼下の者ならば、頭から叱り飛ばすのである。

渠は平素立憲政治家の態度には少からず注意する者

の一人である。政治は渠が家の系統的道樂であつて、此の道樂の爲めには隨分金を費ふ樣である。併し渠は極めて潔癖な士人氣質の男であるから、星などのやうに賄賂を取るとか、株式に手を出すとか云ふ事は毛頭ない。政治を利用して金儲けをしやうと云ふ陋ない根性は持つてゐない。只だ古川筋から得たる自分の金を政治道樂に費ふと云ふだけて有つて、之れが爲めに渠の家庭は極めて質素に暮らしてゐる。邸宅なども通商局長時代のもの其の儘てある。要するに渠は故陸奥伯と共に、子孫の爲めに美田を買はざると云ふ主義の一人てあらう。

△原敬氏を論ず

石川半山

維新の變亂に依て、日本は優勝者たる薩長の手に歸し、劣敗者たる東北人は、久しく政治上に其の頭角を現はす能はざりしが、近年に至て四個の人材は、東北より出て頗る花やかなる活動を始めたり、曰く平田東助、曰く原敬、曰く齋藤實、曰く後藤新平、即ち是れなり

是等四個の人材は、其の劣敗者たる東北の出身なるに、果して如何にして政權に近き、遂に能く政治上の一勢力となるに至りし乎、他なし、結婚政略を用ひし者なり

平田氏は長閥の女婿となれり、齋藤氏は薩州海軍の元勳仁禮景範氏の女婿となれり、後藤氏は安場保和男の女婿となれり、而して原敬氏も亦薩閥の元勳中井弘氏の女婿となりて、政權に近くを得たる者なり

原氏が如何なる人の子にして、如何なる家庭に於て如何なる敎育を受けしや、我輩未だ之を詳かにせず、唯彼れが盛岡の人にして、其の靑年時代に司法省の法學校に學び能く佛語に通じたるを聞けり、其の後新聞記者となりて、時事を評論したることあるを聞けり、今日よりして之を想望すれば必ず一個の秀才たりしならん、而して中井氏の女婿となるに及んて、彼れは先づ外交の方面に入り、遂に其の恩人陸奥宗光氏に知らるゝの機會を得たり

原氏素より盛德の君子人に非ず、唯極めて慧敏の人なり、陸奥氏も亦智者にして、世間多くの人を見て、其の愚を笑へるの人、智者に非ずんば陸奥氏に近く可

らざるなり、曾て陸奥氏の恩顧を蒙むれる人を見るに多くは智術に長じたり、唯一人倜儻不羈なる星亨氏を除くの外は、大概智術の士にして、原氏は其の最も雄なる者なり、陸奥氏が始めて内閣に入て、農商務大臣たるや原氏は實に其の秘書官なりき、陸奥氏が最も得意なる外務大臣たる時代に、原氏は其の次官たりき、慧巧機敏彼れの如き人物に非ずんば、焉ぞ能く陸奥氏の信任を受くること此の如くなるを得んや

かくて陸奥氏を透して、彼れは一代の巨人伊藤博文氏に近けり、伊藤氏が英國女皇ヴヰクトリアのジュビリイ式に參列して歸り來るや、其の横濱埠頭に迎へたる人々より聞ける第一の兇報は、陸奥氏の長逝なりき當時我輩も亦伊藤氏を迎へたる一人なりしが、其の陸奥氏の訃音を聞て、彼れが如何に之を悼惜せしかを見たり、然るに伊藤氏は其後間もなく小陸奥氏なる原氏が陸奥氏の後繼者たるべき敏腕を有することを發見したり

原氏は種々の方面に於て、陸奥氏の後繼者たらんと務めたり、彼れは政治上に於て、伊藤氏の幕中に入り込みしのみならず、陸奥氏の姻戚たる古河家の總顧問となれり、獨り東京に於て其の勢力扶植に務めたるのみならず、大坂に於て、有力なる地位を作れり、或は新聞社長となり或は銀行頭取となり、關西に於て動かす可らざる根據を作れり、而して其の時機の到來を待ちたり

伊藤氏が立憲政友會を作れる時、原氏も亦其の有力なる參謀の一人なりき、而して政友會内閣に於て星氏が遞信大臣の椅子を退ける時、原氏は代て遞信大臣となれり、然れども是れ尚原氏に對して機會の到來したる者に非りき

政友會内閣倒れてより、原氏は一層其の勢力を政友會に扶植することを務めたり、而して伊藤氏が其の後繼者として西園寺公望氏を擬するに至て、原氏は愈々好望を以て其の針路に進みたり

西園寺氏が伊藤氏の後繼者として立てる時、原氏は全然陸奥氏の後繼者たる面目を發揮せり、第二次伊藤内閣が一時陸奥内閣の如く見えし如く、西園寺内閣は殆んど原内閣の觀を成せり

我輩の如きは常に非政府黨にして、間斷なく政府を攻擊する者なるが故に、歷代官人の性癖を知ること最も詳かなり、而して原氏の慧巧に至ては、殆んど陸奥氏を凌駕するの趣あるを覺ふ

陸奥氏は機略湧くが如き人なりしも、愚かなる黨人の愚論を傾聽するの雅量を缺きたりしが、原氏の狡猾なる百八十名の政友會代議士が、入り代り立ち代り來て陳述する愚論を聽き、更らに飽くなき所の卑劣なる慾望を容れて、巧みに之を操縱せり、其忍耐力に至ては殆んど陸奥氏の企て及ぶ所に非るなり

西園寺内閣の四圍には、少からざるの難關あり、先づ伊藤、山縣、井上、松方諸元老の鼻息を窺はざる可らず、次ぎに桂氏を始め前内閣系の意を迎へざる可らず、外には大隈氏の巨砲を放て攻むる有り、樞密院、貴族院、衆議院の隙を窺ふ有り、此の幾多の急激なる潮流の間に立て、能く其の難關を切り拔け、兎にも角にも二年の歲月を維持したるは、全く原氏の力量なりと謂はざる可らず

彼れは此の急潮激湍の間に立て、一方に政友會代議士を增加するの計を立て、他方に貴族院に自黨の勢力を扶植し、又地方官の交迭を行ふて、桂、大浦諸氏の系統に屬する者を排斥し、以て政友會擴張の便宜を謀れり、大膽にして智巧なること彼れの如き者に非ずんば、決して此の如くなること能はざるなり

今や坂谷芳郎、山縣伊三郎兩氏が廟閣を退て、西園寺内閣は將さに土崩瓦解せんとす、此時に當て尙最後迄奮鬪すべしと叫べる者は原氏なり、彼れの足は既に土俵の峯を踏めるに、尙踏み止まりて防戰に餘念なきの勇氣に至ては、我輩反對黨と雖も、窃かに其の武者振りの壯なるを感ぜずんばあらず

原氏や機略を重んじて德操に缺ぐる所あり、慧巧にして君子の爲さゞる所をなす、我輩固より之に與みする者に非ずと雖も、唯其の才智の他に優れて、權勢を維持する力量の强大なるに至ては、我輩亦之を認めずんばあらず

西園寺内閣の策する所、多く國家の大計を誤る、我輩は此の内閣を責むるに於て、一歩を他に讓る者に非ず、然れども敵陣の大將たる原氏の巧智と力量に至ては、現今政界の一人物たるを失はざるを見る

想ふに今より三五年の間、日本の政界は、原氏と大浦兼武氏の格鬪に依て賑はさるべし

△原敬論

中央公論記者足下。原敬氏は既に公論の爼上に横はりて幾多の庖丁の刀を其骨にも身にも下したる所謂ベブリックメンなり。僕は此上、更に新發見も新發明もあるまじと思ふ。因て蕪作を寫して左右に呈す此論以後の同氏は特に切に此論の眞相に近きことを證するものなるが如く感ず。

愛山生

明治三十七年の獨立評論第二號に西園寺侯と政友會と題し其中に原敬氏の評判に及びたることあり。其論旨は政友會に於て西園寺侯の爲めに支配人とも伴頭とも云ふべきは原敬と云ふ男なり。原敬はどちらかと云へば骨のある剛情の人物にて用心も細かく小々石橋を鐵の杖てたゝいて渡ると云ふ質の人なり。西園寺侯は理想も高く、思切りも善く向行きの強き人故、原敬の如き鈍重の人間が支配役を勤むるは人物配劑の妙を得たるものなり。其上原と云ふ男は今迄（即ち明治三十七年二月）は金にかけても惡るき評判は無し、長い間役人をして居たれども、貧乏は昔にかはらず、自分の尾敷一ヶ所を持ちたる計なりと云ふに在りき。然るに今度の電車問題より原敬は大きに男を賣出し、同人の評判善惡に關はらず、世間に廣がり、原敬は如何なる人ぞや、果して君が昔の獨立評論に書きたるやうな男なりや。電車問題の眞相は如何などゝ申越さるゝ向少からず。（電車問題は略す）因て原敬氏の人物如何と云ふ問に答へんに同人は或る種類の英雄に好かるゝ人間なるが如し。人間が人間を好くは不思議の關係にて蓼を喰ふ虫に何故そのやうなる辛いものが好きなりやと議論を仕掛けても虫も挨拶のならぬやうなものなり。此不思議の緣にて徳川家康も大賀彌四郎を好きたり。源頼朝も梶原平三を好きたり。豐臣秀吉も石田三成を好きたり。何となく好きなるものは致方なし。原を好かぬものから見れば原は冷酷にして乾燥無味なる理屈屋のやうにも見ゆべし。されど俗人に人好きのせぬ原は不思議にも故陸奥伯に好かれ、陸奥伯以後の第一人たる西園寺侯に好かれつゝあり。論より證據なり。我等は此證據に依りて原が或種類の英雄に好かるゝ性質を有することを信ずるものなり。抑も原は俳人が「三日月の圓くなるまで南部領」（領分の廣きを讀みしなり）と讀みたる其南部盛岡の產なり。南部は昔は奧州の邊土にて人の言語も物を言ふのやら、鼻の動くのやら分らぬ程の田舍なりしかども人物は相應に出てたる所な

り。原氏は南部者にて意地も強ければ原を惡口するものは南部鮭の鼻曲りなどゝも云ふ由なり。扨南部に生れたる原は少年にして志を立て司法省の法學校に入りしが其の後報知新聞社員となりたり。其頃報知新聞は矢野龍溪氏全盛の時代なりしが、編輯局に二の部屋あり。龍溪などは上局と云ふべき位地を占め、原は下局とも云ふべき處に座はらせられ校正掛に少々毛の生へたる位の仕事をなし、頗る冷遇されたりと云ふ。原を一個の英雄とすれば是れは蛟龍池中に潛む時なりとも形容すべし。然るに人間の運命は不思議のものにて明治三十三年伊藤侯が政友會を組織する時、原は大坂毎日新聞社の社長なりしが伊藤侯同人を東京に招きて政友會の幹事長となさんとし、原の跡へは矢野龍溪を入社せしむべしと云ふ相談起りたり。大阪毎日新聞社にて矢野招聘の議ありし譯は同新聞の大株主は同地の富豪藤田傳三郎にして藤田の大番頭本山彥一（藤田氏の兄久原庄三郎氏の婿なり）は同社に於ては事實上の社長なり。其本山は龍溪の朋友なれば、扨こそ矢野招待の議起りしなり。矢野氏は此段伊藤侯にも大隈伯にも相談し、愈よ大阪に行くことに極め諸方に暇乞までし、最早公然の事實となりたる時になりて、原は大きに不平を鳴らし、社長たる拙者に一言の相談も挨拶も無く矢野を跡役に極めたるは不都合なり いよ／＼矢野を大阪に遣ると云ふ譯なれば拙者は此に腰をすへ社長の印綬を解かざるべしと大すねにすねたれば其議遂に變じ小松原英太郎が行くことゝなり、龍溪は面目を失ひたり。矢野氏は敵を作るべき男に非ず。原が何故に矢野の入社を不快に思ひたるかは今に猶ほ疑問なり。たゝ昔しは矢野全盛、原雌伏の時代なり、今は原雄飛し矢野失意の時代なり。運命の變遷餘りに面白ければ筆の序に記し置くものなり。或は原をひいき目にて見たらば斯様な意地の惡るき所が原のえらき所なるやも知るべからず。えらき人間の中には意地惡るき癖ありて微時に冷遇せられたる怨を生涯忘れず。出世したる後昔し吾につらかりしとて敵打を爲し竊に愉快としたる者なきに非ず。宋名臣言行錄に宋の太祖は豁達寛濶なる故、天下を得たり。宰相趙普は佐命の元勳にて人物も勝れたれども性忌刻なり。時々太祖に向ひ兩人未だ志を得ざりし時つらく當りたる人々の事を言出で彼の時は彼れ何何の振舞を爲して陛下を冷遇いたし候。又あの節は彼れ斯々申し候ひて小臣を馬鹿に仕候と古き怨を言出し、敵打を爲さんとしけるに、太祖はいやい

や左樣の敲打はせぬ者よ。「若し塵埃の中、總て天子宰相を識らしめば則ち人皆尋ね去らん。」天子宰相となるべき人物なりとて塵埃の中に埋伏する時は並の人間に分らぬが當然なり。棄て置け、棄て置けと例の大腹中を示したれば超普も其後は太祖の前にては敲打の沙汰を止めたりと記したり。北宋第一流の人物晋國公すら猶ほ此の如し。徳川家康の懷刀本多佐渡守にも此癖はありしやうなり。原もえらき故斯樣の癖ありと原の提灯を持つものもあるべし。棺を覆ふて而して後論定まる。我等は唯事實を記すまでなり。扨其後報知新聞社を出でゝ大阪の大東日報社に入り羽田恭輔などゝ机を並べて筆を取りしこともありき。是れは其頃の御用新聞にて帝政黨の流を汲みしものなりとぞ。それより制度調査局の屬官となる。此時陸實なとも同役にて局中には風がはりの役人多かりき。是れ原の役人となる雙六の振出しなりしが明治二十三年故陸奥伯が農商務大臣なりし時、原は前大臣岩村通俊の秘書官として新任の陸奥伯を迎へたり。是れぞ原が陸奥伯の知遇を得たる始にして其迄は陸奥伯と原との間には何等の關係なかりしなり。其時分の陸奥伯は米國より歸りたる計にて未だ幕僚と云ふものも無く、素手にて大臣の椅子に座りたるものなりしが、人物鑑識に於ては當代比類少き彼れの眼光は直ちに此秘書官が事務に掛けては並々ならぬ男にて大きに委任すべき人間なることを發見したり。陸奥伯は人を知り人に結ぶの技倆に於ては後の世の手本にもすべきこと多かりき。同伯が後に伊藤内閣の外務大臣となりて榎本子の後を受けし時も榎本時代の秘書官たりし中田敬義の才を愛し、大に之を寵用せり。中田はせいの小き男にて同僚渾名してちよん〳〵と云ふ。然ほどの小き男と云ふ義なり。陸奥伯其頃は既に自分の畑にも相應の人才なきに非ざりしかども、榎本子の畑より此ちよんちよんを引抜き、間もなく政務局長にまで登庸したれば役人連中中田の羽振が餘り善しとて燒餅をやき「ストライキ」を起すまでに及びたり。度外人を用うるとも云ふべし。それに陸奥伯に一癖あり。人の如何なる過をも容るゝことを得れども鈍物だけは虫が好かぬと見へ、頭からこなして身邊によせ付けざりしを以て察するも、此陸奥伯に寵用せられたるからには原は何處か必ず善き處あるに相違なし。是れ我等が原は或る種類の英雄に好かるゝ人物なりと云ふ所以なり。此の時陸奥伯が原を信用したることは非常のものにて、原は陸奥伯の官印を預り、省中

の常務は殆んど原限りにて決斷し第一の切者とぞなつたりける。即ち陸奥伯は内閣大臣として高等の政治にのみ心を注ぎ省中の全權は原に委ねたるなり。然るに陸奥伯は撰擧干渉の事より内務大臣故品川彌次郎子と喧嘩し愈よ辭職と決心したれども未だ何とも言出でざりしとき、原氏は一日陸奥伯に向ひ、懷中より自身の辭表を出し、閣下の思召も多分は挂冠にあらせらるゝことゝ存じて候へば某も斯ふ思切つて候。閣下の知遇を辱ふせしより、それに報ひ參らせんとて今迄は心の及ぶ限り省中一切の事、思ふて言はざるは無く、知つて謀り申さゝるは無く候ひき。されば某の志を知らぬものは原が餘りに我儘を振舞ふよとて身は一省の怨府となりてこそ候はめ。所詮閣下と進退を共に仕るべく決心いたして候。中井弘は某の岳父に候。井上伯は緣者に候故。此兩人へのみは辭職の志をも漏し置き候へども其外には未だ何人にも胸底を明し申さず候。あはれ閣下若し挂冠の事も候はゞ某の辭表をも併せて進達し給はり候へ。是れは今日より閣下に御預け申し候と云ひたり。陸奥伯は世間に云ふが如き輕薄の才子に非ず。正直の所あり。表面に冷酷を粧へども胸中に活火ある人なれば大きに此心底にほれ込み、それより原を信ずること愈よ厚かりし。されば陸奥伯の外務大臣となりし時は原氏を拔擢して通商局長に任じたり。此時期の事なり。韓國防穀令の事につき原は役目の爲め彼國に出張を命ぜられ、外務大臣官邸にて別宴を張りしことあり。今の駐英大使小村男、其頃は飜譯局長なりしが何かの話の機會にて紡績の談話に及び、色々紡績の事を語り出でたり。陸奥伯聞きて小村は紡績に委しき樣子なり。人は見掛によらぬものよと笑ふ。小村男すかさず閣下が原を用ふるやうに我等を用ひ玉はぬ故に我等も馬鹿の樣に見へ候。さりながら我等は役に立つ男にて紡績などの事はかく委しく知り居り候へば通商局長なども見事に勤めかねまじく候とては皆々大笑となりたりと云ふ。其實其頃小村男は貧乏なりし故内職に紡績の事を書きたる書を飜譯したることあり。それ故委しかりしなり。こは一場の笑話に過ぎずと雖も陸奥伯の原を寵用したる樣子は此にて分るべし。斯樣の次第故役人としての原の運命の旭日の昇るやうにてとん／＼拍子に歷上り、後には次官にもなり、全權公使にもなりたり。さりながら原の人物は外交官には不向と見へ、際立たる手柄も聞へず。評判も無く當人も外交は自分の畑に非ずと云ふ風あり。巴

桑に居りし頃は自分は外交官に非ず内交官なりなどゝ洒落を言ひ、日本より來る人の案内などのみして居たり。其後大阪毎日新聞の社長となり月俸五百圓取りたり。大阪の新聞は社長は招牌にて前の外務次官と云ふ役人の古手を有がたがる關西の俗なる人心に投ぜんとする株主連の注文に過ぎざれば新聞記者としての原を眞面目に論ずるは原にも氣の毒なり、しかし新聞社長時代の原は必ずしも不成功にてはなかりしが如し。然るに明治三十三年伊藤侯が政友會を組織するに及び原は大阪より招かれて政友會の幹事長となりたり。それより侯の旗下にて忠勤を盡くしけるが同年十二月二十一日星亨の遞信大臣を辭したるとき原は一躍して其跡釜にすはり、始めて大臣となりたり。

是より先き明治三十八年八月陸奥伯歿す。陸奥伯の仲間は多く移りて西園寺侯の畑に入りたるは世の人の知る所なり。

原を大臣にしたるは故陸奥伯の智嚢と聞へたる岡崎邦輔の力なり。岡崎は星に對する貴族院の反抗はげしく政友會内閣の危きを見、星を勸め火事の外に及ばぬやう辭職させ其代に原を入閣せしめんとて盡力したり。星亨の陸奥伯と離れ難き關係ありしは勿論なり。岡崎は陸奥伯の從弟なり、智嚢なりと云ふ譯なれば岡崎の説は星も聽かねばならず。畢竟は陸奥の畑の一人を罷めて陸奥の畑の一人と入換たる迄の事なり。然るに此處に注意すべき事あり。伊藤侯の旗本には人才少からねども意地強く、喧嘩強く、押強き蠻骨ある人物は多からず。其中にては原は毛色のかはりたる人間にして星の跡釜を引受けてよりは新參に似合はず、中々手強き奴なりとの評判を得たり。仔細は其頃例の渡邊無邊と云ふ男大藏大臣にて我意を張り、政友會の領袖等いづれも不平なりしも、表面より其向を張り喧嘩腰になりて爭ひたるものは、比較的古參とも云ふべき末松男にも非ず。金子男にもあらず。却て新參の原にて明治三十三年の十二月より翌年の六月政友會内閣の瓦解に至るまで内閣の喧嘩は殆んど原對渡邊の戰闘とも云ふべき内情なりしかば、さては原と云ふ奴は面白き奴なり、骨の柔軟なる浮世才助にはあらず、つむじの曲りたる人間なりと云ふ評判を取り、是より原の人物を尊敬する人も出來たり。實際政友會内閣にて無邊と顔を赤めて喧嘩をしたるものは原一人なりしと云ふ。然かるに政友會内閣は遂に内輪喧嘩の爲めに瓦解し、原も大臣の印綬を解きたる後は一方に於ては銅山王古川家

の番頭となり（是れも陸奥伯の縁故に依れるは勿論なり）て金持になる仕度をなし。一方に於ては自分が通商局長の時に使ひたる山田敬徳と云ふ男（ポンペイあたりにて領事をしたることあり）に大阪新報社を買はせ、北濱銀行の頭取となり、關西にも一地歩を占むる計畫を爲したり。されば大阪新報社は原敬が今にても持主なり。加藤高明が外務大臣にて日報社の社長たりし外は大臣にて新聞の持主たるものは原敬のみなり。扨物換り星移り、伊藤侯は殆んど無理隱居同樣の譯に政友會總裁をやめ、西園寺侯進んで表面に立つに及んで原敬は愈よ同黨に取りて大切の人物となりたり。是れは我輩の推測にて證據のある事ならねども前後の事情を通じて原が政友會にて動かし難き地位を占むるに至りたるは全く原に一種の骨あるに依れりと思はる。そは伊藤侯隱居以來、末松男、金子男などは何となく政黨に緣遠くなりし樣子なれども原のみは頑ばりて政友會の忠臣を以て自ら任じ松田正久と共に西園寺侯を助けて二心なかりし樣子なればなり。曩には陸奥伯に知られて陸奥伯に背かず。後には政友會に入りて政友會に叛かず。些か奥州氣質の片意地を存したるは原が泛泛たる輕薄才子と殊なる所にして西園寺侯の惚込みたる所も蓋し此頑骨なるべき歟。それに伊藤侯は獨天狗にて好んで自ら用ひ、門下の人才と雖も小兒あつかひにする故、伊藤の時代は原も秘書役に輪をかけたる位の取扱を蒙るに過ぎざりしが、西園寺侯は伊藤侯に非ず。政黨には經驗も少く其上、面倒なる些事を自らするは大嫌ひにて、一たび其人を信任せし上は一切を擧げて委任し赤心を人の腹中に置き萬事依賴すると云ふ行方なれば原はいよ／＼調法なる人間となり、正に西園寺侯の侍所別當となり濟ましたり。原と西園寺とは善き組合せにして、双方の長短、正に相補ふべし。即ち侯は仙骨あり。原は俗骨あり。侯は理想家なり。原は實地家なり。侯は創意の才あり。原は實行の才あり。侯は淡泊なり、原は執念深し。侯は寬裕なり。原は勇氣あり。侯は人に愛せられ、原は人に憎まる。侯は風流寬濶にして、原の嗜好は極めて俗なり。侯はやり放の處あり。原は勉强に於ては殆んど天性なり。尊氏の寬濶なるは直義の忌剋を以て之を助け、豐公の疎枝大葉なるは石田の綿密狹隘なるを以て之を助く。古今人物の配劑、偶然なるが如くにして偶然ならずと謂つべし。加之原は今の內閣に取りては佐命の元勳とも云ふべき關係あり此段は兼て本紙にも桂內閣と西園

寺内閣との關係に就きて記したることあれば此に記さず。唯桂内閣とのかけ橋となりたる者は原なる事のみを云へば足れり。尤も桂伯をして西園寺侯に内閣を渡さしめたる發案者は桂伯自身(?)にして原には非ず。原は專ら双方の使番を勤めたる計なれども、愈よ天下が西園寺の物と極るまでは其間の消息を解したる者は唯原一人にして、政友會の幹部にても知ず、桂内閣の閣員も知らざりし程の事なれば原の西園寺侯に於けるは殆んど堀田筑前守正俊の常憲公に於ける程の關係ありと云ふべし。さればこそ西園寺内閣の成ると共に原は内務大臣となりたるなれ。原の内務大臣となりしにつきては其頃内部の異論なかりしに非ず。政黨員を内務大臣にするは不都合なりとの說もありしやうなれども、原は外務は天性好かぬ方なり、大藏大臣にはなるかも知れずとの說ありしも、それも沙汰やみになり、政黨員其儘にて押切て内務大臣になりしは日本政黨の歷史に一進歩の時期を作りたるものなり。原の履歷を說けばざつと此位なり。川の流は其方向を示し。人の履歷は其性格を覆ふべからず。我等が自ら說明せずともこれだけにて當今の問題たる原内相の人物は合點なるべければ公平に事實だけを述べ、わざと蛇足の評を加へず、其餘は讀者の判斷に任するものなり。概して曰へば原は寧ろ殺風景の男なり、詩を作るでも無し、文章が上手でもなし。嗜好は俗なり、風流のなぐさみもなし、寬濶の雅量もなし、意地は强く、利口にして勉强家なり。今の役人よりは骨あり。今の政黨員よりは割合に組織的智識ありと云ふ迄にして、人を見るの明あるや否や、政治家の度量あるや否やは疑問なり先は刀筆の吏の雄〜ものならん歟。但し小さき處にのみ眼が着き、齷齪として目前の事にのみ追はるゝばかりにも非ず。中々機略もあり、融通もありと見へたり。即ち一方に前内閣の要求を容れて進歩黨と絕ちたるに關はらず、一方には加藤高明を外務大臣に推薦して暗に色目を同黨につかい、前内閣の黨にして此後若し縱横の計あらば此方にては進歩黨と合して之に當るべしと云ふ態度を示したるは用心もあり、思慮もあり少々狐疑に過ぐるやうなれども、其遠慮は淺からず其繩張は小さからずと謂つべし。されば加藤辭職の時は松田なとは早くあきらめてしまひたる樣子なれども原は極力加藤を引止めたり。此處らは中々の策士なり。原は英語は話せず、英文は讀めねども佛蘭西語は少しは出來る由なり。次に最後の問題は原と金との關係な

り。原は果して一昨年の本誌に記したる様に金にかけて潔白なる男なるや否や。之に答ふるに前に一話あり維新前小倉藩の家老にて島村志津馬と云ふがあり。長州の鋭鋒に屈せず善く戰ひ小倉藩に取つては殆んど頽瀾を既倒に廻らしたる大英雄ながら常は女好きにて美女に狂ひ、おまけに金も好きなりしかば隨分誹謗するものも多かりしが一旦國家危急の時にありて泰然自若たりしかば、それよりは評判宜しくなりたりと或老人の物語なり。人の評判をするに金にきたないの女が好きのとは容易に言ふまじきことなり。それは下馬評定とて色々の風說を立つるが世の常なればなり。まして原のやうなる位置になると色色の事を云はるゝものなり。七度尋ねて人を疑へと云ふことゝあれば毛を吹きて疵を求むるには及ばぬことゝ存ずるなり。現に煙草專賣の事につき年限延長の議案出でし時なども村井の一番有力なる番頭松原重榮と云ふもの原と延長の內議を相談し、原より云出し大石、犬養も同意し、其議遂に議會を通過したるものなるに政友會の威勢にて世間を瞞着し專ら大石犬養の議に出でたるやうにしてしまひたりなどゝ云ふ說もあれども畢竟暗闇の沙汰なれば左樣なることは荒立てゝ穿索するに及ばず、電車の事も正面より理否を爭へばそれにてよろし、內幕はしばらく問はずして可なるべし。たゞ原の爲めに一言したきは原が西園寺侯の社鼠城狐となりて侯の門戶を狹くせざらんこと是なり。猩々猩々を知り。英雄英雄を知る。原既に故陸奥伯に知られ、西園寺侯に知らる、其凡骨ならざるは明かなり。男兒知己に感ず、其友に忠なるは善し。其友に忠ならんと欲するの餘り。專權に陷り却て友人先輩の門戶を狹くするは不可なり。我等は原氏の人物に對して一片愛好の情なきこと能はず。是れ其切に猛省を求むる所以なり。

△原敬論

三宅雪嶺

衆議院議員は行動の方向にて大略三種に分たる、一は主張を旨とする者、二は利益を得るを旨とする者、三は政治に與かるを旨とする者なり。大抵其の何づれかを混せざるなけれど、中に就いて幾何か目的を達し得たりと見るべきは、第一に於ける島田三郎氏第二に於ける井上角五郎氏にして、他に之に類するもの少か

らず、第三も既に幾人をも數ふべきが原敬氏を以て最も著るしき者とすべし。

議會の設けられてより以來、身衆議院に列しつゝ、内閣の椅子を占むると云ふが最も政治家らしき所爲と考へられ、政治に身を委んとする者は先づ之れを準想と爲したりと謂ひて妨げなし、而して之れ政治家として世に顯はるゝに最も都合好き方法なり。從來大臣の職名を帯びしもの擧げて數へられざるも、稍々政治家として世の指目を集め得たるは、維新前の浪士若くは准浪士に多く、事務官より順々經上ぼりたるものは、官を退くと共に殆んど全然記憶の外に葬らる、之れ彼等が政治家らしき態度を世に示すの機會稀れなれば也。元老ならずして内閣に入り、而して普通の大臣と面目を異にせる者、故陸奥伯及び故星亨氏あり、此の兩人は共に衆議院に列しつゝ、内閣に立ちし者にして、彼の屬僚的大臣の官を退くと共に力を失ふと違ひ、地盤一層堅固にして、勢力範圍一層廣く、好しや内閣を去るとするも、尚ほ優に活動するの餘地ありと思はれにき。他に内閣より轉じて樞密院に入り、爵を授かり、または陞爵せられたるものあるも、特に政治家とし目せられざるは、其の經歷が比較的甚だ單純なれば也、政治家たるには自身の力を以て自身の領域を開拓するの跡なかるべからず、彼の二人の如きは即ち之れなり。

稍々之れに似たる趣あるは原敬氏なり、内閣にありても普通經上がりの大臣と同じからず、外には大臣といふを以て所屬の政黨に重きを占め、内には大政黨を背後に控ゆるといふを以て同僚に重んぜらる、之れ人の多く望んで容易に得ざる處とす。目今氏と同じ位置にあるものは松田正久氏なれども、之れ久しく政黨に關係ありし爲めの故にして、能力よりは寧ろ經歷よりせり。原氏は之れと反し、政黨との關係も左程久しからず、言はゞ飛び入に過ぎず、入婿たるに過ぎず、而して實際に於て殆んど黨の樞軸を握り、首相の參謀長とも云ふべき觀あり、誠に才能の秀でたるものあるに因ると言はざるべからず。實は氏は何處にありても其の現はれ、所謂囊中の錐の如く、日ならずして鋒鋩らず穎脱す、曾て朝に居り、野に下たるもの數次、皆その然るを證せり。居る處の面白くなければ直ちに去つて他に行く、一點未練がましき素振なし、單に才能の方面に於てせば、尚ほ氏に勝るものあらんも何處に行くとして可ならざるなしと云ふに於て氏の如きは稀

れなりとすべし。政黨にもよし、元老にもよし、官吏にもよし、實業家にもよし、氏に不平を抱く者は未だ相知らざる間の事にして、相ひ逢ふや其の不平は漸次氷解せらる、

今日の所謂成功の意味よりせば、最も之れに適したるの人格なるべし。

星の如く惜まるゝとなくして、而かも星の成さんとする所を爲しつゝあり、之の點よりみる、他の幾多衆議院議員の如きは後に瞠若たらざるを得ず。

然らば氏は大に稱揚するに足るかといふに、顧て考ふれば必ずしも然らず氏は實に世俗の所謂成功者たるに相違なけれど、畢竟するに夫れ丈けの人物に過ぎず當世流の能く得をして損をせざる人たるのみ、將來何事を成し得べきかは全く疑問に屬す。今日まで氏一個として國家及び社會に何物をか貢獻したりとすべきか、勢に乘ずるは巧みなれど、たゞ乘ずるの巧みなるのみ、是と云ひ、非と云ふ、己れの利害より打算し能く位置を安全にし、且つ之れを高め得たるも、未だ國政に利する處ありたるを知らざる也、大政黨の領袖にして、或る意味に於て首領たるべきに拘らず、其の政黨を以前より改善したる所あるか、或は黨內に紛擾の少きは其の節制宜しきを得たる證なりとせんも、黨員が何の操守する處なく、たゞ都合次第に動くが如きを奈何と見る、柔順といはんか、元氣銷耗といはんか、未だ俄かに斷案を下すべからず。

而も其の大政黨は或る利益問題に熱中する外は何事をも成さゞる者なり、即ち賄賂公行と云ふ如き忌はしき現象を馴致するに與て力ありき、腐敗といふに就て種々の解釋もあるべきも、若し腐敗と認むべきものありとせば、之れを促し、罪を免るゝ能はず。且つ氏は內閣に入りて何等政治を振肅したるの實あるか、首相をして能く元老と協議し、議會鎭撫策を講ずるなどの事ありたらんも來るべき困難を豫め救ふに幾何の力を盡したりと稱すべきか。增稅に重ぬるに增稅を以てし、募債も出來得る限り之れ爲すの意向あるにあらずや。自から一個の意見あるも、周圍の事情の許さゞる者ありとの辯解あるべけれど、兎もかく今日の狀態にては、氏あるもなくも國政上何等の差違あるべくも思はれず、たゞ來るべき困難を後日に讓りつゝありとするの外なし。一時の平穩無事を旨とし、爾かするを得て滿足せんとするもの、姑息の甚だしきものにあらずや。勢の趨く處に從ひ、己れの利害を打算し、最も安全なる道

程を廻る、巧みは則ち巧みなるも、政治家として賞すべきやは疑はし。

氏の才能の尋常ならざるは言ふ迄もなき事にして、或る程度まで政治家の資質を具備せりとすべきも、直ちに以て大政治家たるを得るや否やを決すべからず、實に氏は余りに世渡が上手なり。世渡上手なる者は其の時代に重寶がらるれど、後世より觀ては何等言ふを値せざるが多し。何の世にも世渡上手なるものあり、而も後代よりみて多少たりとも賞讃すべきもの幾人かある。現に西園寺侯の如きも、折合に巧みなる處、難局を難局ならぬかの樣に扱ふ處、才の羨むべきものあれど、依りて以て何事を成さんとするぞ、歴史上無價値の頁を製作しつゝあるに近からずや。侯の聰明なる自から之れを知り、戰後の難局人皆な避くるを以て敢て身を挺して事に當れる丈けにて、功名の如何は問ふ所にあらずとせんも、果して斯く淡泊なりとすべきか、果して斯く正大なりとすべきか。原氏の如きも、己れ與かりたる所にして、何事にか良好の實を殘したるあるか。氏自らは、無事平穩に政府と議會を操縱するを以て得たりとせずや、一時世に時めくことあるべきも、其の勢力たるや遠からず煙滅すべき嫌ひなからず、其の時代の成功者にして、歴史上に於ける成功者にあらず、もし其の時代にありては其の時代に應ずれば好し、未來記は慮かるの要なしと云はゞそれも一種の見識なるべし。氏は斯る見識の人にや。

されど氏の齡は五十を超ゆると多からず、政治家として、尙ほ壯年期にあるものなれば、老熟するにつれて、如何なる働を示し、如何なる性格の新たに看得べきものあるかは、今日卜知すべき限りにあらず、望むらくは今日の狀態に滿足せず、何事か國家社會に貢獻する樣ありたし、世俗の所謂成功者として世を終る如きは到底大なる人物と言ふべからず、氏の慧敏なる恐らくは既に之れを知れるならん。

右は博士の談話を筆記して、重ねて博士の校閲を經たる者也（編者しるす）

△原敬談

池邊吉太郎

◎原敬の人物評をやれといふのか。そいつは一寸困るな、何、名を出すのが迷惑なら匿名でもよい！いや、名を出しても別段わるいこともないんだ。昔のやうに

新聞條令か何かの矢釜しい時では内務大臣の噂などはせぬ方が新聞の爲め得策かも知れんが、アハヽヽ今日ならそんな遠慮も入るまい。ちつとやそつと惡口位いつたつて構えやしまい。が

◎原敬といふ人は自分はよく知らないんだ。只何でも餘程鼻つぱしの強い人だらうと思つて居る。一度言ひ出した事、遣り出した事は容易に、後へは引かず、何處〳〵までも仕遂げなければ承知せん人だらうと思つて居る。

◎原敬と逢つたことがあるかといふのか?。ある。東北の饑饉の時に之を救濟せうといふので、同業者が一所になつて原に意見を述べた時に、自分もマア代表者のやうなものになつて逢つたことがある。何でも規則なんかを矢釜しくいつてなか〳〵手剛い人だつた。話は要領を得る人だ。

◎原が「大阪毎日」の社長をして居た時分に、何か賭事のやうなことをして大いに新聞を賣り出さうとした事があつた、「大阪朝日」は之を攻撃すると、原は躍起となつて之を辯護し、實に執拗く之と爭つたものだ。彼の強情で鼻つぱしの強いことは、そんな一例でも分る。今度の議會には出さない事に極まつて居る樣だが、原一個の心中では今度も復た郡制案を提出したくつて仕樣があるまいと思ふ。

◎原は策士だか?。さアそいつは自分には分らんな。だが、星亭の跡を引受けて自ら政黨を負うて他と戰ふて居る。矢張策士かも知れないよ。智惠のある男か?。さアそいつもよく分らんて。然し智惠の方からいつたら、松田の方がもつとあるかも知れんな。松田は一體不得要領な事をいつて溫和しい人らしく見えるが、其實餘程智惠袋のある奴ではなからうかな。政友會の德望などは確かに松田の方は上だらう。松田は一寸故西鄕從道の俤があるやうだな。西鄕は御存じの通り、非常の不得要領の人のやうに見えたが、あれはなか〳〵智惠袋の大きい人であつた。松田はどうもさういふ處があるらしいな、然し世間へ押し出して、戰ふといふ段取になれば、原の方が全く一手販賣の觀がある。原はどうしても、鼻つぱしの強い實行家の方だ。

◎といふもの丶勿論原からも智惠が出るに違ひないんだ。が原から出る智惠の大部分は、原自身から出るのよりは、多分部下の二三のエライ奴から出る智惠じやないか知らんて、二三の部下とは誰のこつた?。其れア矢張り〇〇〇〇や〇〇〇〇の連中サ。

◎今度の議會では原は無論大いに戰ふ積りだらう。總選擧も無論現內閣の下で行ひたいだらう。然し原の內務大臣の下で總選擧を行ふと云事は政友會以外の人は非常に嫌がつて居るんだ。だからヒョットすると、原は內務大臣を廢して、兼任の遞信の方を專務としてゞも、總選擧を自分の內閣でやらうとするかも知れんて。

◎去年の郡制案の時など原の遣り口は可なりすばらしいものであつたんだ。何でも原の部下の献策か何かで貴族院といふものを研究して見たらしいんだ。其結果、今迄は純桂派と思はれて居た貴族院の中に、一つの穢多村-詰りこれで(拇指と食指で輪を作て)動く奴さーといふものがあつて、其れは遣り方さへ甘まければどうでもなるんだといふことを悟つたらしいんだ。即ち今迄桂派で操つて居た糸の引緊口を見出して、其れを手繰つて見ると、其糸で動くものが大分出て來たんだ。それだもんだから桂派でも大いに怒つて、あんな騷ぎになつたやうな譯と聞いて居る。本當かも知れない。

◎原の內務大臣としての功績は何うだ？。別にさう大した仕事もせなかつた樣だな。然し部內の受けはわるくもないやうだ。世間では彼を非常に吏才に富んだ人だといふが、或はさうかも知れんな。然しこれは褒めたのか、貶したのかよく分らんて。

◎原と西園寺侯とは巴里に居た時からの遊び仲間だらうと思ふ。原は西園寺侯のやうな人の下で其手腕を揮ふのは最も其所を得たものだ。まア此位で御免を蒙つて置かうか。

アイヌの文學（中）

六、アイヌ歌謠の形式並に修辭

「文學」の定義の定め方に由つては、殊に、ジョン・モーレーや、マシウ・アーノルドの定義に見る樣に、書物といふ事が、果して「文學」に必然の要件であるものならば、勿論アイヌには、「文學」など云ふ樣なもの丶有らう筈は無い。アイヌは、文字其物をだに持たぬ國民であるのだから。

併乍、言語を以て成る所の空想藝術、紙にこそ止められね、歷代の口より口に儼然たる生命を以て、永く同民族の感情を皷舞慰藉し來つた所の此の古謠を、詩歌則文學と呼ぶに何の妨げがあらうか、否、吾々は敢

で、イリアッド・オデッセーを稱する其意味を以て、叙事詩（エピック）——然り、一大國民叙事詩である——と呼ぶことをさへ、憚らざらんとするものである。

已に詩歌と呼ぶ以上、必然或種の格律が認められなければならぬ。アイヌが詩歌の形式、はたその修辭は抑々どんなものであらうか。

それは勿論、支那文學や、印歐語族が發達させた高尙複雜な詩形の格律は、到底未開なアイヌ民族に期待するのは無理である。けれども、朧げながら尙略々次のやうな事柄を觀取することが出來る、

と云ふのは、やはり我國などに於けるが如く、韻や、アクセントに基く規定は全然自由で、唯音綴の數のきまりが、ほゞ一定して居る事である。古謠（ユーカラ）の語り口を聽くに決して口語の樣に、ボロ〳〵に出て來はしない。或一群の音塊が、一とくゝり宛、截然として節を成して出て來る。その一群は、大抵長いもの七綴、短いもの五綴、狂うても六綴四綴以外に外れることは、止むを得ざる場合の外に無い。この長短の句は、相「對」しつゝ錯綜して數萬言の古謠を成す。

「對」といふ事はアイヌは餘程好きだと見える、尤も、初等な形象美であるからでもあらう。彫刻刺繡に現はれでは複雜なる模樣が、よく迷はずに左右相稱の曲線を以つて構成せられて居る。詩歌に現はれては則、動やもすると一句一句が二ツ宛對照したがる、

それ故に、長い歌謠の中に突然短い句が出て、きまりを破らなければならぬ事が起ると云ふと、その次の句をも短いものにし、以つて相對應せしめて調和を圖ると云ふ努力が見える。

又對といふ事が大きく起つて、前二句（若くは三句）に對して、の後二句（若くは三句）が、同じ樣に並んで立つと云ふ事もある、かくして、最節多い所に行くと、兩々相對の語句を以つて連綿として長い彫琢の文を織り成して行く。さればアイヌの修辭には、東洋流に所謂、「對句」「雙關法」と云つた樣な事が盛んに出て、來る。

修辭法の今一つの最重要なる原則（プリンシプル）は、ラキジリアスな繰返しの方法である、一體、今「對」と云ふ事を云たが、「對」と云つた丈では、實はまだ精しからぬ說明て、殊に、「對句」と云つて了つては或は語弊があるかも知れぬ。何ぜなれば、所謂「對」即對照（コントラスト）の修辭の仕方にも色々あつて、第一に例の風梳新柳髮、波洗舊苔鬚の樣な一語一語の對照からして取掛かるものもある。

第二には其處迄は行かずに、巫峽啼猿、衡陽歸雁と云ふ樣、違つた物を借りて來て、對照する樣に云ひ疊むものもある。此等は支那流の純「對句」だが、第三に、日本流の「對」がある。同じ事を唯別樣に語を換へて言ひ返して二つ宛對せしめて行くのである。

とほとほし越の國に、
さかし女をありと聞かして
くはし女をありと聞こして、
さよばひにあり立たし
よばひにあり通はせ、
太刀が緒も未だとかずて
襲をも未だとかねば、
をとめのなすや板戸を、
押そぶらひ吾が立たせれば
引こづらひ吾が立たせれば、
青山にぬえは啼き
さ野津鳥きぎしはとよむ（古事記八千矛の歌）

第一のは、比較的不自然だ。それ丈「技巧」の點から觀たら複雜で進んだものであるかも知れぬ。第二のは中位で、第三のは、比較的最自然だ。それ丈「技巧」の點からは最單純で低級のものであるかも知れぬ。尤一概には云はれない。各々其國語の性質に負ふ所もあるだらうから。

アイヌに見る滿幅の「對」の修飾は此の中どれであるかと云ふに、盡く第三者だ。全く右に擧げた八千矛の歌のその例を讀むやうだ。畢竟するに、一種對法句だが、其方法は、同じ事を、ラギジリアスに叉繰り返して疊んで行くのである。

尚、「繰返し」の今一つの他の仕方は、前の句の末の語を、次の句の頭に今一遍繰返して練を成して行く方法である。これも亦、我が記紀萬葉宣命祝詞に通常に用ふる修辭である。例へば

沫雪の、わかやる胸を、
素手抱き、手抱きまながり
眞玉手、玉手さし纏き
股長に、寢はなさむを、
なづきの、田の稻がらに、
稻がらに、這ひもとほろふ、

アイヌの修辭法は、この點に於いて全く、純日本式――或は、ウラル・アルタイック式――であると云へる。

尚茲に、彼我の間に一の甚興味ある修辭上の對照が

新聞條令か何かの矢釜しい時ては內務大臣の噂などはせぬ方が新聞の爲め得策かも知れんが、アハヽヽ今日ならそんな遠慮も入るまい。ちつとやそつと惡口位いつたつて構ゑやしまい。が

◎原敬といふ人は自分はよく知らないんだ。只何ても餘程鼻つぱしの強い人だらうと思つて居る。一度言ひ出した事、遣り出した事は容易に、後へは引かず、何處〳〵までも仕遂げなければ承知せん人だらうと思つて居る。

◎原敬と逢つたことがあるかといふのか？。ある。東北の饑饉の時に之を救濟せうといふので、同業者が一所になつて原に意見を述べた時に、自分もマア代表者のやうなものになつて逢つたことがある。何ても規則なんかを矢釜しくいつてなか〳〵手剛い人だつた。話は要領を得る人だ。

◎原が「大阪毎日」の社長をして居た時分に、何か賭事のやうなことをして大いに新聞を賣り出さうとした事があつた、「大阪朝日」は之を攻擊すると、原は躍起となつて之を辯護し、實に執拗く之と爭つたものだ。彼の強情て鼻つぱしの強いことは、そんな一例でも分る。今度の議會には出さない事に極まつて居る樣だが、原一個の心中ては今度も復た郡制案を提出したくつて仕樣があるまいと思ふ。

◎原は策士だか？。さアそいつは自分には分らんな。だが、星亭の跡を引受けて自ら政黨を負うて他と戰ふて居る。矢張策士かも知れないよ。智惠のある男か？。さアそいつもよく分らんて。然し智惠の方からいつたら、松田の方がもつとあるかも知れんな。松田は一體不得要領な事をいつて溫和しい人らしく見ゑるが、其實餘程智惠袋のある奴てはなからうかな。政友會の德望などは確かに松田の方は上だらう。松田は一寸故西郷從道の俤があるやうだな。西郷は御存じの通り、非常の不得要領の人のやうに見ゑたが、あれはなか〳〵智惠袋の大きい人てあつた。松田はどうもさういふ處があるらしいな、然し世間へ押し出して、戰ふといふ段取になれば、原の方が全く一手販賣の觀がある。原はどうしても、鼻つぱしの強い實行家の方だ。

◎といふもの丶勿論原からも智惠が出るに違ひないんだ。が原から出る智惠の大部分は、原自身から出るのよりは、多分部下の二三のエライ奴から出る智惠じやないか知らんて、二三の部下とは誰のこつた？。其れア矢張り○○○○や○○○○の連中サ。

◎今度の議會では原は無論大いに戰ふ積りだらう。總選擧も無論現內閣の下で行ひたいだらう。然し原の內務大臣の下で總選擧を行ふと云事は政友會以外の人は非常に嫌がつて居るんだ。だからヒョットすると、原は內務大臣を廢して、兼任の遞信の方を專務としてゞも、總選擧を自分の內閣でやらうとするかも知れんて。

◎去年の郡制案の時など原の遣り口は可なりすばらしいものであつたんだ。何でも原の部下の献策か何かで貴族院といふものを研究して見たらしいんだ。其結果、今迄は純桂派と思はれて居た貴族院の中に、一つの穢多村-詰りこれで(拇指と食指で輪を作て)動く奴さーといふものがあつて、其れは遣り方さへ甘まければどうでもなるんだといふことを悟つたらしいんだ。即ち今迄桂派で操つて居た糸の引緊口を見出して、其れを手繰つて見ると、其糸で動くものが大分出て來たんだ。それだもんだから桂派でも大いに怒つて、あんな騒ぎになつたやうな譯と聞いて居る。本當かも知れない。

◎原の內務大臣としての功績は何うだ?。別にさう大した仕事もせなかつた樣だな。然し部內の受けはわるくもないやうだ。世間では彼を非常に吏才に富んだ人だといふが、或はさうかも知れんな。然しこれは褒めたのか、貶したのかよく分らんて。

◎原と西園寺侯とは巴里に居た時からの遊び仲間だらうと思ふ。原は西園寺侯のやうな人の下で其手腕を揮ふのは最も其所を得たものだ。まア此位で御免を蒙つて置かうか。

アイヌの文學(中)

六、アイヌ歌謡の形式並に修辭

「文學」の定義の定め方に由つては、殊に、ジョン・モーレーや、マシウ・アーノルドの定義に見る樣に、書物といふ事が、果して「文學」に必然の要件であるものならば、勿論アイヌには、「文學」など云ふ樣なもの丶有らう筈は無い。アイヌは、文字其物をだに持たぬ國民であるのだから。

併乍、言語を以て成る所の空想藝術、紙にこそ止められね、歷代の口より口に嚴然たる生命を以て、永く同民族の感情を皷舞慰藉し來つた所の此の古謠を、詩歌則文學と呼ぶに何の妨げがあらうか、否、吾々は敢

で、イリアッド・オデツセーを稱する其意味を以て、叙事詩（エピツク）——然り、一大國民叙事詩である——と呼ぶことをさへ、憚らざらんとするものである。

已に詩歌と呼ぶ以上、必然或種の格律が認められなければならぬ。アイヌが詩歌の形式、はたその修辭は抑々どんなものであらうか。

それは勿論、支那文學や、印歐語族が發達させた高尙複雜な詩形の格律は、到底未開なアイヌ民族に期待するのは無理である。けれども、朧げながら尙略々次のやうな事柄を觀取することが出來る、

と云ふのは、やはり我國などに於けるが如く、韻や、アクセントに基く規定は全然自由で、唯音綴の數のきまりが、ほゞ一定して居る事である。古謠（ユーカラ）の語り口を聽くに決して口語の樣に、ボロ／＼に出て來はしない。或一群の音塊が、一とくゝり宛、截然として節を成して出て來る。その一群は、大抵長いもの七綴、短いもの五綴、狂うても六綴四綴以外に外れることは、止むを得ざる場合の外に無い。この長短の句は、相「對」しつゝ錯綜して數萬言の古謠を成す。

「對」といふ事はアイヌは餘程好きだと見える、尤も、初等な形象美であるからでもあらう。彫刻刺繡に現はれては複雜なる模樣が、よく迷はずに左右相稱の曲線を以つて構成せられて居る。詩歌に現はれては則、動やもすると一句一句が二ツ宛對照したがる、

それ故に、長い歌謠の中に突然短い句が出て、きまりを破らなければならぬ事が起ると云ふと、その次の句をも短いものにし、以つて相對應せしめて調和を圖ると云ふ努力が見える。

又對といふ事が大きく起つて、前二句（若くは三句）に對して、の後二句（若くは三句）が、同じ樣に並んで立つと云ふ事もある、かくして、最節多い所に行くと、兩々相對の語句を以つて連綿として長い彫琢の文を織り成して行く。さればアイヌの修辭には、東洋流に所謂、「對句」「雙關法」と云つた樣な事が盛んに出て、來る。

修辭法の今一つの最重要なる原則（プリンシプル）は、ラキジリアスな繰返しの方法である、一體、今「對」と云ふ事を云たが、「對」と云つた丈では、實はまだ精しからぬ說明て、殊に、「對句」と云つて了つては或は語弊があるかも知れぬ。何ぜなれば、所謂「對」即對照（コントラスト）の修辭の仕方にも色々あつて、第一に例の風梳新柳髮、波洗舊苔鬚の樣な一語一語の對照からして取掛かるものもある。

第二には其處迄は行かずに、巫峽啼猿、衡陽歸雁と云ふ樣、違つた物を借りて來て、對照する樣に云ひ疊むものもある。此等は支那流の純「對句」だが、第三に、日本流の「對」がある。同じ事を唯別樣に語を換へて言ひ返して二つ宛對せしめて行くのである。

とほ〳〵し越の國に、
さかし女をありと聞かして
くはし女をありと聞こして、
さよばひにあり立たし
よばひにあり通はせ、
太刀が緒も未とかずて
襲ひをも未とかねば、
をとめのなすや板戸を、
押そぶらひ吾が立たせれば
引こづらひ吾が立たせれば、
青山にぬえは啼き
さ野津鳥きゞしはとよむ(古事記八千矛の歌)

第一のは、比較的不自然だ。それ丈「技巧」の點から觀たら複雜で進んだものであるかも知れぬ。第二のは中位で、第三のは、比較的最自然(ナチユラル)だ。それ丈「技巧」の點からは最單純で低級のものであるかも知れぬ。尤一概には云はれない。各々其國語の性質に負ふ所もあるだらうから。

アイヌに見る滿幅の「對」の修飾は此の中どれであるかと云ふに、悉く第三者だ。全く右に擧げた八千矛の歌のその例を讀むやうだ。畢竟するに、一種對法句だが、其方法は、同じ事を、ラギジリアスに叉繰り返して疊んで行くのである。

尙、「繰返し」の今一つの他の仕方は、前の句の末の語を、次の句の頭に今一遍繰返して綾を成して行く方法である。これも亦、我が記紀萬葉宣命祝詞に通常に用ふる修辭である。例へば

沫雪の、わかやる胸を、
素手抱き、手抱きまながり
眞玉手、玉手さし纏き
股長に、寢はなさむを、
なづきの、田の稻がらに、
稻がらに、這ひもとほろふ、

アイヌの修辭法は、この點に於いて全く、純日本式――或は、ウラル・アルタイック式――であると云へる。

尙玆に、彼我の間に一の甚興味ある修辭上の對照が

ある。我が上代に於て、珠玉(たま)といふものは、どう傳はつて、大和民族に斯程迄珍重せられたのであつたか、物を美化する形容語として玉籠(たまがたみ)・玉簾・玉床・玉襷・玉鬘・玉葛・玉藻・玉椿・玉梓等から、玉章・玉橋・玉垣(たまがき)・玉城・玉衣(たまぎぬ)・玉手さては、玉の御聲・玉の姿・玉の都等、隨分廣く使はれる。丁度此の樣にアイヌに於て使はれて居るのは、カニといふ語だ。カニは、アイヌて金屬(カチ)を意味する語であるが、金屬の箇々の種類の名稱は、夫々、金(コンカニ)、銀(シルンカニ)、銅(フテカンカニ)、鐵等(クロンカニ)、皆明に日本語である所から見ると。カニも亦恐らく日本語だ、實際、に言語丈の側から想像すると、これ等金屬は皆もと日本から輸入したものらしく見える。彼等の土や木や石やの器物の中へ、始めて金屬(カチ)なるものが輸入された時、其の色、其の光、はた又其の音、如何に美しく尊く見えたのであつたらう——此の想像は甚早計であるが、若し斯う想像する事が出來るならば、アイヌが、苟も物を美化するに、我が「たま」の語の如く、「カニ」を以つてする其の間の消息がよく了解することが出來る。器物、衣類は勿論、住居(チセ)、草木、山川風土に至る迄、我が「たま」の如く皆然だ。金杓(カニピシヤク)、金帶(カニクツ)、金薄(カニカパ)、金笠(カニカサ)、金屋(カニチセ)、金泉(カニシンプイ)、金河(カニペツ)、殊に、美社を金社(カニニタイ)、よき風を金風(カニマウ)、金風が金社(カニニタイ)に颯々たる音は、『金の響』と聞くに至つては、最奇態な思想、修辭である。日本や支那て、金城鐵壁など、苟も「金」を以つて形容するならば、偏へに、堅固な、丈夫なことだ。アイヌにあつては、麗はしい、美しいことてある。

以上述べた所のものは、獨り古謠(ユーカラ)に於てのみならず。哀歌(ヤイシヤマネ)に於ても同樣だ。

然し乍ら、哀歌(ヤイシヤマネ)の形式は、多く古謠(ユーカラ)ほど立派には出來て居ない。古謠(ユーカラ)は、やゝ我が謠曲や淨瑠璃の太夫の如く、或特殊のもの——比較的聰明て、記憶力あり文才あるアイヌが之を傳へ習つて、專門的に之をよくするのであるのに、哀歌に至つては、誰ても歌ひ、又誰ても詠ずる、上代史を讀むと、國民擧げて歌人詩人てあり得た感がする如く、哀歌(ヤイシヤマネ)は、アイヌをして民族を擧げて歌人詩人たる觀をなさしめて居る。だけそれ丈、藝術としてのヤイヤシマネの詩形は、勿論ごく低級の發達階段に止るものたることを免れぬ。

アイヌは、「ヤイシヤマネナー」とむだを入れて居る間に、順次に次の句を見付けて、即座に座興を咏じなどする。或時は贈答献酬してさながら上古の歌垣を見る うだ。藝術としての價値はよし零てあらうとも、

その慘風慘雨の苦界の裡に一條暖き情火の光を點じ、辛き潮路の世の小車に、油さしつゝ所謂男女の間をも和らげ、由つて諷し、以つて怨じ殺伐暗悒なアイヌ生活を美化して、樂しく麗はしく詩の如く送らしむる慰藉者としての價値は、未容易に古謠の下におつべきものではないかも知れぬ。

樺太アイヌは、ユーカラをばハウキと云ひ、ヤイシヤマネの樣な小唄をユーカラと呼んで居る。此處のアイヌは哀歌を全く知らぬでは無いが土着の若者の行るのは一寸眞似の出來ないｔ音とｒ音とを綜錯せしめた七綴許の喈音を以つて起るものだ。之を繰返して調子を取り、それの中へ、文句が出て來る。之が樺太語の所謂「ユーカラ」だ。男女、若いものが相集つて、誰か一人が之を始める。其の間は、他の者はぢつとして唯手拍子を取つて居る。終ると、相手のものが、それに酬をやる。この時はさながら、上古の歌垣だ。

この歌、オチヨポツカニ於て二三は採錄してあるが、海濱の地はどうしても免れ難い所謂まことの「鄭聲」だ。淫靡口にするに忍びない。アイヌ種族の幽風たり召風たるものは、どうしても、下場所の山手に素朴な古風を保つて居る部落だ。下に、二つ三つ、其處に採集したたやさしい戀の贈答の歌を翻譯して見やう。

日本語とアイヌ語とは、語詞の順序は全く一致して居るから、其の點ごく幸だが、唯餘りに簡朴で、その短い素朴な飾無い語派の中に、綿々たる情趣、切々懇到眞情流露する優婉な、餘韻は、とても寫せない、たゞ逐語、意を汲み置いて羅列するに過ぎない。

七、哀歌「別離曲」

其の一

訣別の歌　一、

―(女のうたへる)―

Yai-isama-ne na!　yai-isama-ne na!
ヤイサーマネナ　ヤイサーマネナ
Ku-yupo tono!　nishatta to ta
吾が背の　みこ　明くる　日に
E-koro kotan-u　e-arapa chiki,
きみが　郷へ　君往にまさば
Imakake ta　shonē namune
此後に　げに　速く
Unukara poka　a-ki nan koro;
逢はむ　やう　相[illegible]まし

Eramishikari a-ki yakkaiki
相知らず われ等なるとも
Yai-kipit-no e-koro kotan-u
身をいとひ(煩はぬやう) きみが郷へ
Arapa hani, ku-yupo tono!
往きませ わが背のみこ
Imakake ta peure aino
此の後に 若き子等に
A-ne rok kusu u-nukar'onak
われ等はあれば 又逢ふ時あるべしその時には
A-korokiyainu aioira anak
かたみの舊き懐ひを 相わすれは
Shomo ki kusu ne
ゆめせざ らまし

—(臺灣に於いて採集)—

其の二

訣別の歌 二、

—(男、かくし)—

Yai-isama-ne na! yai-isama-ne na!
ヤイサマネナ ヤイサマネナ

Ku-kot'tureshi! inunukashiki
わが妹よ いとほしみ思ふ心を
Unukare heta a-ki shiri an,
明け交はしつつ むつみ來しもの
Yāiruka unukaranakka
束の間みじかき 逢瀬なるにも
Keutum pirika uwonuitashpa
心ごころ美しく 相見そらして
Aiwoshiknuka anakiyakka,
相慕ひ相戀ひぬ あいされど
Kunchikata uwankiri pirika
ふかくかたみに 相識るやうつくしく
A-ki shiri ne anakiyakka,
むつみ來にけり あいされど
E-koro kotan-u e-arapa yakka
汝が里へ 汝は行く(とも)
Ku-koro kotan-u ku-arapa yakka,
わが里へ われは行く(けれど)
Peure ainu ku-ne a-kusu
若き男(國中を周遊する)に われあれ

Unukaranak a-koro ramu
又逢ふ(時あるべし一其)時には 吾が二人居し 心ごころな

A-ioira sak kusu-ne ruwe-ne:
忘るゝ事 無 からまし

Ku-kot'tureshi yai-kipit-no
わぎもこよ 身をいとひ(煩はぬやう)

E-koro kotan-u arapa hani
汝が 里へ さらばいねかし

—(同じ處にて採集)—

其の三

遠別離 一、

—(女の詠へる)—

Yaishāmane na!
ヤイシヤトネ ナ!

Ku-koro ku-yupo i
吾が 背子を

Kunukara rusui,
見 まほし思へ

Koroka,
ど

Tuiwanoan gusu
遊うぞき 居れば

ene ku-kari isam.
斯くせんすべもなし

Yashāmane na!
ヤイシヤマネ ナー

Menoko ku-ne kusu
をみな見 なれば

iramu nukuri ku-ki wa
吾が ひた遲れ して

ene wa boga
かくと だに

Ku-yeika isam ruwe ne,
君に明さむ 由も なし

yakka;
さあれ

Yaishamane na!
ヤイシヤマネ ナー

Ku-koro kuyupo ya
吾が 背子 や

Nekona e-yainu ya
いかならむ心もておはすらむ
ene wagu ku-ikiga
かくのみ(あい)吾のすべ
isam ruwe ne na
無きかな(君が心の料り難さに)
—(白老にて)—

其の四

遠別離 三、

—(男、返し)—

Yaishamane na!
ヤイシマネ ナー
Nekona kata ku-iki wa
いかにとも吾が爲て
Ku-tureshi-hi
吾が妹な
Ku-nukan rusui
吾もみまほし思へ
Koroka,
ど

Tuima-no an gusu
遠うそき居れば
ene wa boga
斯くてのみ
Ku-kara isam ruwe ne.
吾がせんすべもなき
Ku-ram-sarak ruwe ne
身も世もあらず吾もこそあれ
Korona,
さあれ
Ne-um-poga ku-iki wa
いかにかも吾がして
ne-yak-ne,
なりと
Ku-tureshi-hi
吾が妹
Ku-ehangere gusu ne na.
吾はいましを喚びてとらさむ
—(同じ處にて)—

其の五

遠別離 三、

―(再、女より)―

Yaishamane na!
ヤイシヤマ ネナー
Ohon-no shomo echi-
久しく君を　見　ず
nukara yak-ne,
(そき)　居らば
Ku-tui nan-koro-be!
われは死すべし
Ku-rai nan-koro-be!
われは死すべし
Tunash-no echi-
とくとく君に
nukara kuni ne
逢はるべく
iki wa enkore
して賜び給ひれ
Ohon-no shomo echi-
久しく　君を見
nukarayak-ka,
ず　居　らば
Ku-rai nan-kon na;
我は死すべきを
En-erampoki-wen wa
いとしとだにも吾をおぼして
en-kore
賜び給ひれ。

―(おなじく)―

八、古謠「峽中記」梗概

少年英雄は、明け暮れを一人の姉の手に、育てられつゝあつた。その生ひ立ちのすまひの樣は、小さき、草のとぼその懷ろに、はぐゝまれつゝかくて幾年月。折しも世は、何神の相鬪ふ音、國の、涯より涯に霹き渡り、幾百千の神々の相繼ぎて死行く音は、日も夜も措かぬ。〔變幻怪奇、全く吾々の意表外の思想である。是は後段の伏線となる〕

少年英雄は、今は稍々長じてあつた――

あたり唯ならぬ物のけはひ、我が此の草屋の頂きに、本土人の神の遙かに渡り來る音。草屋の守護の神の、迎へて草屋に雄叫ぶ音――

〔註、これはアイヌの信仰て此の一小茅屋の內より、今起らんとする一大事變の前兆だ〕

少年は、この、啻ならざる四圍の物おとに、不審の耳を欹てた。

「何のおとぞ?」と姉に問ふ。少年は無心である。姉は、はら〳〵と涙に暮れた。〔咄何等の怪事!〕

やゝありて、涙ながらに口を開いて云ひけるは斯く――

「ああ、御身、今せめて少しだに、年たけておはしたらんには!

「今この故由を御身に語らば、恐らくは、御身は、妾(わらわ)を殺し給はむ。

〔青天の霹靂! 抑々如何なる一大秘密を女はこの草屋の戸に封じてあるのであらう?!〕

「妾は、そも、敢えて厭ひはせじ。〔愈々奇!〕

「おん身が乞ひ給ふことなれば、妾は、今は、何をか包まん。

「たゞ、妾が語るを聞き給ひて、あえ無き怒りに、はやり給はゞ、恐らくはおん身の爲に惡しかりなむ。ゆめ、ゆめ、一時の憤怒に走り玉ふな。

「さらば、妾が云ふこと、よう、心して聞いて賜び玉ひね。

〔女が語り出でんとする驚天動地の一大慘劇は、或は、少年をして狂せしめもやせんずらん。諄々として豫め諭す悲母の訓戒、溫情自ら溢れ、胸一ぱいになる〕

「前代の戰の頃ほひは、おん身が父なる人は、シヌタプカシ・ツミサンペッのわたりを統(す)べ玉ひぬ。

〔深く草莽に埋れて、渺として山家の住居に生ひ立つた一少年、始めて聞かさるゝ自家華冑の血統、驚きはさながら夢路をたどるであらう〕

「一とせ、物品交換に、おん身が母は、おん身が兄なるカムイ・オトプシを背に負ひ、おん身を懷にかき抱きおん身が父と、共々に、遙々カラプトの島へ渡りおはしぬ。

〔少年が飽く無き好奇心、この夢の如き世の物語りに、自ら膝のすゝむをも覺えざるべう〕

「カラプトの人々、その時、陸より、はるかに幣(イナオ)を翳しておん身たちを招ぎ、共々に、夜も日も毒酒〔パチエラー先生日、大災難の因を成したる酒故、呪ひて毒酒と呼び做す〕を酌みて、盛んなる宴を催しぬ。

その時、醉のすゝみに、おん身が父、

(われは、カラプトの島の、人も寶も、擧げて皆、率(ゐ)て我が郷へ歸らむ。)

と、のたまふ一と言!

「はしなくもこの一と言、大爭ひの基となり、引いては、全土の爭鬪とひろごりぬ。
〔隻手、異境の天地を蓆卷す。乃父の勇、以つて想ふべし、少年の胸は躍るてあら、〕
「されど妾が村人は、名にし負ふチワシペツの猛夫、おん身が父も、遂にはあえなく、戰場に落命り玉ひぬ
〔急天直下、喜びは矢庭にかき暮るゝ痛恨の涙、少年の血は湧くてあらう〕
「こゝに、おん身が母は、父の鎧と、父の遺した兜とを、拾ひ收めてしつかと背に負ひ、〔烈婦の覺悟、慘として、その勇愈々悲し〕
紐帶をもて自らかたく身を結束つて起ちぬ。かくて、刀を提げて陣中を縱戰し、命の限り、おん身が母はたゞ父の復讐に身を委ね、終に亦、同じ悲しき運命の、あえなき最後を遂げ玉ひぬ。〔少年の胸は裂けんとす。〕
「かくて、敵地にひとり取遺されしカムイ・オトプシは、雄々しくも今猶、身一つを擧げていくさを續けて居た。
此の間に妾は、稚きおん身を拾ひ、走つてこの片山蔭に亂を逃れ、人も通はず神も通はぬ其を名に負へる峽中の鄉に、斯くは、おん身をはぐゝみぬ。

〔註、此處の事實は、自分が平取村に聽いた古謠ては今少し詳しい。烈婦、復讐戰を決意し、身を結束して立つや、乳兒を懷いて禱をあげる。「我が夫の身の上を護らす神の在さば、などか此の幼な兒を棄て玉はむ?!」と、そのまゝみどり兒を野に棄てゝ、夫の讎のあと逐うて返り討になつたのである。事の成否は兎ゝ角も、吾々の常盤御前よりはよつぽどこの方がすきだ。捨てられたる幼な兒は恐らく露深き曉野に泣いて居た。否敵地の一少女に偶々拾はれた頃には、もう泣きも飽いて、暖い其の懷に無心に笑つて居たかも知れぬ。少女が嬰兒に對する慈愛のなさけは天賦のほだしてある。仇の片影ながら懷かれて無心にほゝ笑む嬰兒の神の如き人なつかしさには、少女は我とわが身の家とも寶とも易へかねた。遂にかき抱きて山中に奔る。斯くて若いやさしい少女子が、一片斷ちあへぬ情けの絆にほだされて、人知らぬ片山蔭に、身も世も忘れつゝ無心に自國亡滅の恐ろしき萌芽をはぐゝみ居たのであつた―誰か圖らむ此の嬰兒こそ、他日少女が祖國を阿修羅の如く鏖殺する若年の獅子王たらんとは。乳兒が一笑、早乙女が人に秘めたる柔情けとが、やがて祖國を覆す大禍亂の源泉となる人世不可測の一大運命、これ

がこの一篇の骨子である。果然！　こゝにも亦、數萬言のユーカラは、彼の古希臘の悲劇に見る運命劇を語りつゝあつたのである。

挿註は横道に入つて思はず長くなつた。さて、女の言葉は倘つゞく——

「この日頃、切りと聞ゆるあの干戈の音は、恐らく、この國の神々が、カムイ・オトプシひとりを取りこめて、大方、此のわたりへ迄も追ひかけ來るその音てあらう。〔冒頭の伏線遙かにこゝに照應す〕おん身の問ひ出て給ふことなれば、今は包みもあへず一部始終を打明けぬ。ゆめ〳〵、腹だちて一時の憤怒に身を拔き給ふなよ」

少年は、聞きも終らず立ち上りざま、憎き〳〵鞘の片はし、一刀の下にこの女をも斬拂はんとした。ふたゝび心を取直し、手をついて女に頭を下げた。

「あゝ、吾が姉樣、克うぞ、是迄この身を育てゝ下すつた。

「どうぞ、そんなら、何か父の遺したかたみを見せては下さるまじか

言葉も終らず、女は起りて、古き寶物の袋を取り出して來た。紐を解くと、中より出たものは——

神刀一振、神衣六襲、金の帶に、金の兜、女は靜に此を手渡した。少年は見るより天にものぼる心地、やをら受取ると今迄身に着けたる所の童衣を脱ぐより早くかなぐり捨てた。（次號完結）

平凡なる小說

佐々醒雪

僕は馬琴といふ男は嫌である、その驕慢な態度や、衒學の臭氣は、殆んど嘔吐を催す樣に感ずる、しかし流石は多少の學問があつて自信が强かつた、凡人以上の精力があつた。從つてとにかく凡人以上の人物を描き出してゐる、その人物眞に事實らしく活動させる手腕には缺けたところはあるが、しかも時とすると、讀者をして、暫くこの平々凡々な實社會を蟬脫して、巨人の國に遊んだ樣な思あらしむることがないではない八犬傳は其の爲に好評を得たのであらう。西遊記や、三國誌や、水滸傳などには、ことにこの點に秀てたところがある。

世人が、一に傳說や教義に拘泥し、文章にも描寫法にも、一に慣習的句法(コンベンシヨナル)を墨守してゐる時代に、自己の眼で見た世相、自己の住んでゐる世界の、日常茶飯の事を、清新な文章で、描き出して、世人が描くだけの價値がない様に考へてゐた所にも、特殊の詩趣ある材料の殘つてゐることを示したのは、一種の天才であらう。我々が、西鶴に敬服し、三馬を推重し、從つて又夏目漱石君の猫に感心してゐるのはこの爲である。

だが、若し作者に理想がない爲に、當面の天然を理想化することが出來ず、天然の要點を捉へる見識がない爲に、平々凡々な見聞を羅列するものがあつたなれば、それは下手な寫眞師であらう。或人は、天然の一草一木にも實に美妙幽遠な趣致があつて、人間の拙い手で、これを取捨するのは、寧ろこれを醜にする以所である、と頗る敬虔な態度で以つて、天然をさながらに描かうと企てた、「誠の外に俳諧なし」といつた鬼貫なども、一面この種の信仰に觸れたもので、「作りなす庭を諌むる時雨かな」と謠つた芭翁なども、實にこの主義であつた、造化に從ひて造化に歸れといふ老莊主義は、亦文藝上の自然主義或は寫實主義である。正岡子規君の晩年の俳論は、全くかゝる主義であつたと信ずる。

しかし、これは勿論作者の用意或は吟哦の瞬間の心持ちを云つたに過ぎないので、すでに文字なり言語なり一定の形をとる以上は、主觀の取捨選擇を毫も經ない作物があるべきではない。唯故意に取捨選擇した樣に感じない、即ち耳目に映じた儘を毫も飾らず僞らずに描いた樣に、作者が感じてゐるといふに過ぎないかくの如き態度は、實は作者が一定の修養を經るか、或は異常の天才であるか、とにかくに一見して客觀美の中心となつてゐる要點を捉へる丈の能力のある人にして、初めていひ得べきことゝて、これを批評家の側から見れば、やはり純然たる寫實ではない十分に作者の主觀によつて取捨選擇せられたものである。今日の所謂る寫實派の小品文や小說といふものを見ると、唯從來の敍事文や敍景文に比して、比較的に材料が多い、精密に描いてある、慣用的描寫が尠いといふことは感ずるが、材料が極めて平凡で、選擇が頗る拙いのは、選擇に意を用ゐるを要せなかつた名人の眞似をして、矢張り材料を選擇しないのではあるまいかと思ふ。

この不用意の選擇といふことは、必しも客觀的描寫に關してのみ說かれたものではない、蕪村などは佳句

を得るのは、句が自ら口を衝いて出る時にある、といつてゐる。この人の句はいふまでもなく、人事の想像が多いが、その詩的想像が湧出して來る瞬間のことを古人を友とする時だといつてゐる。鬼貫、其角、嵐雪素堂がこの人の親友であつて、眞にこれ等の人と談笑してゐると感じた時に、佳句が自ら出來る、一度この空想から覺めると忽ち凡人に歸つて了ふのである。「或日又四老に會す、幽賞雅會初の如し、眼を閉ぢて苦吟し、句を得て眼をひらく、忽四老の所在を失す。知らず何の所に仙化し去るや、恍して一人佇む」。これが蕪村の俳境である。

孔子が心の欲する所に從つて則を超えずといつたのは、即ち不用意に天地の眞に入つた境で、若し、眞に不用意に、常に天地の美を捉へる詩人があるならば、全くこれと境を同じうしたものであらう。彼の「三月仁を去らず」といふ心的狀態の頗る短かいものが、蕪村の四老と談笑する時間であらう。「不用意」といふことは、聖賢にして初めて口にすべきことである。凡人が不用意であつたならば、放埒無慙到らざるなしてあらう。

文藝に於ても凡人の不用意はやがて、平板無味、粗漫蕪雜な文となるの外はない。若しそれが寫實であるならば、勿論極めて無意味である。流石に今の寫實派は、かくまで不用意を主張してゐるのではなからうがその僞らざる天然といふことは、動もするとかく誤解せられ、曲解されてゐる。

不用意、無選擇、といふ主張は、さらに人間の醜のみをも描く傾向を作つた、自然主義は寫實主義から一變したものである。

人間には平凡が多い、寫實にも平凡な題材が多い、所謂る自然主義も亦多く平凡を描いてゐる。寫實派は專ら客觀を描く、自己を描くにも、自己を三人稱に置いて、作者はこれと利害の關係のない樣な態度で描寫するといふのが寫實派である。自然主義には主義の意識が強い、その「我」が常に極めて平凡な「我」で、その平凡といふことが、やがて人類共通の性質即ち人間の客觀性であると作者は信じてゐるように見える。若し作者の信仰が讀者をも動かすならば、これは人間の危機である。これは人間を平凡化しようとするものである。

光明ある未來のない人間、活動奮鬪の勇氣の阻喪した人間は、人間の一切が凡化することを欲するのであ

ろう。彼の社會主義とか共産主義とか稱して、人間を悉く均一な平凡な動物にしやうとする主張は、この光明のない人間、奮鬪に疲れた動物の多數に媚びるものであつて、生活難といふ弱々しい女々しい聲の高い所に、必ず多く稱說せられる。

若し今日の自然主義平凡主義の小說か、生活の奮鬪に疲れた老人の間に歡迎せられてゐるならば、御隱居の月並俳句に代つたものならば、さまで驚くには及ぶまい。これが專ら有爲なるべき青年の間に愛讀せられことに有爲な青年作者の間に奉ぜられる主義であるといふに至つては、頗る寒心すべきものである。

人間の最も平凡なるもの、恐くは多數の白痴までも備へてゐる慾は、下等動物と共通獸慾である。平凡小說はかるが故に獸慾小說となつた明治の青年は、蠢乎たる肉慾の醜塊に、最も多く同情する程に氣地意がないのであらうか。



現内閣の運命觀

容易ならぬ難產にて、四十一年度の豫算案を產み落したる現内閣產蓐の豫後は、兎角不良にして、既に一度ならず二度までも總辭職の風說を傳へ、其の犧牲として藏遞二相を喪ひ、根基著しく搖げるの時に際して、更らに又廿四議會の劈頭、三派合同の不信任案に接せざる可らざるの羽目となれり。抑々現内閣將來の運命や、果して如何。口賢なき京童は、曩に加藤外相を喪ひ、今又坂谷山縣二相を喪ひしも、猶平然として應急の善後策を講じつゝある現内閣評して、條虫内閣と云へり。朝に一片を喪ひ、夕に數片を喪ふも、容易に死に切らざるを謂ふなり。

吾輩茲に少しく各種の新聞紙に就きて、所謂條虫内閣なるもの丶運命觀を察せんと欲す。而も知らずして云ふものあり、知つて言はざるもの若くは他を言ふものあり、容易に信を措き難しと雖も、矛盾撞着の間、髣髴として自ら捉ふべきの影は存すべきか。

國民新聞の「東京便り」は云ふ

⦿西園寺内閣の總辭職も、一部の更迭にて一先づ留任と相成申候。併し何時迄持續するやは、隨分考物に候。考物とて深く考ふるにも及ばず候。議會中と見れば、大なる間違なかる可し



とは、識者の所見に候也。

と、更らに「雨降りて地固らず」の題下には

されば彼等の辭職は、彼等が内閣不統一の責任者となりたる外何等の利益を西園寺内閣に與へざる也。されば彼等の辭職は、西園寺内閣の弱點を、暴露したるの外、何等の効能なき也、されば彼等の辭職は、西園内閣總辭職の身代りにして、且つ將さに來るべき總辭職の先驅として見るの外、何等の意味なき也。

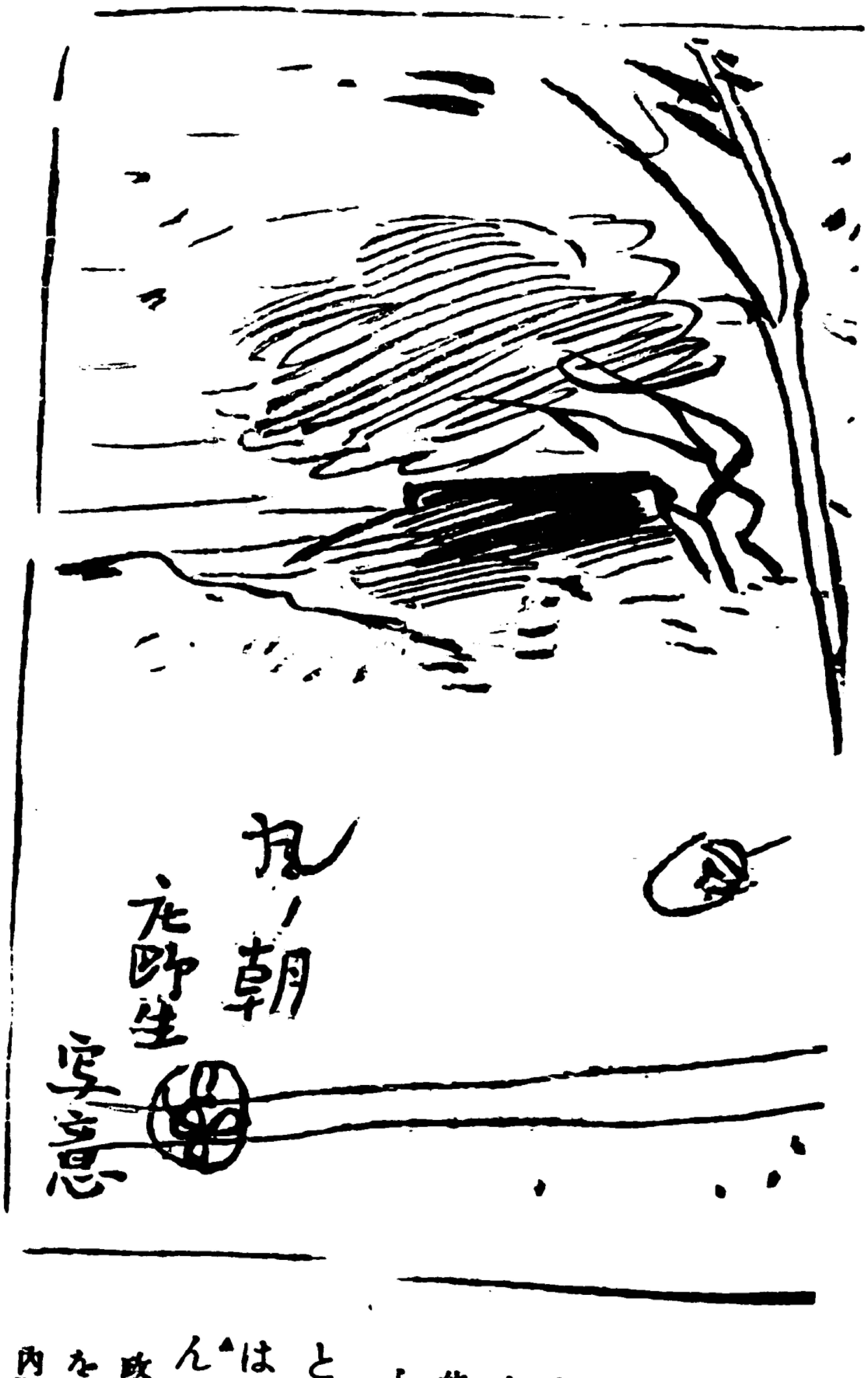
と論じ、萬朝報の「政局の前途」には

政友會の策士等は今期議會に於て貴族院の形勢甚だ不穩の兆候あり且つ前内閣系

の反抗當り難き氣勢あるを見て深く内閣の前途を憂慮し如何にもして之れを慰撫せんと魂膽を碎きつゝありし折柄今回の内訌ありしを以て益す氣を屈して前内閣系に取入らんとする傾向あり或る點に於ては現内閣と前内閣系との間に殆ど一種の默契成立し居るもの丶如く思はるゝ節無きにあらざれば或は今期議會中は現内閣を半殺にして幾分の餘風命を保たしめ議會閉會後に至り内閣の更迭を行ふに至らんも知るべからずと云ふものあり。

と傳へ、日本は『政變と大同派』に同派一領袖の談を掲げて

今回の政變に對しては我黨は未だ兎角の批評を試みるの時機に達せず左れど諸新聞の調子に依て之を卜するに多くは内閣を以て僅に形を存するも既に魂を失へるものとなし更に一大變動の起るありて安じて戰後の大經營を託するに足る可き鞏固なる内閣の現出せんことを希望するに似たり（蓋し玉堂の見解ならんか）我黨は之れより以上之を言ふ能はず強て問ふを休めよ。



と誌し、東京毎日は「一次官内閣倒れんとす」と題して

政界は既に内閣の瓦解を豫想せり、或有は桂内閣の再興を說き、他の或者は山本前海相の内閣を豫言せんとす。

と云ひ、大坂朝日は「内閣の運命觀」に前内閣系に屬する一有力者の說を掲げて

近き將來に於て假令辭職せんとするも其の口實を發見するに苦むに至らん我輩をして忌憚なく言はしめば首相は政友會腹心の者に意を含め政友會よりして問責案を提出せしめ之を動機として議會を解散すると同時に總辭職を爲し以て一段落を告ぐるに如かずと。

と誌せり。如上多くの悲觀說に對して、政友會側の氣

焰一向揚らざるが如く、僅に國民新聞の「各政黨の政界觀測」に元田院内總理の談を掲げて言ふ

凡そ物には何に限らず期限命數のある者にて何時迄も我黨内閣の壽命を維持せしめんとするは大なる間違にて更迭の時節到來すれば人力を以て到底防止し得る者にあらず要は唯或る時期を見て勇退するにあり而して其時期の何時來るかは豫言するを得ざるも國民の輿望は未だ現内閣に背反し居らざるを以て今日直ちに勇退するなどは其時期の宜しきを得たる者に非らずと考ふ且つ世上或は現内閣は元老と約するに當議會閉會を告ぐると共に辭職すべきを以てせりと唱道する說あるも此等は實に閣員の責任を知らざる者の笑ふ可き中傷說と云ふの外なし。

と、又平素政界の變動には極めて冷淡なる時事紙が

現内閣の諸氏が内外の壓迫困難をも顧みず斷然踏み止りて一旦内閣の所信と決したるものを遂行せんとする其勇氣と決斷とは我輩も平素現内閣の決定に慊らざる所多くして殊に今度の財政計畫には反對す可き點少なからざるに拘らず之を賞讃するに躊躇せざる所なれども思ふに現内閣の茲に踏止まりたる最大の目的は來る可き總選擧を控ふるが爲めにして動もすれば反對派の現内閣を倒さんとする主眼亦こゝに存することならん而して二大臣の辭職に依りて内閣の基礎に兎も角も薄弱と爲りしに相違なきと共に其後任として原、松田の政友會出身大臣に之を補はしめたる如き一時の間に合せに過ぎずとは云へ陰然何物にか刺激されて殊更に内閣の旗幟を鮮明にしたるの觀なきに非ざれば政界の活動はいよいよ今後に在る可しとして我輩の餘處ながら見物せんと欲する所なり

と云へるは聊か珍とすべきか、今や大雨到らんとして風滿樓、知らず政界明日の雲行、抑々如何。（烏山人）

金井博士の工場法論

工場法の制定は實に我邦刻下の大問題にして、我政府に於ても數年來之が調査に從事しつゝあり。其工場法案となつて帝國議會に提出せらるべきも必ずや近き將來にあらん。此際、工業政策を得意とする金井博士が「工場法論」の一文を草して去月の「法學協會雜誌」に公にしたるもの、寔に其時を得、其人を得、兼て亦其問題を得たりと謂ひつべし。

博士は最初に「工場」を定義して「工場とは多數の職工勞役者が其の居住家屋以外に在りて一定の區劃を有する場所（多くは建物の內）に於て同時に且つ規則正しく就業する處の工業的營造物なり」といひ、次に「工場法とは何ぞや」の問に答ふること極めて困難なるも、「工場法の主なる目的とする所は」

職工勞役者が工場勞働の爲めに被むるに至るべき虞ある害惡を豫防し惡弊の豫防規定あるに拘らず尙ほ實際發生せる場合には之を除去して善後の處分をなすに在り卽ち知る工場法の立法精神は勞働者の保護に在るを

といひ、而して茲にいふ「工業勞働者の蒙むるに至

るべき虞ある害毒」とは何ぞやと問ふに、其種類も一にして足らず、其事情も頗る複雑にして

或は勞働の條件より起るものあり、或は工場の建築設備より生ずるものあり、勞働賃銀の過少なるが如き、勞働時間の過長なるが如き、休業日の皆無なるか或は餘り稀少なるが如き、徹夜業の常時行はるゝが如き等は前種の害惡なり。危險なる器械を相當の豫防設備をなさずして使用するが如き、有害なる瓦斯硫酸鹽等を斟酌なしに取扱ふが如き、工場建築に火災震災落雷等に對する避難方法を缺くが如き等主として謂ふ所の業務の災危は後種の害惡なり

と說き、又「工場勞働の害惡を其醸生する所の結果其及ぼす所の影響に據りて分類せば」

或は公安の妨たるべきものあり、或は個人并に公衆衛生上の害たるべきものあり、或は國民敎育上の弊たるべきものあり、或は善良なる風俗を紊亂すべきものあり、或は社會經濟上の故障を來たすべきものあり、其他にも害惡の種類非常に多し。

「然らば則ち工場勞働の社會上經濟上に於ける關係や實に重大にして輕視す可からざるものなりと謂ふべし」と論じ、更らに論歩を進めて、「歐米諸國の工場法は皆な前述の如き害惡に對して勞働者を保護せむとする主なる目的を有するものにして」「工場法にして若し勞働者の保護を目的とする主なる規定をすら缺かむか、是れ立法の精神を沒却するものなり」と說き、又工場勞働の害惡は一面、工業の發達に伴ふ必然的結果の一種なりといひて、英國の工場法の歷史を述べて、工業革命生ずれば工場法の必ず出でざるべからざるを叙し、歐洲大陸諸國、北米合衆國は工場法の制定稍々英國より後れたるも亦此機運に促されて同一の立法事業をなせりといひ、是に由て之を觀れば

工場法の制定は實に時勢の必要に出で、苟くも工業革命の時代に遭遇し又は之れと同様の狀態を多數工場勞働者に呈せる國に於ては到底避くべからざることなり。新式機械の應用と工場工業組織の採用とは結局工場法制定の先驅たらずんばあらず。吾邦の如きも既に前二者を或意味に於て歐米より輸入したる以上は之れに隨伴すべき工場法の輸入をもなさざるべからず、機械の應用の廣大なると工場工業の發達との爲め近時吾邦工業の主なる種類日を逐ふて益々盛大に赴くと同時に工場勞働者の狀態、工業革命時代の歐米諸國に於ける工場勞働者の狀態に酷似するに至り、年を逐ふて愈々甚しきを加ふるの趨勢誠に明白なり。

と論じ、「此種の社會政策的立法をなすは決して徒らに歐米を模倣するにあらずして實に時勢の必要に基くものなり、要は唯其れ工場法をして直譯的のものたらしめず必ずや日本化せるものたらしむるにあるのみ」と結びたり。

此論文は未だ未完にして今後如何樣の論歩をとるべ

きや豫め推測し難きも、工場法の大體の性質と其必要とを說きて、殆んど皆肯綮に中る。近時工場法の名、頻りに耳に聞ゆるも未だ其內容を詳かにせざるもの少からざるべきを思ひ、玆に此論を紹介する所以也。

（あふち生）

編輯だより

校正小僧

▲我「中央公論」が此四五年來常に駸々として發展向上の途を辿りつゝありしことは夙に我讀書界の認めたる事實にして、今更ら吾人の呶々するを待たざる儀に御座候。殊に本年正月號に於て俄然急激なる大飛躍をなし啻に其內容に於てのみならず其勢力に於ても昔日の數倍するの盛況を呈し候事も亦我讀者諸彥の御承知の事と存候。今や海內の雜誌其數决して尠しとせず、而かも敢へて主張の穩健にして趣味の淸新なるを求むれば何人も其拇指を我誌に屈せざるなき有樣、發刊以來廿餘年の苦心、初めて大いに社會の認むる所となりしを喜ぶと同時に、我讀書界の進步も亦甚だ其急速を加へつゝあることを深く賀せざるを得ざる次第に御座候。

▲吾人は此深厚なる江湖の眷遇に酬いんことを期し、此際益々駑駘に鞭して改善の上にも改善を施し、以て進んで止まざる吾人の理想を追及するに全力を盡すべく候。本號以下の我誌を閱讀して、吾人の誓約の决して空言にあらず、又欺罔にあらざることを看取せられんことを希望仕候。

▲本號よりは卷頭に口繪を附することゝ致し候。專ら泰西の名畫を選んで載する積に候。本號のは十七世紀の和蘭人ゼアン、ハッカルト氏の筆に成り、題して「秦皮の列樹路（とねりこなみきみち）」と云ふ畫に御座候。同氏は風景畫に妙を得たるを以て名高く候が、此畫の如き其最も秀逸なるものにして、列樹（なみき）の間をこして、池の面（も）に射す日光の、ちら〳〵と微顫（ふる）へるが如き趣などえも言はれぬ韻（にほひ）ありと存じ候。本文の中にも二三の挿畫を入れ申候。

▲又本號よりは新たに新體詩に向ても力を盡し申候。新詩社にありて新進氣銳、其詩才殆んど老大家をして瞠若たらしむるの槪ありし北原白秋太田正雄、吉井勇、長田秀雄等の諸氏は爾後其主なる作品を本誌に寄せらるゝの約あり候。又眞に實力ある大家の作も揭載致すべく候へば我文壇に重きをなす本誌の小說と共に又斯界の一偉觀たるべしと存じ申候。

▲來月の小說欄には正宗白鳥氏苦心の作を揭載いたすべく候。可なりの長篇の由に候。白鳥氏の手腕が一作每に進みつゝあるは何人も疑はざる所、氏が如何なる傑作を成して三月文壇を驚かすべきかは吾人の讀者と共に待遠しさの感に堪へざる所に候。尙他に今一二の短篇依賴中に候。

▲尙四月には例に依て「春期大附錄號」を發行して我文壇を驚かすべく、第一流の大家に向て寄稿を乞ひつゝあり候。詳細は次號の紙上に發表致すべく候。眞山靑果氏の如きは其脚本「生れざりしならば」を同號に發表すべく先日來熱心に執筆中に御座候。而此脚本は非常に氏の自信ある作の由にて「第一人者」よりも更に遙かに勝れたるもの、氏は「此作によつて劇作者たり得るや否や試驗をなす意氣込に候」と申し居られ候。此作一度出でゝ我劇壇の爲めに一大光明を齎らすべきことを信じて疑はず候。

新年號

中央公論

目次

大好評殘部僅少

本號に限、定價金廿八錢

中央公論の讀者諸君に告ぐ

中央公論が非常なる勢を以て發展向上の路を辿りつゝあること、全く以て愛讀者諸彥の御眷顧の厚きによることゝ感謝罷在り候。扨、毎月原稿の蒐集する者益々多きを加へ、頁數の制限より絶好の材料を空しく逸し去るが如き遺憾も少からず候につき、此際定價を廿錢に引上げ、頁數を增大して、益々好材料の網羅に勉め、益々發展向上に勉むべき計畫に御座候へば右御了承下され度、此段謹告致し候也

尙近來、雜誌中落丁あるものも度々見當り候が、嚴に製本屋の取締りも致すべく候へ共、多數の事故若し萬一左樣のもの有之候節には、本社直接の購讀者は申すに及ばず、何れの賣捌店にて御買上げ相成候仁にも本社に御郵送あれば御取換申上べく候

反省社庶務部

第十三年 第二卷

文藝 新小說 雜誌

二月壹日發行

▲日本舞踊の將來及現在（長論）……坪内逍遙

小說

花神像……山岸荷葉

祇園の百合……高安月郊

褪紅……草野柴二

羊角笛……吉田白甲

幻影……太田宙花

●繪畫●

表紙 川村清雄

口繪 岡田三郎助

口繪 鏑木清方

口繪 中村中洲

口繪 鰭崎英朋

●コロタイプ刷●

●寫眞版●

▲思潮家庭▼

劇評家と劇作者の會話……小山内薰

家庭と美人……三輪田元道

實驗より得たる化粧の秘訣……遠藤波津子

▲雜錄▼

謹寫……泉鏡花

脚本「スウィート、ラブェンダー」の話……土肥春曙

近世文壇の犧牲……小森徳治

寒川雲晃……吉田勿來

▲譚叢、藝苑、社會▼

雲水生活……風來坊

故三木竹二氏……伊原青々園

文士劇物語……杉贋阿彌

初春の三座……高崎春月

猿芝居……内山正居

●小說と世論……後藤宙外

辻占ひ（小品文）……泉鏡花選

東風（俳句）……高濱虚子選

颪の日（和歌）……金子薫園選

競馬（狂句）……前田曙山選

▲時報——新著紹介——附錄十二年總目錄▼

發兌元（東京日本橋通●振替口座一六一七番）春陽堂



小説

敵

眞山青果

一

電報は都合四通來た。初の二通にはたゞ來てくれとある。そして、おしまひの分はその岡倉氏の訃音であつた。西山は翌日一杯をそれのみに思疾んで居たが、到頭思ひ切つて、その晩の夜航船で急に靈岸島を發つた。丁度居合はせた田川が見送りに立つ。

田川は今年某大學の文科を出た男で、新進批評家として世に知られて居る、學生時代から西山の作品を愛讀して、捌口の惡るい紙の贅澤な或る雜誌へ、嘗て西山素秋論を長々と書いた事もある。沈鬱な空氣に滿ちた、落付いて、そして倦怠の無い筆つきを露國のツル・ゲネーフ初年の作に較べて居た。

手荷物を預けるから切符の事まで、田川は氣さくに自分で始末して、途中の用意とあつて果實のいろ〳〵を籐の提籠へ入れてくれた。こまかい久留米絣の單衣に鼠セルの袴、鐵椽の目鏡をかけた、目付の

若々しい人である。細い鹿鼻緒の日和下駄を素足に穿いて居た。

艀の出るにはまだ間がある。田川は袂から大和の袋をつかみ出した。吸口をトン〱とベンチに叩いて、火を點けた。

「先生、僕ア大に書きますよ。讀賣かどつかの舞臺で、大に論じて見やうと思ふ。或る場合には性格論に亘つても好い、大に突込んでね、眞面目に根本から岡倉さんを評論して見ます。」

痩せた頰骨の高い西山は鼠色背廣の上着から紙卷煙草を一本出した。「企は面白いね。君の評論にも久しく接しないから、今度は豫告だけでなく、大に振つた所を見せて貰ひたいね。」とゆつたりと煙を吸つた。「然し君も隨分怠けるからね、玄關の平井ばかりも笑はれやしないよ。」と笑つて居る。

「勉强はしてるんですよ、これで。」

「また何時かのやうに圖書館の書庫へ入つて、新着本の背皮を嗅いで廻りやしないか。」

「又ですか。」と田川は背筋を反らして笑つた。待合中の顏はみな二人へ向ひた。

「全體今の評家が惡るい、無闇に持上げるんだもの。私共に云はせると、岡倉さんなざ能才すら無い作家なんだ。」

「君は又馬鹿に岡倉が嫌ひだからな。」と西山氏は俯向いた小聲。相手の大聲を憚かる風がある。

片方には遠慮が無い。「大嫌いてす、岡倉さんは要するに流行の作家てさ。あの讀者へ阿ねる樣子は何うてせう、醜いぢやありませんか。後のドオディにもあんな所はあつた。」

「幾らかそんな點も見えたね。」と西山は伏目にこごんで自分の時計を待合室のに合せて居る。小倉服の船員が、鉛筆と小さな手帳を持つて、乘客の住所姓名をつけて廻る。西山は掠れ聲で小さく名乘つた。船員は些いと二人の顏を見て次へ行く。

九月下旬には稀らしく蒸す晩である。長雨が急に朝上りした所以であらう。地震を噂して居る者もある。札賣場の前に一つ、改札の所に一つ、導線をズウンと素鳴らせる薄暗い電燈に照されて、三十人近い男女が發着所の固い木造のベンチに集つた。中には最うこの邊から節季後れの派手なリボンの海水帽など被つて居る書生連や、漁場廻りの河岸商人らしい雪駄ばきの若い衆やも混つて見えるけれど、八分までは先づ國歸りの濱方の輩で、仕切を受取りに上つた漁士どもや、奉公歸りの厭に塗ぞべつた娘だちやである。男も女も大模樣な潮染の浴衣が多かつた。ドス太い沖聲を張立つてガヤ〳〵喋つて居る。姙が奉公先の大暮しを親戚か何んぞのやうに自慢氣に吹聽して居る婆さんもある。その間を廻つて淺黄手拭を被つた女が荷籠を提げて、上總出のまだ薄澁い秋梨を賣つて居た。隨分よく賣れる。四五挺の總切りが客の手から手へと飛んだ。町家をその儘引直した屋根の低い風通りの惡い待合は、人の汗に、下場のアルボースに氣が濁つて心持が惡るい。第一は納屋倉を洩れて來る魚のむれ臭が激しく腦へ觸る。二人は成丈風の入いる改札所の柵に近かく立つて居た。

「いよ〳〵先生の時代が來た、今後の文壇が見物だ。」と田川は煙草の吸半しを棄てゝ、それを下駄に踏躪つた。

「君達が折角擔いでくれるからね。」と西山は笑ふ度にコン〳〵と咳入つた。力の無い、肺臟の底から出る乾びた咳である。

「そんな事はありませんよ。」と田川は熱心をその聲に聞かせて、「一體先生は臆病過ぎると思ふ。最少し自信を奮起さなきア駄目ですな、今の時代は自信ある者、力ある者の時代だ。それに又、公平な目で見て他に誰があります、和田さんですか大垣さんですか、眞逆先生だつてあの人達に劣るとは思ひますまい。」

「そりや僕だつて幾らか信ずる所がないぢやないさ。」

「でせう、だから此處で一番ウンと踏張つて、例の『滅亡』を一日も早く完成して讀書界を驚かすですね。」

僕はそれが待遠しくてならない。」

「有難う、然し駄目だよ、僕の作は世間に反響が無いから。」と又咳入つて骨立つた大きな掌を口へ當てる。

「臆病だな、何んと云ふ臆病なんだらう。」と獨語のやうに田川は云つて、「先生は自分の時代と云ふ事に氣が付かないのか知ら。」と齒痒さうに相手の顏を見た。

「然し僕も隨分長い間辛抱したからね。」と云掛けて、激しく咳いた。咽頭がせい〳〵と鳴るのが傍にも聞えた。そして、消耗性の潮紅が兩の顴骨へ流れた。

田川は心配して「薄着なんぢやありませんか。」

「なアに大丈夫。」と片手に左の胸元を外套の上から抑えて、凝つとして暫くは引く息を貯へながら、

「メリヤスも着てます。」と切れ〳〵に云ふ。

「明方の寒さッたら有りませんからな、特に船の上です。」

「大丈夫ですよ。」と未だ息が切れる。

「あゝ、全く先生の時代だ。」と田川は今一度獨語のやうに外方を向いて云つた。

人々はドヤ〳〵と改札へ押寄せた。

「房州行の艀は出るだよォ、荷物ある人から先に乘つて下らッせいよう。」と小聲に火傷のある小僧が高聲に觸れ初めた。

「ぢや先生、なるべく早くお歸ンなさい。」と田川は身を退いて路を明けた。

「直ぐ歸つて來ます、左樣なら。」と一番後から改札へ出る。

「左樣なら。」と田川は痩削れた西山氏の頸筋を後から見ながら、提籠を持つて跟いて行く。

西山は艀へ乘つた。棧橋際まで田川は送り出して、「左樣なら、先生。又新聞を休んぢや讀者に申譯がありませんよ。」と云ふ。

笑つて西山氏は麥藁帽を取つた。

夜の艀は出た。

外洋から吹いて來る爽かな潮風に肌を冷しながら、西山は艀の船尾に立つた。女は大概涼しさに髮へ櫛を入れる。相互に名も所も知らぬ人々を乘せた小船、その小舟を預かる二人の船頭が、素足の藁草履

に船縁を渡つて、「ほう、ほう。」と懸聲しながら、黒く鎮り返つて居る親船の中を縫つて、竿を輕るく、涼しい闇の海面をスウと流して行く。竿頭の潮雫が時々ハラ〳〵と乘客の襟や肩へ落ちる。

向河岸には青い舷燈が一つ見える、今乘込む十號の觀音丸である。赤筋入の提灯が二つ甲板からこツちを招いて居た。

二

ボオーと云ふしまりの無い汽笛に目覺めた。船はもう上總の金谷へ着いて居た。小さな舷窓を押して外を眺めたが、夜の海は未だ眞暗である。上等室に七名の乘客は如何はしい剝出しな夜話に喋りくたぶれて、いぎたなく眠倒けて居る。何も被けないで、仰向けに、グウ〳〵鼾を掻いてるものもある。西山は白毛布に纒まつて、隅ツこの方に小さく寢て居た。

「又乘せやがつた。」と鞄から頭を擡げて、外濱邊りの網持らしい一人が呟いた。

乘込はこゝにも二人あつた。一人は五十恰好の老婆で、寸分も侵させまいと我意に寢た振して居る人々の中を、言葉低う掻分けて、やつと坐るだけの居場を拵へた。「なアに、船形までだかン最う直きだよ。」と獨語しながら襟をくつろげて帶の間からマッチと籐編の挿煙草入を出した。やゝ後れて來たのは制服を着た大學生、植物採集器を肩にして駱駝毛の厚い赤毛布を持ちて居た。入口にノッソリ立て樣子を窺つたけれど皆意地惡るく踏反返つて相手にならぬ。年寄も知らぬ顏て煙管を金盥に叩いて居た。學生はむッとした樣子。ちよッと高く舌打して荷物をそこの入口へ立掛け、無遠慮に皆の體の上を跨

いて、船首の方から甲板へ上つて行つた。

「憤りやがつた。」と先の鞄の男が背後から笑つた。

時計を見ると二時過ぎたばかり、夜明には未だ間がある。二時間は大丈夫、今一睡りと思つたが、斯う眼が冴えては寢附かれさうも無い。今までは左程苦て無かつた推進器の刻み音が急に膓に響いて、ゴト〳〵と體を搖られ上げるやうな氣がする。蟹を煮るやうな蒸氣の臭が生温かく鼻へ來る。ペンキの臭も重苦しい。ポケットから土耳其卷を出したが、寢起の目にしみて、舌に辛いばかりで何の味も無い。煙筒は獸類の喘ぐやうにゴッ〳〵と息を吐く。耳を澄ますと外輪に嚙む潮の音がサラ〳〵サラ〳〵と鳴る。

「岡倉が死んだ。」と又西山は心に呼出した。岡倉は死んだ、あの剛健な羨しいほど胃袋の强い岡倉は死んだ。そして、自分は今その報知を受けて悔に行くところと思ふと、疼くほど胸の動悸が高まつて來る。なが年膿爛した足裏の刺を譯無く拔取つたとて斯うはあるまい。顧みて自らの卑怯を耻ぢるけれど、込上げる心の動搖は抑へる事が出來ない。別れ際に田川の云つた「あゝ、先生の時代が來ました。」と云ふ一言を西山は幾度も〳〵繰返して、毛布のなかにシッカリと腕を組んだ。妙に咽佛がこびり付いて、血の管に血が鳴るやうだ。西山は赤くなつて咳嗽を怺へた。

岡倉は西山の强い敵であつた。憎い畏しい敵であつた。その上、忘じがたき怨もある。精力の强い、そしてそれを矜として他を蔑にする態度が、憎くて〳〵耐らなかつた。「小說で喰へなきア、この腕で喰ふんだ。」なぞと云ふ渠の傲語を聞く度每に、西山は身内が顫へて獨りの寢床に夜中眠れなかつた。寫

眞を出して敵の眸に銹針を打込んだ事もある。でも、臆病な渠はその寫眞さへ机の引出しに隠して置きかねて、他には窃つと燒棄てた。そして、西山から岡倉へやる手紙には、何時も先方を先輩扱ひして、自ら低くするやうな文句を書きならべてあつた。

二人は殆ど同時に文壇の人となつた。學校も同じ早稲田を出た。そして、その以來二人は始終激しい競爭を爲續けて來た。それは世間の讀者や評家も惡い。銘々の贔負者を競馬々の如く嗾けて、二人が同時に立つ事を許さなかつた。一人を擧げればキッと一人を貶す事に決めて居た。互に片方を秤る分銅となつた。そして、その重い輕いが覿面に公けの生涯に差觸つた。だから、交友としては表面を美しく附合つて居ても、心の刃は何時も新しく磨がれてあつた。岡倉が寫實小說で售れば、これは又焦つて極端な心理小說を書く。密に雜誌の卷頭や製本の體裁まで爭ふさもしさを忍んでまでも、互に下る事はしなかつた。相爭ふ前には耻すら無つた。讀者より評家より、一人の西山を敵として岡倉は書き、西山は岡倉のために書いた。特に西山は岡倉に對して、强い消しがたき怨がある、耻がある。と云ふのは、岡倉の細君りか子はもと西山のふるい戀人であつた。ノップリと肥つた、色白の、髮のふだな人で、胸を張つて歩るく癖があつた。某西洋畫家の妹娘で、些いとした小說も書いた。りか子の方では無論知るまいけれど、西山は激しくその娘に戀したものだ。嘗て評判であつた西山の長篇小說「畏ろしくば」のヒイロンはこのりか子を正しくモデルに宛てたものだと云ふ。首を些いと傾げて笑ふその笑ひ振までソックリその儘出て居た。それを根まで承知で岡倉はりか子を娶つたのだ。表面の媒介者には某博士が立つて、

花々しい披露の宴を精養軒に張つた。無論この頃から耻づべき二人の私交も斷絕した。そして、岡倉は誇つた身を房州の八幡濱に退いて、心靜かに、と云つても、極めて尊大な態度を以つて製作に從事した。

八年前の九月、これが西山には終生忘れかねる日である。りか子は岡倉に片付き、自分は不治の症にかゝつた。その頃から作風もスッカリ一變して了つた。陰鬱な、そしてシニカルなものを多く書いた。筆つきが鋭くもなつた。獨身生活もこの時から企てられた。そして三十五の今日まで二三の書生を相手に寂しく暮して來た。尤もその前から風邪をひきやすい質で、徹夜の翌日なぞは屹度眞綿を頸に卷付けて居たものだが、この年の夏、三日續いての喀血に、初期ではあるが兎に角肺結核に相違ないと醫者は診斷を下した。しかし、西山は齒を喰縮めても絕望の色を他に見せなかつた。俯向いて默して居た。それと云ふのも、未だ今よりは元氣があつたからだ。野心もあつた。腿の肉を喰つても書いて見せるぞと私かに心に誓つて居た。それでも人目の無い原中なぞへ出ては——戸山の原から掛けて中野邊の景色が最も氣に入つて居た——流石に獨り寂しく泣いた事もある。飲めない酒も無理に飲んだ。何時かなぞは田舍酒に甚く喰酔つて、髮の毛を兩手に掻挘りながら、肺臟も動脈も破れるなら破れろ、氣管も裂けるなら裂けろと、わざと大聲に野中を喚き叫んで狂廻つた事もある。そして、ヘト〳〵に疲れ切つた體を草原へ投げ出して、夕月の出るまで凝つと動かず、夕暮の秋霧に濡れながら悄々家へ歸つて、冷たい書齋の褥の上へ坐つた。

りか子を娶つた後の岡倉は唯、名聲が揚るばかり、寫實小說の大家としてその踵につぐものは無かつ

た。出る作も〳〵みな非常の喝采をもつて迎へられた。特に一家族の醜惡なる遺傳傳統を極端に描寫した三部續きの小說なぞは、本にしてからも既に十幾版を重ね、新聞紙はこの小說の爲に一萬近い讀者を呼んだと傳へられる。今猶ほ衰へざる勢力で讀まれて居る。極東のゾラと評した評家もある。西山はそれを見て、「あれや賣れる小說だ。」と口にも心にも賤しみながらも、胸には始終修羅をもやして居た。そして雜誌記者や何かに批評を問はれる度每に、なるだけその善良なる方面だけを鷹揚に發表して居た。そして西山はその間、病氣と鬪ひながら、諸方の新聞雜誌へ每月幾篇かづゝの端物を書いた。中には可也世評に上つた作品もあるけれど、何處か地味で、作品に殘忍な所があるだけ、一般の受はそれほどでも無つた。眞逆に文壇の中心圈外へ食出されると云ふ程では無いが、當人が急り急るだけの目醒しい發展は見えなかつた。

處を、岡倉が今度新しい長篇に着手したと傳へられた。この春である。先天的不犯性の一男子を主人公として、その誘惑や、煩悶や、墮落やを正直に書くのだと云ふ。描寫は許されるだけ極端まで突ッ込んで、人間の獸性を大膽に忌憚なく披瀝する覺悟と云ふ。先づその豫告文だけ公表された。豫告文と云ふより堂々たる議論文であつた、飽迄も自箇を原則に置いて、時代文藝の趨勢をも罵つて居た。即ちその一節を云ふと、「見て思ふと云ふ事は、その語源の證據立つる如く、科學の淵源である。見て唄ふと云ふ、これが藝術の根本である。原始の心に批判は無い、ただ歌があるのみだ。然るに今の文藝は餘りに多く理智に囚れて居る。正しく描き正しく唄ふ事は取も直さず美てある。」と云つたやうな見解からし

て、近代の文學を臆面なく大膽に卻けた。そして、それには巧なる技工と自由なる意志が必要であると云つて居る。

西山はこの豫告文を材木坐の宿屋の二階に、批評家の田川と共に讀んだ。西山は急しくそれを讀んで、そして、「これ見給へ、面白い事が書いてあるぜ。」と、さも珍奇な雜報でも見付けたやうに笑ひながら新聞紙を田川に出した。某誌へ約束のやゝ長い創作のため、西山はこの四月頃から春暖かな鎌倉の海邊に病を養つて居る。そこへ田川が遊びながら來て居たのだ。

「無法な議論だ。」と田川も噴出して、「こりや寫實主義當初の議論だ。時代と云ふものを無視して居る。幾ら判らないと云つても、斯う無茶ぢや困るですな。」と云ふ。

「岡倉の云ひさうな事です。」と西山は然りげなく笑つたものゝ、併、心から落付いては居られなかつた。夜、寢床へ入つてからも、その事のみが頭に騷いて居る。何よりは先づ渠の誇つた態度が癪に觸る。強い自信を持つて、何所までも力で押通さうとする樣子が有々と言説の間に溢れて見える。眼中世間も評家も認めぬ剛腹さは、到底自分などの眞似及ぶ所ではない。それに、議論中心理傾向の精寫を貶して、「鳥の目の小説」と罵つた邊などは暗に自分を當付けたものとも見れば見られる。いかにも面憎くてならぬが自分には當面立つて爭ふだけの勇氣は無い。それを承知し切つて、岡倉は自分の頭へ伸かゝつて居ると思ふと、口惜しさに手も足もワナ〳〵顫えるやうだ。あゝ、強い力ある敵、憎い敵。西山は唯何がなし高い上から鋭い目で見据られるやうな氣がして獨り額に冷汗を滲ませた。

翌朝は晩く、十時過ぎ西山は蒼い顔して起きた。そして、顔も洗はないで、海の見える日當りの椽先きに背を丸くして曝らして居た。シャツを着ない寒むさうな肌は鳥のやうに粟立つて、頤髯のショポ〳〵伸びた顔を年寄らしう見せた。心配して尋ねる田川に、何か言出さうとしたが、それも急に思返して、

「僕は非常に決心した事があるんだ。」とばかり他には何も云はなかつた。この頃は病勢も餘程重つて來た。それは他の目にも自分にも知れる。聲が掠れて來たのは結核菌が喉頭に轉移したのだと醫者は云ふ。少し長く話をすると喉に熱を持つて、細い泡のやうな痰が出る。冷湯ですら痛くしみる。初めは食鹽液の吸入で緩和して居たが、近頃は最うそれすら利かなくなつた。朝晡熱發、乾咳、盜汗、すべて惡しき症候が續發した。咯血も五日に一度位づゝ屹度ある。食慾はトンと無く、夕方から夜中へ懸けて、大腿の冷え方が一通りで無い。冷えて、筋張つて、骨の髓がシンシンと痛む。些と長く片寢すると腰の關節が眞赤に腫れ上がる、蓐瘡が出來るのかと心配する位である。だから近頃はなるべく蒲團の上へ腹這になつて原稿を書く事にした。

それから一月ほどして西山が新たに書く「滅亡」の着手が發表せられた。他の雜誌物や何かの繁雜を全然一掃して、爾後二三年の精力を專心こればかりに傾注するのだと云ふ。血痰を飲みながら斃れるまでは書くと云ふ傷しい告白であつた。田川などは利用し得られるだけの新聞雜誌を利用してその吹聽に力をつくした。一篇の趣向は好く分らないけれども、兎に角天才的のある畫家を主人公にしたものである。

然し西山はそれを發表するにも、その準備と用意は一通りでなかつた。初め幾度か趣向や題目を田川

に相談した上、名ある批評家の誰彼にもそれと無く評判を聞いたりして、その上で辛つと覺悟を決めて世間に發表した。技工にも痩骨の苦心をして、新しいと云ふ新しい外國の作品を集め、それを書生に讀んで貰つたり、梗概を他に聞かして貰つたりして居た。

そして、愈その第一回が世に出たのが丁度二月前の事、七月の末であつた。それからと云ふものは一切の訪問客を謝絶して殆んど書齋の外へは出ない。次の間に始終床を伸べさして、起きては書き寢ては書き、大好きであつた溫水浴もせずに、氣違のやうになつて苦しい勞作をつづけた。田川その他の人が切りに健康を氣遣つて、色々に說いても西山は何うしても聞入れない。「なアに、死んでも恨みはありません。書きます〳〵。」とばかり云つて居る。二言目にはもう氣弱い目までを沾ませるので、押して云ふ事も出來なかつた。

今朝出たのが第四の七回目、總體では二十四回目、東作と云ふその畫工が初戀をすてゝ東京へ乘出す所まで書いた。

三

夜が明けた。西山は甲板へ出た。船房の空氣は重くいゝきれ腐つて、病疾ある肺臟には所詮耐難くあつたのだ。船は今、內房州の沿岸づたひに勝山の小灣へ入るところ。港口に西風除けとなつてる浮島は、水に濡れたやうに濃くカッキリと靜かな波の上に描き出された。

海面には、濃く、そして低い朝霧が遠く立籠めて、今覺際の海は油のやうに穩かに凪いで居るが、陸

の方、勝山は未だ夜が深かい。東を遮つて走る房州連山の懐に深々と抱かれて、長い屋根の低い漁士町は、こゝろよい夏の爽明をいぎたなく睡倒けて、眞暗に鎮り返つて居る。會所の大戸も明かない。フラフに風も無つた。番犬が二三匹、暗い中から昨夜の聲を吹立てて居た。見た所、細い朝雨が茅屋にシト〳〵と降つてるやうにもある。でも向ふは最うカツと明けて、朝の光は空へ〳〵と漲つて居た。西山は夏外套の襟を押立てゝ、濡れた甲板の上をあちこちと歩き廻つた。幾らか肌寒むいやうにもあるが、さて、好い心持。強い海氣は香深く氣管に流れ込んで、頭が頓に洗はれたやうである。幾度も幾度も貪つて吸つた。

港の入口で汽笛が一つ長く引張つて鳴つた。艀を呼ぶ相圖である。

ガスに包まれて、相模の方は全るで見えないが、唯一つ三浦岬の回轉燈臺が時々白い弱い光を夢のやうな霧の中に閃かせた。間に靴先を三つ叩く位の間はある。空は高く晴れて居る。そして、視野の内にある海は藍のやうに濃く、平らに凪いて、それを攪亂して行く船足は長く白泡として殘つた。

汽笛に驚かされたのか、帆綱箱の陰からノッソリ起きて來る人がある。曩の大學生である。毛布を引被つてそこに夜を明したと見えて、髪の毛がピツタリと頭に張り付いて、淺黒い角ばつた顔にキラ〳〵脂が浮いて居た。無愛想に西山の前を大跨に通り抜けて、爪先を揃へて甲板の一番突ッ尖に突つ立つた。そして凝つと黒い勝山を見て居た。

「何してやがるんだ、勝山は何時でもだ。」と油染みた紀州ネルのシャツに小倉のヅボンを穿いた小僧が、

ブツクサ云ひながら艙口から上つて來て、やけに汽笛の紐を引張つた。それでも未だ艀の出さうな模樣がない。

「畜生！それて船づとめが出來ッかよオ。」と、半分は歌がけてグイ〳〵としよ引く。そして、又ツル〳〵と索にすがつて、下へ降りて行く。目を合はせると、學生はそれを笑ひながら眺めて居た。

ギイ〳〵と櫓聲をひびかせて、カンテラを舳先に點けた艀が霧の中を流して來る。一人の船頭の白い鉢卷だけ好く見えた。

「おうい、何してるだよう。寢惚め。」と下から小僧が怒鳴り立てた。その聲が遠く木靈して歸つた。大廻りにグルリ一廻しして、船足がピタリ停つた。それでも水搔きは氣忙しく空轉りして、白い水泡をガア〳〵と船の兩側に搔き出してゐる。岸は淺い岩床てあつた。

艀は着いた。一しきり、何やら兩方で喚き合つて居たが、やがて、「へんちや、どつこい。」と云ふ威勢の好い掛け聲が舷艙に起つた。船長まで總がかりで、荷返しの籠を艀に積み込むのてある。

西山はそこを立つて船尾の方に來た。癖で、兩手を後腰の上に置いて、浮島の方を眺めて居た。海は殆んど明放れて、吸込まれたやうにガスが水面に沈んで了つた。眞黑に洗ひ出された島の根方に波がドブリ〳〵と眞白に碎けて、羽の白い水鳥がスウと環を描いて飛んて居る。流し網の小船が一艘居た。船上を流れるまゝに任せて腰蓑の漁士が二人網綱を森閑と手繰り寄せて居た。一人は五十ばかりの老爺、一人は白手拭を被つた年若い娘である。二人とも口も利かず、廣い海にただ二人と云つたやうに、雫の垂

る綱を手繰つては船の中へ蜷局を卷かせてゐる。娘はチラとも此方を見なかつた。そして、時々綱に掛つた海藻を取つては、それをポンと後ろの海へ投げる。手が白く見えた。

何時の間にか、大學生も傍へ來て、西村に並んでそれを見て居た。

「羨ましいやうですな、何の苦勞も無さゝうだ。」と西山は學生を見て笑ひかけた。

「然うてす。」と學生は云つた。

艀に別れて觀音丸は動いた。そして、船員の惡戯が出掛けた、船をわざと網船の方へ片寄せて可也の傍を走らせた。その機に煽を喰つた小船は大搖れにグラリと搖れた。船員どもは聲を合せてドッと笑つた。老爺が何か惡態を云つたやうでもあるが、間が遠いのでそれは然し聞取れなかつた。

「惡戯をしやがる。」と學生は見て居た。

高崎、南無谷、富浦、多々良と過ぎて、船は大武の岬へかゝる。その間房州の連山は低く高く岸を傳ふて走る。山の裾が直ちに海中へ突出す所もある。そして、何れも根淺い草山ゆゑ、晩夏の深緑は、沿ふて部落する村々を、涼しくそして小暗く見せた。大武の岬を廻ると、そこから館山の灣は一目に見える。それに、連山も所々間が斷れて、濱も波穩やかな砂濱となる、これまで過ぎて來たやうな、無いと云つても波の騷ぐ磯潟ではない。

海軍射的場の目標前を過る時、西山は大勢して櫓を叩くやうな響の時に廣い海面を渡つて來るのを聞いた。そして、そこから海上二里に近い鷹の島沖の島の間に當つて、幾何十艘と知れぬ小舟の集つて居

たのを見た。中には赤や青の吹流しを立てたのもある。前の音はそこから來るのだ、時々はドッと鬨の聲もあがる。

「何んてせう。」と西山はそこに立つて居る大學生に尋ねた。道々いろ／＼と話し込んで、最う學生の名刺さへ貰つた。理科大學の生徒で、植物採集のため總房の山めぐりをするのだと云ふ。

「鯨です。あれ見えませう。」と學生は波の中に黑いものを指した。

どんどう鯨と云つて、やつと二三間、長くて五六間に足らぬ鯨の群れを漁士どもが追卷にしたのである。成程、目を凝らして見ると、黑い形のものがヒヨイ／＼と波の上に跳り上がつてゐる。

「餘程居るやうてす。あれだけ船が出たんてすから、少くとも五百や六百は居ませうよ」と學生は付加へた。

「何うして捕るのてす。」と西山は物奇らしさに捕り方を問ふた。

「小さいから譯はありません、網て抄ふのてす。」と親切に捕り方を說明してくれた。臆病なもので網を見せるとそれを突切つて逃げることを爲ない。て、漁士は獲物を遠卷にして沖からヂリ／＼と濱方まで寄せて來る。魚は恐れながら段々小さく固つて、動きの取れない淺濱まで押されてる。すると、濱々の漁船が相圖に集つて、大きな疊網に抄ひ取るのてある。取卷いてさへ置けば三日ても四日てもそこを逃げないと云ふ。

「そして、その網と云ふのが君、やつと一尋か一丈の深さしか無い流し網なんてす。逃げるも逃げない

も無いぢやありませんか。馬鹿なものですよ。」

「何う云ふもんでせう。」

「何う云ふもんですかな、大方網が餘程大きく鯨の目にや見えるのでせう。」

「馬鹿なもんですな。」

「馬鹿なもんですよ、然し、鯨ばかりも笑はれない人間だつて同じやうな事がありますからな。網は則ち運命とも見ることと出來るでせう。」と學生は不似合なことを云ひ出して西山を驚かせた。

「然う云へばまアそうです。」

「矢張り網を突切つて見るてすな。恐れず猛進したら存外手耐の無いものかも知れませんな。」と學生は笑つて、又舳先へ行つて立つた。

西山は何と云ふ事なしに引付けられて、大學生の逞しい肩付を眺めた。何所から何所まで骨太くガッシリと出來て居て、身内に溢るゝ活力の洩し所が無いと云つたやうに見えた。

何時の間にか五六人の乘客は鯨見物に甲板へ集つて來た。さきの網持らしい男も居た。早速算盤を取つて、鯨が六百、諸掛雜用を差引いて、先づ三千兩の儲はあるなど噂して居た。西山は曩から長い間立つて居た苦しさに、少し濡れてゐる帆木綿へ腰かけて、そこから遙かに眺めて居た。

漸々はスッカリ明け放れた。そこゝに白い炊煙が見えた。朝の日は河名山の後からカッと射しつけて、海の上は一度は光を持つた。皆の影が長く水の上に流れた。キラ／＼と朝晴れの日射て、今日も又

幾らか暑いかも知れない。

「ほら、一つ上つた。」と下の船艙で皆が囃し立つた。パチ〳〵手を叩いたものもある。見ると一艘の漁船が切りと勝利の旗を振廻して居た。

「ほら、又上つた。」と間も無く叫ぶ。

西山はやつと軀を起して見物に立上つた。

四

那古の濱へ着いて、西山は一旦そこの旅館に宿を取つた上、偖それから並木づたひに八幡へと俥を急がせた。寢不足の所以か宿屋では朝飯も取らずに生玉子を二つばかり啜つた。

岡倉の家は湊橋の袂から横に外れて、小松原の間を二町ばかり、川口に突出して新築した二階建である。防風の松原が前にあつて、それを拔けると直ぐ濱になる。今見て來た館山灣である。

玄關先きには、定紋の付いた水手桶を置いて、傍の塗盆には鹽と味噌を手鹽に盛つてあつた。柱には新しい清淨札が貼つてあつた。

「あ、お葬式は出て了つた。」と荷物を持つて來た車夫が呟いた。すると、何と云ふ事はなく、鋭い目付て車夫の顏を見た西山の足先はワナ〳〵と顫えて、息がつまるやうであつた。鷄が二三十羽、門脇の鳥屋からケッ〳〵と喧しく啼立てゝ居た。

二三度案内を乞ふて、やつと出て來たのは手傳らしい、十五六の赤ッ毛の田舍娘である。

「奥樣にお目に掛りたい。」と西山は用意の名札を出した。
「奥樣は居ねえだよ。貴方ア誰だね。」と突つ立て居る。
「東京から來たと云へば分かる。」と西山は苦がり切つて云つた。
小娘と入違ひに、土地の者らしい四十恰好の赤ら顔の男が出て來た。紋付の着流してあつた。
「貴方樣が西山先生て、好うお出なさりました。」と如才のない揉手をして「奥樣もえらいお待兼ねだアて、何うぞはアこちらへお通り下らッせい。」と云ふ。
「葬式は最う出ましたか。」と云ふ聲が何故か自分ながら急き立つた。
「惜しい事ッてな。ツイ今の先て御座りましたよ。さア何うか。」と先に立つて客間へ案內する。外には四五人、所の客が悔みに集つて居るが、洋服姿の西山を見ると皆窮屈さうに坐を辷つて、隅ッこの火鉢へかたまつた。臺所へは近所の嬶衆や娘どもが大勢手傳ひに集つて、調菜に大騷ぎてある。夫婦二人に雇人だけの暮ゆえ、間數は然うも無いが、故々大工を東京から呼寄せただけのことはあつて木口も可也揃つて、軒も高く明るく出來て居る。
「病氣は何んてした、急病てすか。」と西山は茶を持つて來た前の男に問ふた。
「腦溢血とか申して、俗に云ふ卒中て御座りましたよ。晚方の事だアて、少し酒を上つて風呂へ入つて、先生好い氣分になつて二階の梯子段へ一足掛けると、そのまゝドタリだ。」
「然うてすか、岡倉に腦氣があらうたア些つとも思はなかつた。」

「何しろ惜しい事で御座ります。私等にはテンで分らないけど、岡倉嶺南先生と云へば先づ小説では日本一の先生てすからな。」

「然う。」と西山は云つた。そして、何と思つたか冷かに低く笑つた。

「村方の者共も皆今度の事ぢや我骨折つてるて御座りますよ。村の名譽が一つ無くなりました。何の道日本一と云へばなア貴方。」と一角接待顏に留度ないほど岡倉を賞め上げて居た。

「然う〳〵。」と西山は唯尊大らしく構へて聞いて居た。

ドヤ〳〵と玄關に足音して、外から入つて來る。葬式の歸りとは直ぐ知れた。

「婆や〳〵。」と高く呼ぶのは若い女の聲である。そして、「あ、誰ても好いからね、鷄に餌をやつておくれ。可哀さうに朝からの騷ぎで餌をやるのを忘れて居た。」と差圖して居る。その聲を聞いて、西山はピクリと太い眉毛を動かせた。手も顫つた。

「あ、奥樣だ。」と前に畏つてた男が慌てゝ飛び出した。

西山は俯向いて煙草を一本拔出した。

「然うてしたか。」と應答へして、その人だけ一人玄關からズウと客間へ入つて來た。

「まア西山さん。」と紋服を着た若い女が、頽折れるやうに西山の前に坐つた。りか子である。

「晩くなつて濟みません。」と西山は急に坐り直しながら云つた。頑らしう目を膝に下して、相手の顏を見ない。

「全て最う夢のやうで御座います。何しろその日の午後までは何の事もなく居て、急にこんなになるんですもの。今以つて何うも本當とは思はれないやうです。」と、りか子は袂尻で目を拭いた。

「聞きました、皆、憂の方から聞きました。」と云ふ西山の聲尻は掠れた。

「平常は然うお酒も頂きませんのに、脳溢血だなんて貴方。」聲を立てゝ噓唏つた。

西山は默して居た。

「それでも、あれは何時でしたか、何んでも亡くなる二三日前の事です。醫者が八釜しく申すのを聞かないで、私を枕元へ呼寄せて長〳〵と遺言なのです。痙攣つた右の瞼も幾らか弛みまして、舌の硬もその時ばかりは餘程癒つて居たやうでした。そして、色〳〵家の事や何か話のあつた後に貴方の事も出ましてね、西山君に遇はずに死ぬのが殘念だ、話がある、話があると申します。

「私に岡倉君が。」と西山はコクリと咽を鳴らした。

「は、然うなので御座います。今頃云つてやつても來ては下さるまいしと、溜息を吐いてでした。全體、近頃は妙に好く貴方のお噂が出まして、西山君に遇つて見たい、何うしてお出なさるだらうなぞと、始終話暮して居りました。御病氣の模樣も大層心配して居ました。御病氣と云へば、申後れて、その後どんな御鹽梅で被在います。」と、りか子は泣脹れた目を上げて西山の顏色を伺つた。

「私の病氣、なアに大した事はありません。」と西山は苦い顏をして素ッ氣なく云つた。

「それはまア何よりで御座いますね。何時かあの新聞でお書きになる小説の告白を拜見しました時、餘

程も惡るいやうにあつたものですから、それで岡倉も猶ッと御同情致したんてせう。嗚呼、以前は親友だつたと、いつも然う申しててした。」

「憐れまれたんですな。」と西山は俯向いたまゝ肩を刻んで低く笑つた。

又ドヤ〳〵と大勢歸つて來て客數は一杯になつた。西山も知合の顔も三四人居た。それにりか子の里方の者も居た。外は大抵土地の者共てある。所の風俗に倣つて棺は今日一日を寺へ預けて置き、夜潮の乾るのを待つて火葬にするのてある。

客で煩さからうとあつて、西山だけ一人二階の六疊へ通された。それに船の疲れもあらうと、りか子は自身に寢床も延べ、枕元へは岡倉が催眠の料にするキユラソオのニツケル瓶まで添へて行つた。南を受けた眩しいほど明るい廻椽の室て、もと岡倉の書齋てある。州の岬から掛けて穩かな内海が一目てある。バタ〳〵と舷を叩いて、曩の鯨取りが懸命に鯨を捕つて居る。濱傳ひは又その見物人て眞黒に人が集つて居た。

今日のりか子はスツカリ變つて居る、八年前のその人ては無い。痩削のキツソリした體付てあつたが、見違えるほど自體が肥えて、脂肪の女となつた。濱風の所以か色も黒ろく、皮膚がたるんで見える。丈夫らしくもあるが、鈍にも見える。それに長い間田舍暮しして居るので、態度が何うしても鈍い。

書架も懸軸も机も褥も、總て部屋中が以前の儘てある。原稿棚には書きかけらしい原稿もあつた。一體に凝り性の岡倉の氣性は、室の隅々まで行渡つて、飾ッ氣のない自分の書齋なぞとは全るで樣子が違

ふ。懸額一面にも陶器の一輪挿にも贅澤な嗜好が見える。宣德の手焙には小さいながらも硯形の銀瓶を掛けてあつた。

「こゝで書いたんだ。」と然う思ひながら、西山は厚い生絹の褥の上へ坐つても見た。硝子障子から日が眩しく射付けて、紙を置いたら字がチリ〳〵と縮みさうである。好くこんな所で書けたとも思つた。西山は常に弱々しい北明りを好んで、寒さに顫えながらも北向に机を据ゑる癖になつて居るので。瞼の重い蒼曝れた顏して、西山は何時までも机の前に考込んで居たが、日に當るほど身内がゾク〳〵して、大腿が筋張つて來る。額は少しの熱もあるやうなので、急いでネルの寢衣に着換へて、シャツの儘寢床へもぐり込んだ。そして、何度も〳〵寢返りばかりして何か考へて居たが、その内には昨夜の疲れが出てグッスリ寢込んで了た。

下座敷の騷々しさに目を覺ましたのは、午後の三時過ぎであつた。日は西へ廻つて、海の色は濃く光つて居た。カン〳〵と鉦を叩いて、お念佛が下に初まつた。これも何れ所の風なのだろう、男の聲で和讃の音頭を取る。

西山は窃つと寢床を拔出て、又悶倉の机に坐つた。そして、耳を梯子段に傾けながら、ソロ〳〵机の抽斗を引いた。その中には、當座の書付やら反古やら他の手紙、名刺などゴッチャに入つて居た。西山は臆病らしい手付きで、一つ〳〵それを檢べて見た揚句、皮表紙の可也大きな手帳を拔出して慌てゝ懷へ隱した。そして、又蒲團へもぐり込んで、スッポリ引被つた毛布の中に急しく中の頁を繰拔けて見た。

日記か何かと思ひの外、それは當座の支出入を書付けた、云はゞ小使帳であつた。あの投遣らしい男に好くこんな小工面な事が出來たと思ふ。西山は周圍に氣を配りながらその手帳によつて、ほゞ一日の收入やら、金高を紙數に割つた一枚の稿料やらを胸の中に算用して見た。て、又寢返りするやうに擦り起きて、手帳をもとの引出しへ藏つて、今度は用箪笥へ手をかけた。金具を片手に抑えながらソット開けた。これには書付類が一杯に入つて居た。本屋との定約書や何かである。そして、それを搔き探して居たが、「あ」と顏色を變へて忙しく一本を拔取つて引出しを閉めた。西山素秋樣と表書した厚い手紙が入つて居たのだ。流石に手が顫えて、動悸が激しく打つた。日附を見ると八月の二十二日、若しこの年に書いたものとすれば、ツイ一月ばかり前に書いたものだ。

流石に盜賊に似たる卑怯を耻ぢて、手紙の封は切らなかつた。そして、それを又竊つともとに收めて、枕に就いた。枕に就いたが、目を鋭くして凝つと天井を眺めて居た。餘程厚い、半紙にして十枚位はある手紙だ。

五

果物と茶器を持つて、りか子は懵ッとした顏して上つて來た。西山は寢床を獨りで片付けて、欄干にもたれてボンヤリ海を眺めて居た。りか子は連日の疲勞に身體が萎さつて、歩るく膝頭に力が無さゝうだ。薄地セルの單衣に、色氣の無い夏帶を小さく結んで居た。後に垂下つた小紐には氣も付かぬ樣子である。

「そこは夕日が射しますから、こちらが好しう御座いませう。」と氣重さうに歩いて敷物を北窓の下へ設けた。そして、ドタリと膝を折つてそこへ坐つた。

「嘸お疲れてせう。」と西山は海を向いた儘然う云つた。

「何てすか最う私病氣にてもかゝりさうてす。何から何まで女の手一つなもんてすから、何うして好いのかサッパリ分りません。」と年寄らしう兩手を膝に置いて、グッタリ首を拔いて居た。

「今夜の潮は何時てす。」

「さア十二時幾らとか申しました。」と、それでも新しく茶など淹れて居る。

「おや夜中の火葬てすな。」

「え、ても何うか貴方はお構い下さいませんやうに、故々東京から被來つて下すつた御親切だけても充分て御座います。もしか御病氣にても罹ると不可ません。」

「病氣なざ、なアに。」と西山は厭な顔した。

「あ、然う〳〵、曩きお話するのをスッカリ忘れて居りましたが、岡倉が貴方へ上げると云つて、徹夜して書いて置いたお手紙が御座いましたつけ。」

「手紙てすか。」と西山は急に鋭い目てあつた。

「何んても原稿紙へ、それは長い〳〵手紙てしたよ。」と臆劫さうに立つて、机の引出や其邊中をガサ〳〵探して居る。内容を出ッ放しにして、あともロクに閉めない。

西山は不安の目付て、その後姿を凝つと見ながら、「一體何の手紙なんてす。」

「何の手紙てすか私には存じませんけど、何んても此邊にあつた筈てしたが、何所か探したら有りませうから、何れお歸りまてには屹度探して置きます。」

「何故出さなかつたのてす。」

「さア、何う云ふもんてすか、一體何事も私なぞへ相談を掛けない人てしたから好くは判りませんけれど、何んても餘程大切らしい手紙てした。それに、始終口癖のやうに西山君は僕を誤解して居る〳〵つて申してましたから、大方そんな事て御座いましたらうよ。」と、茶を茶椀へ出して、「さ、何うか。」とすゝめる。

「誤解と云ふと、それぢや僕の方ばかりにあつたやうだ。」と故とらしく笑ひながら、茶椀を受取つて又ツイと椽先へ出る。

りか子も旨さうに茶を二三杯飲乾して、「全くてすね、妙にお遠々しくなつて了つたので、岡倉も始終殘念がつて居りました。まア、斯うしてお話するのも八九年振りてせうね。」

「然うなりますか。」

「然うてせう、私こちらへ參つてからは一度もお目に掛りませんもの。」

「私は知つて居ます。最後にお目にかゝつたのは音樂學校の演奏會の晩てした。恐しく月の好い夜てね。」

と西山は言葉に力を籠めた。

「そんな事も御座いましたね。今から思ふと全るて夢のやうですね。」と女は全て昔を恐れて居るさまだ。

「何しろ貴方は女學校での才媛と云ふ評判であつた。」と西山は冗談らしい口振を聞かせた。

「ほ、トンだ才媛です。才媛も斯う汚ないお婆さんになつちや駄目ですね、最うスッカリ田舎者です。」と懶さうに笑つて、生欠伸の涙を眼に溜めた。顔の小皺と云へ、何う見ても本年二十九とは見えない。でも氣が付いて、桃の一つを取つてナイフを當てた。「そして、貴方はあれからズウとお獨りですか。」

「妻を貰つたと云ふ評判でも聞きましたか。」

「でも、まア何かに付けて御不自由でせう。」

「慣れば然うでもありませんな。」と果實を剝く手先をウッカリ眺めて居た。水仕事でもするのか手の指も荒れて太かつた。

「そんな棄鉢を被仰つて。御病氣なら猶つと奥様の手が入るぢやありませんか。」

「然うですかな。」と冷かに云つた。

「然うですかなつて、然うに決つてるぢやありませんか。」と辛つと一つ剝き終つて、それを青磁の小皿に盛入れ、次ぎの一つを取る。夏の果物の香高い漿はりか子の指の間をだらしなく肘へ流れた。

「然し、岡倉君は幸福な人であつた。」と西山は突然全るて別な事を思出したやうに云ふ。

「何うしてでせう。」と皮を長く剝いて居る。

「何うしてッて、第一世間の評判にお聞きなさい、大したものですよ。」とりか子の俯向いた横顔を注意深かく成つて居る。

「だつて、最うこんなになつちや世評も何も無いてはありませんか。」とナイフの手を留めて聲を詰まらせた。

「然し岡倉君の名は長く殘りますよ。」

「それは然うかも知れませんけど、何よりも私は小兒が一人欲しかつた。これぢや末の樂みと云ふものがありませんものね。」

西山は睨むやうに舊い戀人を横から見据えた。目は重く腫れて、鬢も澤なくそゝげたまゝ逆上性の脣ばかり際立つて紅く冴えて、顏の地肌は脂ッ氣が無くカサ／＼乾いて居る。肩を落してペットリ坐つて居る態が、さも／＼根も精も盡き果てたと云ふやうに見えた。

「ねえ西山さん、貴方なぞは未だ然うは思召すまいけれど、子供ですよ、年寄つて子供の無いほど心細い事はありません、末の樂みと云ふものがありませんもの。今度のやうな事があるに就けても、私はツク／＼然う思ひますよ。」

「然うですかな、僕なざア自分一人の心配すら未だ付かない、子供の事なぞ考へて居る閑無いですよ。」

「男の方は皆それてす、岡倉なンぞも始終なんな暢氣を云つて居りました。」と剝き終つた果實を客へすゝめた。

西山は突然、

「然し貴方も隨分お變りてすね。」と思入つた調子て云つた。目は正しくりか子の顏に向いて居た。りか子は別にそれを避ける風もなく、「變つたと云ふのはお婆さんになつた事てせう。然う何時々々まて娘頃の氣ても居られないぢやありませんか。」

「然うてせうかな。」

「然うてすともさ、最う貴方間もなく三十てすもの、女子の三十と云へば、先づ男の四十か、もつと以上と云つた所てせうよ。」

「然うてすかな。」と西山は貧しい心になつて口を閉ぢた。何時まて話しても張合が無つたのてある。

六

その晩十二時過ぎに火葬にして、翌朝拂曉の骨上げ。その夜は家に大勢人を集めて、また所風のお念佛がある。賴れて西山もその席に列つた。念佛と云つても宵の間は酒が出て飲むやら食ふやら大騷てある。りか子もその中に雜つて見得もなく口を動かして居た。そして二時、三時、段々夜が深けて、河口の波音が荒らく聞える。りか子はと見ると、これは新佛の傍にションボリ坐つて、俯向いて念佛しながら、コクリ〳〵居睡して居た。でも他目を憚つては時々目をさます。叩いて居る撞木の手が段々間遠うに幽かになるかと思ふと、急に氣か付いてカン〳〵と忙しく打つ。西山は憐れむと云ふより、寧る憎むやうな目色てそれを時々見据えた。

骨上げを濟まして、西山はその日の二番で東京へ歸つた。やつと探したと云ふて、りか子は例の手紙を持つて艀際まで送つて來た。明らさまに日に照されて見ると、りか子の疲れ衰へたさま一層目に立つ。眼瞼にポッと鉛色の隈が翳して、頤も鋭くなつた。薄い髮の毛が赤く透ひて見えた。

「ぢや西山さん、何れまた東京でお目に掛ります。里はあの通り、他に便る所も無い身體ですから、何うか以前のやうに御交際を願ひます。長く田舍へ引込んで居たものですから、東京には最う御相談相手も無くなつて了ひました。」と、萎れる。

「承知しました。」と西山は口少なに云つて、濱茶屋の椽から沖の方を眺めた。

「これから何うして岡倉の後を立てゝ行つたら好いか、それすら未だ思案が付きません。何しろ一杯〱の暮してしたから、餘計苦になります。何に彼とお世話を願はなくちやなりますまい、何うか其の節は好ろしく。」と諄々頼んで居た。

西山は唯「は、は。」と答へて、汽船の着くのばかり待つて居た。

船が來た、乘つた。

二日續いての所勞に、西山は云はれぬ違和を身體に覺えて、蒸汽船に乘るなり仆れるやうに白毛布を引被つて了つた。外に連れが二三人あつたので、ポケットの手紙が氣になりながらも、その家に着くまで讀んで見る間は無つた。

東京は雨であつた。細い寒い秋の雨が九月下旬の午後をシト〱と降つて居た。靈岸島から本郷へ歸

る車の中でも、冷氣は靴先を透して身體に滲入る。胃袋に異物でも入つて居るやうに氣は重く、何とも云はれぬ不快であつた。途中車を降りて、酒でも飲まうかとも思つたが、それすら臆劫なので止した。

夕方、やつと家へ着いた。

「まだお歸りがあるまいと思つて、實は。」と慌て騷ぐ書生や下女に險しい顏を見せて、西山は瘦せた肩を聳て丶自分の書齋へ入つた。一昨日出た時のまゝ、掃除もしてない。書籍や炭取やランプを室中に取亂らして、茶道具などはその時のまゝである。

「何うも濟みません、唯今片付けます。」と書生の平井は恐縮しながら、自分の箱火鉢の火氣の薄いのを持つて來た。

西山は默つて冷たい自分の褥へ坐つた。觸つて見ると外套は雨飛沫にシットリ濡れて居た。そして、ポケットを探つて岡倉の手紙を出した。一旦封目を檢めて、急しく封を切つた。長い〳〵手紙である。例の薄墨の幼びた筆跡で「僕は男らしく云ふ。」と云ふを書出してある。相互に斯う別れては居るもの丶、相互に舊い友達ではないか、僕は舊い友達の心を以つて君に云ふ、君も又その舊い友情を以つて讀んでくれる事と信ずる、と、あの剛岸な友人としては例に無く謙遜つた、そして溫い言葉を以つて書いてある。

「先生お掃除しませう。」箒を持つて平井は恐る〳〵入つて來た。

「あつちへ行つて。」と西山は小さい、そして光る目で門弟を見た。

平井は恐れて出て行つた。

外の雨はシト〳〵と降る。借家建の床の低い椽はその撥返して、端がズッと濡れた。それに火氣の無い部屋の空氣は人氣に餓えて、ゾク〳〵するほど肌に寒むい。

雨の夕暮はウッスリ暮れて、室の中は手許が見えないほど暗い。西山は手紙を持つて椽先へ出た。その柱に凭れて凝つと手紙に目を放さない。未だ濡れた帽子を被つたまゝてある。鉢前に人背ほどある八ッ手はその廣い葉に雨を受けて周圍に飛沫した。それが眞向に顔や襟にかゝる。西山は顔を濡らしながら手紙に讀耽つて居た。

「先生、田川さんてす。こちらへお通し申しませうか。」と平井が又顔を出した。

「むゝ、むゝ。」と答へて、西山は別に氣に留める樣子がない。

「先生、好く早くお歸りてしたな。」と田川は椽先をドン〳〵と蹈鳴らして入つて來た。

「何うてした、房州行は。」と問ふ。

「些いと待つてくれ給へ。失敬します。」とそれても挨拶だけはして、又その手紙を讀んて居る。

「恐しく長い手紙てすな、誰てす。」と田川は無遠慮に落ちて居る封筒を取つて見た。そして驚いて、

「先生、こりや岡倉さんぢやありませんか、一體何うしたのてす。」

「岡倉てすよ。」と口眞似するやうに云つて未だ讀んて居る。

「急に寒むくなりましたね、お身體は何うてす、私はそれを一番心配して居ました。」

「え、なアに。」

「顔色も惡るいぢやありませんか。」

「え。」

「無理てしたな、全く、夜中の旅行は。」

「え。」と讀んで居る。

讀んで〳〵長い手紙は終つた。それても、未だ手紙を離さず、二ケ所三ケ所の所々を又讀直した。脣をピリ〳〵顫はして蒼い顏てあつた。

「何うしたんてす、一體、この手紙は。」と田川は待もとかしがつて又尋ねた。

「なァに、他の事てす。」と低く笑ひながら、被つて居た帽子を急に椽へ投付けた。そして、座敷へ入つて來て話した。

西山はその日から床に就いた。七八日續けて寢た。醫師も後からその房州行を聞いて、不攝生の甚しい事を責めた。健全てあつた右肺にまて水泡音が聞えると云つて、樟腦の入つた强壯藥を置いて行つた。

「何うしたんてす、讀者が待兼ねて居ます、早く癒つて、『滅亡』のあの續きを書かなくちやなりまいまい。」と田川は見舞に來る度に然う云つて勵ますのだが、西山は、たゞ「書きます〳〵。」と云ふばかりて、別に氣を引立てると云ふ事も無く、ボンヤリ寢て居る。熱の無い氣分の好い日ても、仕事の筆を取らうとはせず、怠けた沈思に耽つて居る。たま〳〵机へ向つても、二行三行で根が切れて直ぐ筆を投出して了ふ。その癖「最う止める氣てすか。」と問詰めれば然うぢやない〳〵と云つて居た。

「あゝ惜しいものだ、岡倉さんは死んだし、今が先生の地盤を固めべき大事の場合なのに、あゝ怠けて何うする氣だらう。」と玄關の平井まて始終齒痒がつて居た。

新聞には毎日〳〵休載が續いた。

（完）

當世

國木田治子

（一）

『御免――。』と力んだ聲で案内を求めるのを聞きつけた此家の細君は。

「ハイ。」と返事をして小聲て。

『村上さんだよ。』と言ひながら玄關へ出て來て障子を開けた、客は格子の外に立つて居る。外は宵闇の明亮とは見えぬが容子で知れる主人とは學校時代からの友達の村上さんてあつた。此の人は晝はめつたに來た事がない。何時も夜分來る、然も何時も上機嫌の時ばかり來る。此夜も大分召上つたと見えて、片手は格子に握つて居る。』

『村上さん、お入り遊ばせな。』と細君は笑ひながら聲を掛けると、何時も此のお客樣は定つたやうに、

『大將は居ますかね。』と言ふのが此夜に限つて。

「有難う、正夫は歸りましたかね。』と言つた。

「否未だ歸りませんよ。』

正夫とは主人の弟て大阪の某銀行員である。此の頃社用て上京して居るので、これも村上とは大の仲よしてある、今日は目黑のビール會社から招待されたので、朝から家を出て行つて、日が暮れても歸つ

て來なかつたが、今方「用が有つたら湖月て飲むて居ますから、言つて遣してください」との電話が掛つて來て、未だ家へは歸つて來ないのである。

『正夫の奴實に怪しからん。』と村上は力んだ。

『正夫さんに御用がお有りになるなら、直き其處の湖月に居るさうですから、電話をお掛遊ばせな、そしてマアお入りなさいましよ。』

　と細君は土間へおりて格子を開けると。

『ヤ、失禮。』と村上は大股に歩いて入つて來た。脊は低いが丸々と肥滿た體をどさりと上り口に下した。

二階の客と主人との高笑が此處へ手に取るやうに聞えた。

『宅のも今日は居りますから、お上り遊ばせな。』

『否々。』と村上は頭を左右に振つて、

『今後決して此處の家へは上らぬと決心したんだから、決して上りませんね。』

『アラ、何故てす。』と細君は不審顏をする。

『貴君の處ては僕を敬して遠ざけて居ます、僕はちやんと知つてる。』

『アラ、マアおほ…………。』と細君は笑ひ出して、

『村上さん、憚りながら私の家にはそんな薄情な者は一人も居りませんよ。』

『じや何故、何時僕が來ても大將に逢せません。』と村上は顏を突きだして、疊をとんと叩いて、ぐッと

反身になる。其の容子のおかしいのをやつと堪えて、

「でも生憎と何時も宅のが留守の時ばかり、貴方が來つしやるのですもの、宅じやお客様に居留守などをつかつた事は御座いませんわ。」

「奥さん、そう眞面目に成つては困る、今僕の言つた事は皆んな虚言、座興々々。」

「そんな座興は質が惡う御座いますわ、人聞きが惡いじやアありませんか。」

「恐縮々々」と村上は兩手で顔をなでたり頭を叩いたりして居たが、やがて眞面目に成つて、

「時に奥さん、正夫は湖月てすッて?。實は今日の招待に一處になつてね、盛にやつたのてす。處が正夫の奴、伊達の薄着かなんぞして來たので、寒い〳〵と言つて震へて居るので、僕の仕立おろしの外套を貸したのてす。其處で歸りは此處へ寄つて三人て久しぶりで、何處かへ押し出そうと約束を仕たのてす、實は。然るに正夫の奴僕を出しぬいて、二次會をやるなんて弟甲斐の無い奴てすなア。」と大層らしく腕を組むで考へ込んで居た。

「それは濟みませんでしたね、正夫さんはお陰樣て温かい思ひを仕たでしやうが、貴方は嘸お寒う御座いましたろう、今直ぐ取りに遣りますから。――房やお前湖月へ行つてね。」と女中に外套を取りに遣る。

「直き取つて來りますから、其れまでもあがつてお待遊ばせよ。」

「ヤア、今夜はそうしては居られないのてす、未だ此れから二三軒寄り道が有るので。」

「マア、好い加減な虚言ばかり。第一其の御容子ては一軒も難かしう御座いますわ。」

「此樣見えても未だ此夜はそう醉つては居ないのですぜ、矢でも鐵砲でも持つてお出なさいだ、憚りながらこれんばかりの酒に敗る村上さんじやアないんです。」と大力味に力むて置いて、

「貴婦人に向ッて、此んな失禮な事を言ふのじやなかつた、平に御用捨。」と村上は相變らずの上機嫌、

細君は何時の事とて笑ひながら村上の相手に成つて居る。

村上は始のやうに腰を掛たなり障子に寄りかゝつて、小聲で歌を唄ひだした。そして方々のポケットへ手を突つ込んで何にか探して居るやうであつたが、やがてズボンの隱袋から蜜柑を二ッ取りだして細君の前に並べて。

「此れを我が愛する花子孃と魯知坊に献上じます。」と言つて叮嚀に頭を下る。

「マア、此れは有難とう御座います。」

「時に二人とも今夜は居ませんね。」

「ハイ、最早寢ましたの。」

「二人とも嘸大きくなつたでしやうね。」

「アラ、此の間お入來になつた時に御覽になつたじや御座いませんか。」と細君は笑ひながら言ふ。

「そうく時に花ちやんは何歲になつたでしやう。」

「九歲になりました。」

「魯知坊が早く大きくなると可いな、七ッてすッて。」

魯知坊と言ふのは此家の長男で名は靜雄と言ふのを、或時村上が來て、其時丁度靜雄が頭の刈りたてて可愛らしい坊さんのやうであつたので、

『靜坊は畫に書いた魯知深に似て居るから、以來魯知坊と僕は呼ぶよ。』と其れから靜雄又の名を魯知坊と言ふ事に成つたのである。

『魯知坊は實に可愛い、早く大きくならないかな、彼奴は僕が立派な道樂者に仕込む積りで居るんだから。』

『マア、酷い事を仰しやる御親切は有難とう御座いますが、其には及びませんですよ。』

『否、是非僕に仕込せて下さいよ。』

『其時はまた其の時のやうに御相談いたしますわ、今からお約束して置きませんでも宜しう御座いましやう。』

『御尤々々、然し親父に似ても伯父さんに似ても、相應な道樂者に成りますよ、御心配は入りません。』

と村上は濟した顏をして居る。

『宅や、大阪のも貴方の御仕込みですからねえ。』と細君も皮肉を言ふ。

『オヤ、奥さんは怪しからん事を仰しやるね、聞き捨に成りませんぞ、サア、何時僕が。』

と村上は笑ひながら、肩を怒らしてしやにかまへた、處へ主人が客を送つて玄關へ出て來た。

（二）

『村上君、上り玉へな久しぶりだ「ホール」の酒も有るぞ、お松、何故村上君をお上もうさないのだ。』と主人は細君を叱ると、村上は慌てゝ兩手をあげて、

『君、細君を叱り玉ふな僕が惡いのだよ、先程から上れ〳〵と言はれて居るんだけれど、此夜は少し急ぐんでね。』

『嘘を言ひ玉ふな、君の聲は大きいから此處で言つて居る事は二階へ皆んな聞えたよ、此夜は三人で緩り飲む積りじやないか、其内正夫も歸るだらう、上り玉へよ、ね、村上君。』

『有難う、僕も實は先程から上り度くッて堪らないんだがね、少し御邪魔を爲る積りが何時も遂々永くなッてね、御婦人方が御迷惑なさる、すると從がつて婦人がたに嫌はれる、自然留主もつかはれる。』

『マア、村上さん澤山私をおいぢめ遊ばせ、其内お宅へ上ッて何にも彼も奥樣に申上ますから。』

『アハヽ、戯談々々、醉漢ひの言ふ事を一々取り上るのは罪ですよ、家には何事も内聞、では上つてまた御馳走にならうかな。どつこいしよ、正夫の奴實に怪からん、遂々外套の持逃をしやアがつた。』と村上は立ちながら惡まれ口をきく。

其のくせ饒舌つて居るうちに、とうに外套は女中が取つて來て、それを細君が持て居たのである。

（三）

『今夜は直ぐ歸るよ、君。』と村上は折々斷わりながら、最早二時間もちびり〳〵と飲みながら面白相に話し込て居る。

銚子の變り目を持つて來た女中が下へおりやうとしたのを、主人は呼び止めて。
『奥さんにお相手に來いと言へ。』と言ひ付ける。
暫くすると、細君は今貰つたばかりだと言つて香の可い海丹を持ッて來た。
『此れは結構。』と村上は早速箸を付ける。
『此夜は何にも御馳走が有りませんて。』と細君が言ふと。
『如何して〳〵來る度に御馳走を出されると、氣の毒て遂々足が遠くなるよ、ねえ君。』と村上は主人と細君の顏を等分に見て、
『と、遠慮をする柄てもねえがね、アハヽヽヽ。』と元氣よく笑つて、
『奥さん一ッ如何てす。』と細君に盃を差す。
『有難とう御座いますが、御存の通りの不調方て、マアお重ね遊ばせ。』
『恐れ入ますなア。』と村上は細君に酌をして貰ひながら。
『大將は相變ず遊びますかね。』と言ふ。
細君は主人の顏を一寸見て笑つて居る。
『遊びますかねは酷いな、僕は品行方正だよ。』
『品行方正、學術優等か、細君の前だと思つて口幅ッたい事を言ひッこなしに仕様よ、ちやんと種が上ッて居るよ然も最近に。奥さん油斷大敵と言ふ事が有りますよ、確りしないと馬鹿を見ます。大將には

氣の毒だが奥さんの爲にすッぱぬこうかな、如何だい大將。」

と村上はにやりと笑つて主人の顔をのぞき込む。

「何んでもすッぱぬき玉へ、僕には君に尾をつかまへられる覺はないから平氣なもんさ。」

と主人は笑ふ。

「よしきた、其う强い事を言ふならへこまさずには居られない、奥さん此の間の土曜日は大將は絶世の美人と銀坐をさも〳〵むつまじい樣子をして散歩して居ましたぜ、僕の此の目でにらんで置いたのだから、間違いッこありません、如何だ大將ぎやふんだらう、正夫と僕に一晩何處かお奢ッても可いぞ。」と村上は手柄顔をする。

「羨やましかッたろう、指をくわへながら後からついて歩いた譯だね、御苦勞樣な事だ、しかし僕は美人と銀座を散歩した事などはないよ、それは人ちがいだ。」と主人は言ふ。

「などゝごまかしても駄目だよ、たしかに君だ。」と村上は斷言する。細君は始は村上の話を笑つて聞いて居たが、やがて、

「土曜日の晩ですッて。」と言つて眉を蹙めながら主人の顔をじつと見たが、何か思ひ出した樣子で、

『村上さん、貴方の仰しやる絶世の美人と言ふのは、島田に結つて居ませんだつたか。」

と細君は言ふ。

「待つて下さいよ。」と村上は言つて大袈裟に腕組みをして、うんと首をさげたが又た直ぐ顔をあげて。

『島田でしたよ、そうだッた。』と村上は言ふ。

『絶世の美人だなんぞと仰しやるもんだからわからないのですわ、彼れは私の妹です。』

と細君は晴やかに笑つた。

『エ、奥さん彼の婦人は貴方の妹さんですッて、此れは怪しからん、實に怪しからん。』

と村上は怪しからんを繰り返へして居る。

『彼の晩の事なのか。』と主人は笑つた。

やがて、

『奥さん、妹さんを私にくれませんか。』と村上は言ふ。

『如何遊ばすのです。』

『僕の細君にします。』

『マア、貴方には立派な奥様がお有りなさるじやありませんか。』

『彼んな奴、叩き出して仕舞ひます。』

『まア、ひどい。貴方は薄情ですね。』と細君は呆れて村上の顔を見る。

『如何して〳〵、僕は非常な細君孝行ですぜ、貴方に彼んな妹さんが有ると知つたら、今の家内を貰ふのじやなかつた、實に失敗つた。』と村上は大眞面目で言ふ、細君は笑ひながら、

『お生憎様ですが、妹はお酒を召上がる方は大嫌ひなのですよ。』

「酒飲みは嫌ひだッて、話せないなア、今時酒を飲まぬ奴はろくな者じやありませんぜ。」
「アラ、お酒を召上らない豪い方だッて澤山ありますわ、私だッて、貴方の處の奥さんだつてお酒飲みは實に嫌だと仰しやつて居らつしやいましたよ。」
「此れは御挨拶だ、アハヽヽヽ、然し大將は酒を飲まなかつたかしら。」と殊更に考へる眞似をする。
「宅のだッて元は少しも飲まなかつたのですよ。」
「赤兒の時ですか。」と村上はまぜッかへす。
「マア、隨分ですねえ」と細君は言つて後の言葉を出さすだまッて仕舞ふ。
「奥さん、僕が飲んだくれるッて、愛憎を盡しちや困りますよ。あゝ君の處で飲むのが一番美味い。宅の奴なんぞ溝へ捨る金は有つても、僕に機嫌よく酒を飲まそうとはしないのです。實に怪しからん奴では有りませんか。君の處ろの奥さんは實に可いよ。」
「村上さん嫌に油をお掛なさるのね、奢りませんよ。」と細君は言ふ。
「いや、眞實の處を言ふのてす、日常家の奴に此處の奥さんを見習〳〵と言ふんてす、あゝ可い酒だ。」
となみ〳〵注いて有つた酒を一息に飲みほして、
「大將、如何した此夜は嫌に元氣がないじやないか、僕が一ッお酌をしやう。」と村上は主人に盃を差し付ける、寢ころんで居た主人は起きあがつて、
「今日は朝から客が有つて饒舌りづめだつたので、流石の僕も少々閉口の體なのだ、外の人なら無理に

も御勤をするのだが、君だから失禮して僕の勝手にして居るのだ、マア今夜はゆるしてくれ玉へ、其かわり君はゆつくりして例の通り君の持つて來たゞけの、珍談奇話をきかせ玉へ。」

『そう〳〵、此夜はまだ村上さんの珍談が出ないやうですね。』と細君も側から口を副へると、村上は、

『大有り〳〵、御婦人の前てはちッと申上にくいがね、實はまた一人出來たのさ、村上さんてなくッては、ならないと言ふのがさ。』

『又てすか、來らつしやる度に新しいのが出來た〳〵、と仰しやりますが、私が伺がつたばかりも、幾人だか知れませんわ、それにしても可く奥さんが何んともおつしやいませんね。』

『處が喧ましくッて大變なんてす、夕方宅へ歸りますね、一盃やつて『僕は一寸散歩に行くから。』と言ひましやう、僕の處の奴は中々利口てすからね、此奴怪しいなと睨んだら、ハイカラを通り越して蛛の巣のやうな頭て、きたねえ衣服を着て、帶は猫じやらしに結んだのが、今にも泣き出し相な顔をして、『私も御一處に參りましやう。』と僕の袂をしつかりつかむて、のこ〳〵從いて來るんてしやう、此れには流石の僕も閉口して仕舞ひまさア、『何處へ行こうと俺の勝手だ。』と始は男の意地て力むても見ますが、此の樣を人に見られると、餘り見つとも可い圖じアありませんからね、家の廻りの暗い處を二三遍、ぐる〳〵廻つて散歩はお流れさ、實は只の散歩を怪やしいと思はれて、此んなさわぎを遣らかされる時は、腹の內ては可笑しくッて堪らないけれど、笑つて仕舞つては此方が細君に降參したやうに當るから、宅へ歸つても立腹たやうな顔をして、我儘を言つて困らせて遣るんだ、其ういふ時には細君はちり〳〵して

一生懸命に御機嫌を取るんだよ、僕は面白くもあるし氣の毒でもあるが、何となく愉快だよアハヽヽ、

『マア、人が悪いんですねえ。』と細君は言ふ。

『けれども女は實に恐ろしいもんだね君、此處の奥さんは如何だね、餘り嫉妬いと言ふじアないか。』

『如何だかなア。』と主人は笑つて居る。

『すると、何處くも同じ秋の夕暮かね、如何です奥さん、貴方も胸ぐらを取る方だと見えますね。』

『存ませんよ、けれど村上さん嫉妬はうが無理てしやうか、やかせる方が悪いてしやうか。』

『是れは大變な難問題だ、御即答は致し兼ます、何れ其内申上る事にしましやう。』と村上は甘く逃て、扨てまた改たまッた様子をして。

『時に奥さん、折り入つてお願ひが有るんですが、御承知願はれましやうか。』と言ふ。

『何んな事て御座いますか、私てお役に立ちます事ならねえ貴方。』と細君は主人の方を見る。

『如何せ碌な事じやアないよ、マア願ひさげにした方が可さ相だ。』と主人は言ふ。

『君は實に友達甲斐のない人だな、可ろしい僕の相手は奥さんだ、何別段難かしい事てはないのですよ。其の内てすね、家の家内にお逢ひになる事がありましやう、すると家内は貴方に此様言ひます、『毎度村上が御厄介に成ります。』其時、貴方は、『如何いたしまして。』位の返事をして置いて下さい、先程も一寸申上たやうに、是非折々は顔を見せて遣らないと、義理のすまない處が有るんでね、ちよい〳〵家をあけるんてサア、そう言ふ時は、何時も此方の家て飲み過ごして、寝てしまつたと言ふのてす、僕は何時

も大將を引張り出すので、貴方には僕は少しも信用がないけれど、家内には貴方が「宅のはお相伴て遊ぶ事も有りますが、決して外へ宿つた事は有りません。」と仰しやつた相なので、此處へ宿つたと言ふと具合が可いのでサア、處へ、『家へなどお宿りに成つた事は有りません。』などゝ貴方にやられた日には、大事に成るんですからね、其處の處を何分よろしく願ひますよ。」

「此れは大役ですわね、けれど實に男は罪造りですわね。」

「おつと奥さん攻撃は恐れいりますよ、だが念の爲にお斷りして置きますがね、男には言ふに言われぬ心配や、苦勞があつて時には實にくさ〳〵します、そう言ふ時に一時馬鹿をやるのです、心機一轉法なんてす、其れを細君が其の度に角を出して荒れまわられた日には、男だつて立つ瀬が有りませんや、外て遊ぶからつて、決して細君に對する愛情が少なくなると言ふわけては無いのだから、御心配御無用、ねえ、大將そうじやアないか。」

と村上は乘氣に成つてしやべり立てる。主人は只笑ひながら村上の話を聞いて居た。細君も相變ず村上の元氣の好いのに感心して居る。村上はしやべり草臥ると、甘そうに肴を喰べては、ちびり〳〵と飲むで居たが、やがて、

「正夫の奴嫌に遲いな、何時かしらん。」と金時計を出して見て、

『こりや驚いた最早十一時だ。』と驚いて、パチン、と時計の蓋をする。

『村上さん、可い時計が出來ましたね。』と細君が言ふと。

『ヤア、可くもないのですが、家内は元から金時計のを持つて居るので、一處に出て亭主が銀時計て、女房が金時計てはおかしいと、酷く家内が氣にしましてね、此度いよく〳〵買つた譯なんです、ヤ、大きにお邪魔をした御馳走さまだつた。』と村上は歸り仕度をする。

『マア、可いじやアないか、此夜は眞實に家へ宿りたまへ、最早正夫も歸るだろうよ、久しぶりて三人て飲み明そうよ。』

『眞實にそうなさいましよ。』と夫婦は村上を止る。

『有難とう、處が是非此夜家内に逢わなければならぬ用が有るんだよ。』

『奥さんになら、此夜にも限るまい、明日朝早く歸れば可いじやアないか。』

『明日また逢れるか如何か知れぬもの。』

『マア、おかしな事を仰しやるては有りませんか、奥さんは始終お宅に居らしやるてはありませんか。』

『處が、此の頃は二日も三日も逢ぬ事が有るのです。』

『僞ばッかり。』と細君は笑ふ。

『僞てすッて、眞實てすよ貴方も御存知てしやう、僕の家内は學校の先生てすからね、朝は七時まへは電車が割引きだからと言つて、僕が寢て居るうちに出て行つてしまうのです、四錢や五錢如何ても可いのに、年に積ると大金だと言ふのです、君、女は實に細かいね僕は驚いて仕舞つた。何處何處に安くて可い洗濯石鹸か有ると聞くと、如何な遠い處ても時間をつぶし、電車賃をつかつてまても、サッサと買

いに行くのだよ、一事が萬事そう言ふ風て、可い事もあるがまた實にやり切れない事が有るんだ。』
『君の處のはやかまし相だね。』と主人が言ふと。
『萬事理屈づめなんだ一々取り合つて居ては大變だからね、可い加減にうん可しく〳〵と僕が家内の言ひなり次第に成つて居るもんだから、村上も遂々家内の座蒲團に成つたと蔭て笑つて居る友達もあるし、また村上の細君は村上より豪い、村上には過て居るなんて言ふ奴も有るんだとさ、怪しからん事を言ふと思つてね、座蒲團に成ッて居ると見せかけて實はそうでないのだからな、アハ……。』と村上は大口あいて笑つた。
『君の處の細君と僕の處のとを突つきまぜると、調度可い細君が出來るんだがナア。』
と主人は言ふ。
『眞實だよ、朝はそう言ふ風て寢てかしを喰わされる、夜は大體僕が醉放つて遲く歸つて來て、洋服のまゝてぐう〳〵寢てしまふので、實際そういふ事がつゞくと二日も三日も家内と眞面目て話しをする事がないのだよ。』
『奥樣が毎日お出掛なら嘸御不自由て御座いましやうね。』
『そりやア、困る時が有りますよ、客の來た時などその内でも困りますよ、氣のきかない旦那にとんまな女中ときちやァ方なしだ。』
『そのかはり、大分溜つたらう。』と主人が笑ひながら言ふと。

『僕は可くは知らんが、せつせと溜て居るやうだよ。』

(四)

村上は止められてまたどッかとばかり、お輿をすへて飲むで居た。其の内正夫も歸つて來た。

『三歳違ひの兄さんと、言ふて暮して居るうちに、情なや此方さんは。』と村上の御得意の壺坂が始まつた。銚子を持つて行つた女中がお客様の歌をお唄ひなさる様子がおかしかつたと言ふて轉げて笑つて居た。

やがて、

『奥さん、大きにお邪魔をしました。』と村上は破れかへる様な聲で怒鳴りながら、どたり〳〵と二階から下て來た。

『マア、おかまい申しも致しませんで、如何ぞまた入しつて下さい、奥様に宜しく。』と細君は玄關に送つて出ると、村上は、

『貴方の大切な旦那様は確に此處に。』と村上は主人を指差して惡い口を聞いて居いて、

『一寸此れから新橋の角まで正夫とビールを飲みに行きます。』と濟ます。

『最早角はとうに寝ましたよ。』と細君はすッぱぬく。

『何事も言はぬが花、お手柔かに願ひます。』

と面白い様子をして、片ちんばに靴をはかうと骨を折るので、細君が手傳つてやッとはかせる。

『サンキウ』と言つてヒヨロ〳〵どたん、と格子にぶつかる。

『村上君、歩けるかね、また何時かのやうに往來へ座はり込んで仕舞つては困るぜ。』と正夫が言ふと、

『大丈夫〳〵』と相變ず力んで居る。

『兄さん、直ぐ歸つて來ます、サア村上君行こう。』と正夫は村上を助けて外へ出た。

『如何だい、可い月ぢやアないか。』と家の前の電信柱に村上は寄りかゝつて大空を仰いだ。そしてホッと吐いた呼吸は霧のやのやうてあつた。主人も細君も皆な外に出る。

村上は捨臺詞を言ひ〳〵正夫と共に直ぐ其處の横町を曲がつて了つた、と思ふと間もなく大聲で笑ふ聲が響き渡つた。天心の月は冴えて更けゆく夜の街は晝間のやうてある。

主人も細君も默つて立つて居たが、細君はふと主人の歸宅の遲き夜を、門て待つともなしに待ちながら、月を眺めたことを思ひ出した。

『村上の奥様はさぞ待つて居らつしやるてしやうねえ。』

『どうだか。』と主人は欠伸を仕ながら答へた。

『そんなら何をして居らつしやるてしやう。』

『組合の帳面ても調べてるだらう。』

『組合ッて？』

『組合夫婦の帳面をサ。』

『マア、彼んな酷いことを。』

『何が酷ひことが有るものか、結句相方の幸福サ。』

『そうねえ、それが當世でしやうねえ。』と細君は嘆息雜りに言つた。

『そうさ、當世サ。』

『嫉妬ないと猶ほ當世ですわね。』

『ハッハ……可かつた。』と主人は又もや大欠伸をして内へ入らうとすると、細君、

『貴方。』

『何だい。』

『そうすると生れた子供は積立金のやうなものですわね。』

『ハッハ……可かつた。』と主人は又も言つて少しも氣に留ぬらしい。屋内に入りながら、

『積立金じやァない税金だろう。』と言つた調子は少し眞面目であつた。

(完)

古猫

（鐵幹の「鼻」に答ふ）

岩野泡鳴

千駄ヶ谷の古猫、
後家の家にすくまひて、
おのが傳へられたる
やまと言葉もて遊ぶ。

星にすみれ、紫、
二十歳妻に樺の木も、
すべて人のかす味噌
汁になれば技巧とや。

すすれ、すすれ、味噌汁、
自家の味はそればかり。
ほうき星て座敷を
如何に掃くもから光。

朽ちた網をふんどし、
細い薄頼むとも、
あはれ、古典ふる猫、
ニャアと云へばニャアの聲。

あはれ、意味も力も
失せてこそは叫ぶなれ。
見よや、半紙半帳
虚偽の解脱書くによし。

半獸、表象のいのちを
いだく資格なきままに、
猫に小判、詩はこれ
渠の解せぬ黄がねなり。

而も、澄まし返りて、
筆記に富む若學士、
審美學者招くと、

鼻も垂れず、屁もひらず。
猫なで聲放ちて、
おのが愚をば知らず顔、
美の分類の講釋
威猛高にうなづくよ。
人の鼻を高しと
見るは、おのが低きなり。
表象の意を『しるし』と
讀むが如き古びさよ。
千駄ヶ谷の古猫、
後家の家にすくまひて、
おのが傳へられたる
やまと言葉もて遊ぶ。

晩鐘

太田正雄

顧望

追憶の方はいま日ぞ沈むらし、
灰紅の暮雲黄みて山の背の緑もくろみ、
海もあゝ眠に入るか、無人島ほのかに
青む。
さば若き漂浪の夢もよ沈め。
あてもなく憧れて前世の魂を追ひ。
想像よ、汝にこそこの胸を開きしか。
世に得しは垂乳根の廢たる翅、やがて
厭き、
執の華、そが中の君を慕ひき。
何故に、何故に秘めかぬる心の涙——
み龕にも、金十字にも、懺悔の師にも

秘めけるを、秘めけるを君に許しき。
それもまた幻影の楯——萬有のここに
隠れて、
外に觀る我に足らへる——今あはれ楯
さへ失せぬ。
あな寒し氷の如き虚無の前、わが目く
るめく。

月夜

おぼろに圓く、ほの黄なる無言のかげを
岸にそひ、舟人ひとり、はた一人、
朗に歌ふ、はた歌ふ。櫓は輝きぬ。
黒き紗に、衣ずれの音に、水のしぶきに、
曲節のゆるき流に、時の愁に、
月影は淡くも映れ鍍工の壁の下には
蠟の火ぞしじに瞬く。老ひし樂師は
信樂の譜をくりかへし、譜をくりかへし、

稚兒の眼ひたすらに窓にそゝげる。
窓につと、窓につと、窓につと、窓につと
音すれど、音すれど、物分かず、歴す音す、
その刹那内の世は大理石と化り、
とのもには燈きえて笛の音うかぶ。
岸の草、岸の青草顫ふ。

夕

夕やけ雲のとどろきは
殷々として遠ざかる、
執の震慄の赤き笑、
追憶色に、樺に、黄に、
翡翠の眼、螢石の
ほがらに青き悲に。
さこそは海も、あえかなる

日刺のゑみの閃きも、
沃土と藍の玉蟲織も
紺瑠璃板と冷めはつれ、
似たりや、春を離りこし
一羽の鳥よ、わが思。

灰紅色の壁にきく、あはれそぷらの、
遠方の入江の青き帆は風にゆらるゝ。

つと立ちて渚の小石
眼をつぶり高空に投ぐ……
やゝしばしゝてさと音す。

はや薄暮なりき、そことなく
晩鐘の音ぞ鳴りわたる。

惱の龕

北原白秋

夜は石女の胎の色、
青きいんくの打敷に
惱の龕のおぼつかな、
饐びて滴る火のにほひ。

たま〱薫る香の爐の
一炷の淸きよみがへり
響けど、苦き臘涙の
しとどの悔打敷に。

さて聽け、絕えずひそやかに
黑き手に彈く死のびやの。……
聖體盒の血の光。

惱の龕よ、かくてなほ

火こそくるめけ、そがなかに
愛の髑髏は默みたる。

黑燈集

長田秀雄

抱擁

相抱く、物狂ほしき愛慾の
夜の歡樂、肉爛れ心もくらむ
死に似たる思の刹那。われは見る、
君が瞳に、——我魂の苦惱の相。

暗き館

君をし思ふ、——さわがしき
人々の聲、走せちがふ
足音、さては鐵をうち
木をきる響、——わが胸に
暗き館はつくられぬ。

かめれを

物思ふ若人たちよ、
かの蒼の白鳥星座、
紫の光を放つ
世となるも、な見そ、かならず、
うら若き女の胸に
隱れ住む心をな見そ、
彼こそはかめれをのごと
日に刻に色かゆ、故に
ただ紅き乳房をめでよ。

不安

あな褐色の媼の顔
あまた、空虚の眼をむけて、
女を抱く歡びに
若き心の輝くを
うち見て、さても恐ろしき
僞かなとあざ笑ふ。

和歌　樂舞遊

○　西井金羽

億劫に逢はん期のなき二筋の道ふみさぐみ君とわれゆく

悲しみの梭とりかはし胸の機素黑の衣を億劫に織る

われは今命の琴の絲はりて切れむ期迄も君にかなでむ

こは夢か刹那かつきぬ幻かしろき領巾振る子は天ゆ來ぬ

わが心雄叫びすなり人の世のたたかひの野に敵をもとむと

君を待つ思ひの絲の一筋は胸にからみぬほぐすすべなき

○　佐藤茂

あゝ神よ清むるものゝ一として白雪たまへ吾心にも

夢ごゝちかたみの魂のめぐりあひさゝめく聲と雪ちるを聞く

「法悦」の人ほゝゑめるまなざしに似たる星見ぬ神思ふ夜に

小さけれど神みる心われに住む日を見る瞳あるが如くに

あゝ渇くこよなう清き胸に涌く清き泉を我に饗せよ

花二つともにひらきて香に匂ふ二人の胸に相生ひし草

君ませやかたくとざしし夢をばひらく力を花はもちけり

○ 梶原白花

眼に殘るかげいたましや昨日かも花うつ袖のながかりし人

朝明けの七彩雲を泣き寢して世をうしと云ふ人にみせぬる

しろがねのわが世ぞ來ぬる雪の朝生れしがまゝの日をあふぎみよ

君が家の灯かげぞ見ゆる我家より水をかぎりて野は落葉しぬ

世にたゝん其日は遠し陽はつよししらけし草に額やふすべき

木枯の小野の夕山涙して立つ子となりぬ黄なる日の前

永久のわかれとあらば死なんもの又と云ふ日のあればこそなけ

年立つや皆あたらしき眼光にわれをしむかふはずかしきかな(年の始に)

○ 佐藤琢琅

愛らしの耳あまたみゆ小兎のならびてや立つ月のまろ山

冬の日は寢ねしさまなる末枯のまばら林にうす光しぬ、

風きけば空に接する野のほとり馬あまた居て嘶くらしも

○ 小木鳥城

秋ゆくや少女死にたる家に居て經きくごときこゝちとなりぬ

君おもふ胸のおほ海おもひ出のあらしとなりてたちさわぐかな

わか小さき胸の鏡は夜も晝も君をうつしぬなつかしきかな

○ 廣瀨水琴

神無月秋を葬る大棺に釘する音し夜の雨ふる

紅の小さき秋花ぬか雨に濡れて朝咲く妹が奥都城

○ 大津照水

ひやゝかう夜の氣みちみつ天地に星と露とはかゞやきあひぬ

銀の小魚さばしり靑き藻にかくるとやうに星は流るゝ

○ 村田愛美

なにならぬ思出ながら夢ながら摘めば小草にた

ゞ泣かるゝよ
こざかしう道說く子等と行くに堪へてひとり罪
えしわれはうたの子

○　　　加藤忠治

古寺や黃昏ごろを雛僧の月見て立てり白梅の花
花肩に小さき足跡(あと)して童男(をぐな)行く五月雨ごろの森
蔭の路
灯ともして草叢かげの蟲の音を姉と聞く夜の秋
の雨かな

○　　　金城順起

青々と豐(ゆた)にしげりし心の木落葉しにけり愁はし
きかな
疑と云ふ禍鳥は君思ふ心の奧にまたも巢くひぬ
雪しろき外國ぶりの家並の上に一輪冬の月てる
うす日てる森の中道から風に蹌踉として落葉さ
をどる

○　　　佐野翠坡

老女ども木立のなかにから〳〵と笑ふ聲する冬
の日の風
かなしみのうしほたかまる胸の海君が救ひの聲
たえずする

死の香爐とる神ありと深林はうす霧こめて枯れ
葉くゆるも
わが胸の緒琴にひゞき少女子の息にも似たるそ
よかぜぞふく
からころと石をならして月の夜の川原音ふく山
のかぜかな
霧に日のしづかにあくる山の秋木かげゆく子の
神々しさよ
一言を春かぜとしもわが胸のなえたる草は芽を
ふきてけり
遠う千鳥なきがらよせし荒磯(ありそ)べに流れ木たきて
ありし夜おもふ
高丘や波のさませる街の家眼下に見えて月夜と
なりぬ
星ひとつ物言ふけはひかなしみにやせて夕べの
門にゐよれば
立ち枯れの高黍ならし風わたる四五畝の畑の月
あかりかな

應募和歌は東京市小石川區原町百卅三、尾上柴舟宛の事



蜆

詩の如き湖上の春や蜆舟　へき生
徂く春の堅田泊りや蜆汁　同
春の家門川蜆拾ひけり　同
砂吐かす桶の蜆を釣る子哉　同
蜆賣柳の家に呼ばれけり　同
山吹の雨の庵や蜆汁　同
蜆汁殘る自炊の小鍋かな　同
蜆籠梅折り添へて提げにけり　同
梅の春柳の春や蜆賣　同
蜆とる漁家の女を我が詩哉　同
蜆汁梅に詩人を泊めにけり　同
蜆とり矢橋の白帆眺めつゝ　同
蛤もいさゝか買ひし蜆かな　同
雨淋し梅散る宿の蜆汁　同

雨の日や朝寝の家に蜆賣　紫咲
江の宿や三日ながらの蜆汁　我聞
子蜆の籠の目粗く洩れにけり　翠史
蜆賣旅の小錢のまだ乏し　松灣
とりためし蜆選ぶや橋の上　小蔭
蜆賣空脛寒く歩みけり　冬畝
蜆賣るつんぼおやぢの頑愚なる　綠水
畑隅の梅の根本や蜆殼　絹村
すてゝある塚の蜆や蝶來る　華水
梅に名の蒲田の蜆賣り來る　秋水
擂鉢の蜆に春の日影かな　縱横
川添の腰掛茶屋や蜆汁　尺水
芹籠に蜆もとつて戻りけり　春洋
蜆汁五椀は物の數ならず　三〃
汁かへて蜆すくなくなりにけり　夜〃
橋賃の文久錢や蜆賣　長〃
慈悲心門川に蜆放ちけり　木瓜
頑として口開かざる蜆かな　蠶石
此の海に蛤とれず蜆汁　白藤
草の戸に朝の雨や蜆賣　木人
蜆汁歸省の朝な〳〵かな　拾小舟

種俵ひだす小川の蜆かな　羽川
まゝごとの鍋に親子の蜆かな　南若
蜆嬉し幾つ數ふる小前垂　魯斧
塗はげし椀佗しけれ蜆汁　刀川
句を乞ふて五升の蜆送りけり　天香
東山道第一宿の蜆かな　方外
蜆殼鳥居に乘れと投げて見る　濛雨
鶯の宿あたゝかし汁蜆　四綠
蜆賣橋長々と歸りけり　沐雨
吟行の上總路に入る蜆の句　鬼洗
まゝごとの蜆の殼を小錢かな　牛村
値は麥と量り換へなる蜆かな　同
近江人の河豚は得食はず蜆汁　百句拙
蜆汁瀨田にホク詠みなかりけり　同
蜆汁兒の箸癖を直ほしけり　十湖
句行脚の島の宿りや蜆汁　同
泥舟の泥にまじりし蜆かな　鹿の子
京はもののそゞろなつかし蜆賣　同
蜆賣遊女の姉を持ちにけり　華星
蜆賣十三にして口上手　同
大寺の裏の流れや蜆とり　董哉

蜆とる天窓の上や凧呻る　同
笹鳴きや籔の中ゆく蜆川　釜村
蜆とる人の後や膳所の城　同
春寒き石部の宿や蜆汁　骨童
古沼の泥ともならで蜆かな　同
蜀山人の句の無くてやは蜆汁　小魚
春淺き銀山町や蜆賣　同
機下りて蜆呼ぶなり宿の妻　渭南
蜆汁句を知る僧と語りけり　同
蜆賣り村の巡査と語り行く　同
蜆取つて死燒く火にあたりけり　京杜
歯を染めし若き女や蜆賣る　同
草摘む子蜆堀る子や堤の梅　同
蜆殼捨つる柳の小川かな　夜光
俗僧の舌打にくし蜆汁　同
蜆汁灯して雨となりにけり　同
蓄ふる髯なほ薄し蜆汁　星象
賣り盡くす蜆一荷や雨寒し　同
俳諧の腹あたゝかや蜆汁　同
二旅に天秤細し蜆賣　同
蜆汁淡然として村夫子　柳南

蜆とり梅假寢のさゝら川　同
梅の宿に運坐開くや蜆汁　同
蜆汁河東の民の古き膳　同
筆耕に手のたゆたしや蜆汁　李玉
自炊子の日記に洩れず蜆汁　同
梅の宿の飯の白さや蜆汁　同
蜆賣る顔の小さき男かな　同
門川に漂母の鍋や蜆掻　青城
蜆汁玉川見ゆる宿りかな　同
法螺の大蜆の小や貝百種　同
雨だれや野鍛治が背戸の蜆殻　同
捨て花も蜆の殻も庭の隅　散木庵
村一の孝子もてくる蜆かな　同
雑炊に交じる蜆の殻わびし　同
蜆殻田螺の殻や藪の凹　同
蜆殻捨つる野風呂の焚場哉　同
紅氣無きてゝら哀れや蜆賣　總子
食ふとしも無く採りためて蜆汁　同
佗び住むも嬉しかりけり蜆汁　同
蜆賣呼べば花賣ふりかへる　同
蜆賣神樂にも出る男かな　同

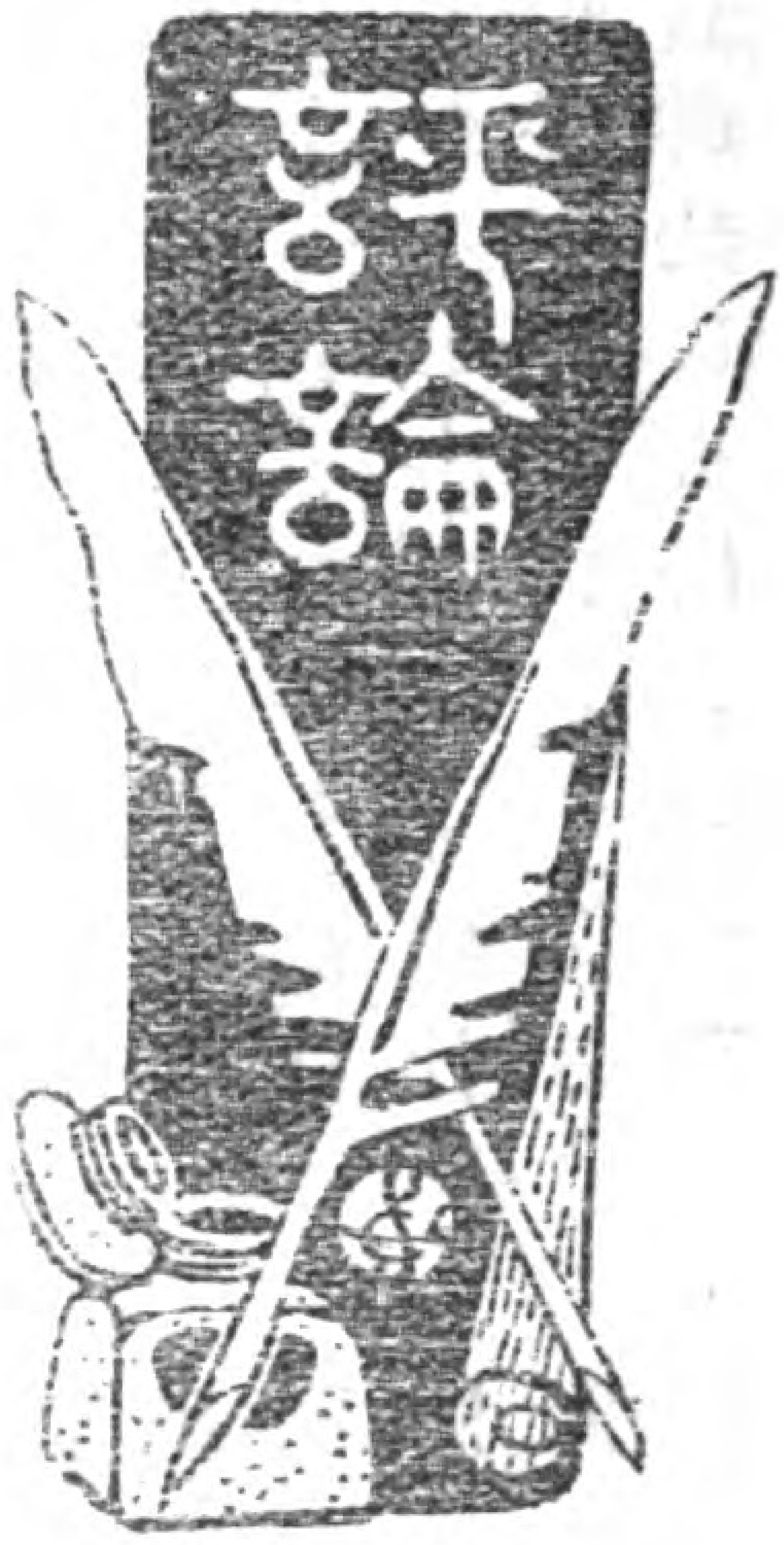
募集課題

蜂巣　二月十五日締切
接木　三月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

本號の應募者七十六名、句數は總子、霽雨、小魚三氏の五十句づゝ、夜光氏の四十九句、へき氏の四十七、木瓜氏の四十五、十湖氏の四十三、李玉氏の四十四を始めとして仲々に多く、實に總計千二百五十三句の多きに達したり。就ては選句も少からざる時日を要するとて今後は締切期日を過ぎて到着したるものは遺憾ながら採錄せざることとすべし。此のこと豫め御承知置きを乞ふ。

夜色君に白す開き封の中へ通信文封入の儀は以後御免を蒙りたし。



パウルゼン教授と自然主義

片山孤村

昨年末の「讀賣新聞」日曜附錄に、ＡＢＣ生と云ふ人が昨年五月の「ドイッチエ・ルントシヤウ」（獨逸評論）誌上に載つて居たベルリン大學教授パウルゼン氏の「父子」と云ふ論文の一部を紹介した中に斯う云ふとが書いて有る。「沈着て流行を逐はない獨逸も、近來は餘程新思潮に傾いて居るらしい。文壇には數年前から（！）既に新思潮を代表した作者評家の現はれたとは誰も知つて居る事實だが、此頃は大學派の學者さへ此潮流に浴するやうになつた。……パウルゼン博士の如きは其好代表者である。……獨逸第一流の大學の教育學者が僕等の所謂自然派と同樣の傾向を代表するに至つたのは一寸面白い現象だ……」

自然主義が漸く數年前から獨逸文壇に入り初め獨逸文壇は「今さらの如く騷いて居る」と云ふ奇拔な觀察はさて措き、唯聞棄にならぬとは、近頃は亦文壇の自然主義の火の手が哲學界に燃え移つて、パウルゼン博士とも有る鴻儒碩學が白髮頭を振り立てゝ自然主義の提灯を持つて居ると云ふ一事で有る。若し之が事實なら非常な椿事と云はなければならぬ。パウルゼンの論文の出たのは去年の五月だから、この一大椿事は早や世界の津々浦々まで行き亘つて、苟もパウルゼン教授の名を知つてる學者たちは、圖書館でも燒けた時よりも大きな騷ぎをしさうなものに、そんな樣子が微塵もないのを見れば、愈々椿事と云はざるを得ぬ。

自分はパウルゼン博士の論文は疾くに一讀して居る。「讀賣新聞」に於けるＡＢＣ生の紹介が有つたので更に再讀三讀したが、ＡＢＣ生の所謂「自然派と同樣の傾向を代表する」やうな說は一言半句も述べてはない。のみならず、之と正反對に、博士は獨逸の靑年間に行はれてゐる自然派的傾向を公平に研究し、その弊

害を指摘し、その匡救法を提出して居る。ＡＢＣ生が自家の自然主義を辯護せんがために引證したパウルゼンの論文は自然主義の代表でもなければ辯護でもなくて、寧ろ自然主義者の頭上に墜下する一大鐵椎で有る。失禮な申分ながら、ＡＢＣ生は果してこの論文の全部を通讀したので有らうかと疑はれる。兎に角自分で通讀したにしても、アメリカあたりの雜誌の切り拔きにしても、他人の説を紹介するならも少し愼重に、誠實にやつて貰いたい。少くとも他人を誣いる許りでなく、敵に糧をかすやうなへまは止めて貰いたい。

唯一つＡＢＣ生のみならず一般讀者に斷つて置きたいとは、茲に所謂自然主義とは現實を如實に描寫すと云ふ審美上の主張では無くて、ツルゲネフの小説「父子」に現はれたる虛無主義、即ち一切の社會上、思想上の權威（アウトリテート）を否認する主義、傾向で有ることだ。だから自分は茲には文藝上の自然主義に對して賛否を述べることを目的とはせぬ。又實にこの虛無主義即ち非權威主義に對しても、パウルゼン博士と同様必ずしも絶對的反對をするのではない。否正直に白状すれば、この如き革新的思想も時機によつては必要なことも有ると自分は認めて居る。自分もまだ青年の一人である以上は感情上かゝる傾向を喜ばぬでもない。併し眞理を探究する學者としては出來得る丈け眞面目な研究的な態度を以て之に臨まなくてはならぬ。夫故に茲にはたゞパウルゼン教授の論文の要を摘み、第一にＡＢＣ生の誤謬を正し、第二に教授の所謂「獨逸現代の社會的研究」（論文の一名）を日本の學界に紹介せうと思ふ。この論文は實にＡＢＣ生の謂つてるやうに、併しＡＢＣ生とは反對の意味に於て「讀んで見ると何だか日本の思想界を論じて居るやうな心地がする。」獨逸はその社會狀態に於ては確かに歐洲中の後進國である、新舊思想が未だ完全なる調和を得て居らぬ。而して日本は世界强國中の後進國である。此點に於て其社會文明の狀態は獨逸國と酷似して居る。パウルゼンが日本の大學教授で有るとしても、此論文と違つたとは書くまいと思ふ。余は之を日本の教育家及父兄地位に薦めることを躊躇せぬ。

＊　＊　＊

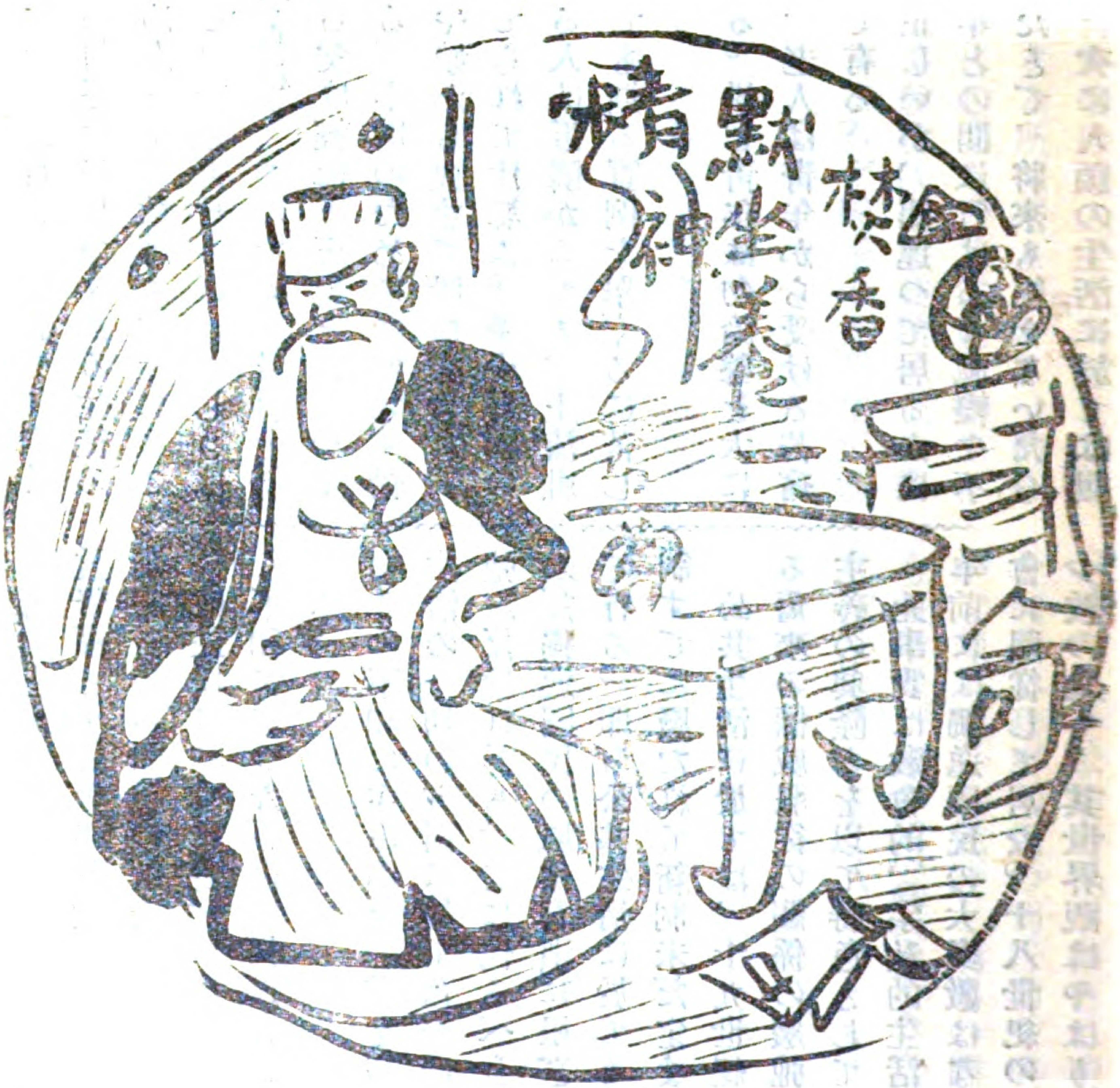
露國の少説家ツルゲネフは其名高い著「父子」に於て、今より三四十年前の露國に於ける父兄と子弟との關係を描いた。夫は父兄と子弟とは兎角意見が合はぬ、その結果として相互の間が面白くなくなると云ふ

だ。

現代の獨逸に於ても同樣な狀態が有るやうに思はれる。先進と後進、老人と青年とは意見が合はぬ、意思が疏通せぬ。斯う云ふことは兩者の性質や思想上の傾向や兩者の間に存する關係に基いて居るから、勿論いづれの時代にも有つたことだが、現代ほど甚しいことは無い。其徴候はこの事實がどの位現代の文學に描かれて有るかを見ればすぐ分る。而して文學は勿論青年の味方をして居る。現代の獨逸國に於ては、書籍、雜誌、小說、戯曲の題材として高尙な理想を抱いてゐる青年子女が頑冥固陋なる父母の壓制虐待を受けると云ふことや、思想の獨立を得んとして勇往邁進する天才ある青年が偏狹な、壓制な、保守的な敎師の爲めに壓伏され、苛責されると云ふやうな事ほど歡迎されて居るものは無い。又諸種の集會や敎育會議などの席上でも、有爲なる子弟が苛責の苦に堪へずして自殺したと云ふやうな、怖るべき敎育の弊害が論ぜられて居る。唯文學によりてのみ獨逸の事を聞知する外國人ならば、現代ほど青年が虐待を受けて居る時代は有るまい、又かゝる暴戻無道なる敎育制度は必ず一世の義憤を惹起すに違いないと思ふだらう。

併しながら獨逸の實情を承知してる人は此等の議論を少しは怪しく思ふだらう。獨逸の學校では何處でも出來るだけ生徒の負擔を輕くしやうと努めて居る。授業時間を減らし、放課時間を長くし、試驗を樂にし、宿題や宅調を監督し、制限し、遊戯や體操を奬勵し、敎師の勢力は增しても、生徒の學習を輕易にするやうな法の改良は到處行はれて居る、又到處生徒の性癖、天分に應じて其取扱を異にすべきことは敎師の義務とせられ、敎師も亦大抵喜んで此要求に應じて居る。近頃のこと息子を伯林市外の或る中學校にやつて居る自分の同僚がかう云つた、「現今のやうな良い敎育を我々は受けたことは無い」と。家庭敎育も同樣だ。この半世紀間に決して嚴しくなつては居らぬ。否むしろ通例寬大に過ぎて少々の事は默過するやうな傾向になつてゐる。然るに子弟の側に服從とか恭順とか云ふ美德は殆んど增して居らぬ許りでなく、寧ろ父兄や長上に對して冷談な、薄情な、吾儘な、若しくは侮蔑的な擧動をするのが普通になつて來たことには誰しも氣が付くだらう。青年は實に新聞雜誌や文學や公衆や輿論の後援を有することを知つて居る。だから當世では若し年長者が街上で悪戯をしてる少年を捉へて、之を矯正してや

らうと云ふ好意をもつて其横面を擲つたとすると、其少年は必ず其事實を公にして天下に訴へ、社會公衆は少年の粗暴を懲戒した年長者の罪を鳴らし、法庭は此人には懲戒の權利なきものとして有罪の判決を下すだらう。私は此間乘合馬車にのつて居たが、途中で始めて都見物に上つた田舍のお婆さんが乘込んで來た。所が馬車は滿員で席が無いので或る少年に席を讓つて吳れと願つた。少年はいやだと云ひ、その隣に居た少年の母は直ちに、この兒の席は皆さんと同



じに賃錢が拂つて有るから、そんな義務はないとの大氣焔。同車の人も誰一人當然だと言はぬものは無かつた。少くともお婆さんのために辯護の勞を執つたものは無かつた。お婆さんは呆れ返つて暫くは物も得言はなかつたが、漸く薄情な人達じやと呟いだ。

斯の如く青年[illegible]の辯護者等が冷酷なる規律や偏狭なる敎育法の犧牲を云々してゐる時代に、自分は他の方面に於て父兄及敎師が子弟の高慢、侮蔑、無遠慮、

利己心などによりて苦しめらるゝことを認めざるを得ぬ。熱心と忠實とを以て生徒を撫育し、義務ではなく眞心から出た興味を以て其萌芽を發しつゝある生徒の天分と性癖とを全うせしめんとする教師も、後にはこれ見よがしの冷淡な態度で感情を害せられ、甚しきは公然と愚弄せられ、侮辱せられる。子のために身神を勞し、子のために生きて居る父は輕侮と忘恩とによつて惱まされ、終には仆される。小供のためには何物も惜しまぬ母は、吾儘な息子や娘から血まで吸ひ盡され、終には絞り粕のやうに棄てられて仕舞ふ。多少吾國の家庭生活の內情に通じてる人は近隣からでも、上流社會からでも下層社會からでも斯る實例を擧ぐるに苦しまぬと私は信ずる。

苦情や不平は雙方にある。併し青年は勿論聲を大にして之を訴へるけれども、老人は青年から受ける苦痛を默つて怺えるのが通例で有る。

自分はどちらの言分が正しいか、間違つて居るかは決定すまい。又老年と青年との間に行はるゝ軋轢や不和は何れの時代にも有つたとて、將來も絕えないだらうと云ふとも分つて居る。次に人類の生活に於ては動物の生活に於けるが如く、自然は青年の獨立すべき時期を明劃に定めて居ない。そこで青年が獨立せんとする努力と老年が久しく行ひ來りて正當と認められたる監督權とが長い間勝敗がきまらずに衝突して居る。是が即ち此の問題の解決に困難を來たす原因で有る。自分は玆には唯殊に現代に於て老年と青年との關係が斯く不和になつた原因は何かと云ふ疑問を解決しやうと思ふ。

この不和の主原因を一言を以て蔽へば、獨逸國民の生活の一切の方面に於て舊來の權威と服從との關係が弛んだけれども、之に代るべき克己自制の形式が尙ほ未だ獨逸國民の風俗習慣に根ざして居らないと云ふ事で有る。即ち公共生活に於ても、家庭生活に於ても舊制すでに廢たれて新制未だ定まらざる有樣で有る。

公共生活に於ては、十九世紀は有らゆる方面に於ける舊來の權威服從の關係の廢弛と均一的、平民的個人主義の興隆とを以て特色として居る。

此事實は教會的、宗教的生活に於て最も著しい。百年前には獨逸國民の大多數はなほ教會的信仰を有し教會に服從して居た。十八世紀の啓蒙的思想に感染した少數の人も、其世界觀はやはり同樣の根底に立つて居た。然るに現今は民衆は教會を離れ、理性や科學の上

に安心を求めて居る。ヘッケルの「世界の謎」は彼等の福音書で有る。高等教育を受けた人士の多數も信仰上に於ては民衆の狀態と異なる所は殆んどなく、例令宗教なるものを有つて居るにしても、其宗教は少くとも教會的ではない。斯の如く教會は全然其精神上の權威を失ふに至つた。加之のみならず國家の世間化が進むと共に外形上の權威を失ふとも益々多くなつた。古來の教會政治はまた學校丈けには少許殘つて居るが、教會黨を養成するよりも、寧ろ教會に對する反抗を激成する許りで有る。

上述の如く精神的、宗教的生活の範圍に於ても個人的、革命的、非權威的傾向が著しい。英國や米國では宗教團體に屬すると否とは全く個人の自由意思に任せて有るから、徒黨を作つて宗教に敵對するものは無いが、獨逸では人々が國教の强制を受けて居た時代のよを、まだ良く記憶して居る許りでなく、その僅かな殘餘や復舊などによりて記憶を新にするから、終には「無信仰」を以て精神的自由の證左とするやうになる。

次に國家的、社會的生活の方面に於ても事情は似て居る。國家には百年前に行はれて居た所謂「お上」に對する尊敬は消えうせて、政府を批評したり愚弄するとが習慣になつて來た。幾百となき新聞や滑稽雜誌などは、之を本業のやうにして讀者を喜ばせて居る。之と同時に政府御用の刊行物や演說家も居らぬでは無いが、却て徒らに批評と嘲罵の種をまく許りで何の役にも立たぬ。他の國、殊に英米に於ては國家は純粹に「民意」を代表して居る、少くとも外觀丈けはそう云ふ仕組になつて居るから、各國民は政權の分擔者として、自己の意思が多數の意思と一致した場合には、自分で政權を行ふ義務が有ると思つて居る。然るに獨逸では舊來の「お上」風(官尊民卑)の政府は早や亡くなつては居るが、自治的政府の新形式は未だ出來上つて居らぬ。

また社會の秩序に於ても權威服從の關係が消失して主人と奴隷とは雇主と雇人(資本主と勞働者)に化した。然るに舊來の狀態はなほ到處に殘つて、平等と云ふ新關係の固定を妨げ、又一方には復古的運動をするものも有つて、到處反抗と非權威的、革命的精神を喚起して居る。またもや英米を引合に出すが此兩國では社會はすでに幾分か彼の新關係に慣れて居るので、かやうな思想や感情の習慣を脫して居る、

斯の如く全社會に瀰漫し一切の刊行物を支配せる破

壞的精神が亦學校家庭に入りこんで居るのは勿論で有る。權威や秩序に對する尊敬の念はこの範圍に於ても疾つくに失せて居る。

自分は近頃ヰルヘルム・フオン・フムボルトの娘の「ガブリーレ・フオン・ビユーロウ」の傳記を讀んだが、此書には一世紀以來の父子の關係の變遷を知るには最も便利な書簡が載つてゐる。十八世紀の終頃の子が親に宛てた手紙を見ると父母に對する恭敬慇懃の情が明かに見えて居る。其次の時代になると舊來のかたくるしい文體は失せたけれども、まだ温い情のこもつた尊敬の調子が溢れて居る。第三代目即千八百五六十年代の手紙には早や冗談を雜えたり、人を茶化すやうな調子が顯はれ、子弟の自意識が强盛になつたと云ふことを示して居る。現代に於ては自分の見る所によれば、かゝる傾向が益々著しくなつたやうに思はれる。親子の關係は同輩のやうになつて、親子が互に茶化したり、からかつたりすることは勿論、甚しきは互に罵言譏謗を逞うしても世人は格別怪しいとも思はぬ。

自分は今日の青年を非難しやうとは思はぬ。彼等は其生長する時代と境遇の感化を受けるのだから仕方がない。青年は崇敬尊重の聲を聞くことが稀れて、家庭に於ても、新聞に於ても、滑稽雜誌に於ても、文學に於ても彼等の耳朶をうつものは矯激な、尊大な、毒々しい批評許りである。斯る時世に於て誰か亦何ものに對して尊敬の念を抱くで有らうか。又尊敬の念を抱くを恥とせぬだらうか。現代の所謂偉人、先覺と稱せらるゝヘッケル、ニイチエの如き人々は自己と自己の思想との外何ものをも尊崇しては居らぬではないか。一切を疑問となし、一切を排棄し、苟も權威の外形を有するものを悉く罵倒することは、獨逸に於ける言論界一般の調子である。かゝる痛快なる破壞的否定的大言壯語が青年の耳に入りやすきことは言はでものことである。（紹述者曰くパウルゼン氏はなほ現代青年男女に愛讀せられ、粗笨、未熟、過激なる思想を鼓吹する刊行物の標本としてエルレン・ケイ（女史）とグルリットの著書を擧げて論じて居るが、此論文の要點とは直接の關係がないから略することとする）

獨逸の新聞紙で毎號各種の記事に於て、學校及教育の根本的改革の切要を論じ、所謂全然腐朽せる舊制度の破壞を絶叫して居らぬものは有るまい。又到處後進子弟の權利と要求とを論ずるものは有るが、其義務を云ふものは無い。斯かる時世に於て青年輩が精神の平

衡を失つて、兎も角外觀だけでも維持されてある古來の權威に對する正當なる關係を見出すとの出來ぬのは自然の勢で有る。又彼等が青年の權利を主張し、彼等の新たなる權威によりて先進者は老耄せりと確信し、齒切して先進者の羈扼を忍び、之を脱するの日の來らむことを渴望して居るのも無理からぬ事で有る。

然るになほこの外に先進と後進の關係を不和にする事情が有る。即ち昔は十六七歳で大學に這入れたのが今日では二十歳以上になつてもまだ中學にまご〱して十歳の兒童と同一の規律に縛られて居る。昔は二十歳で大學を卒業して實世間に出たのに、今日では二十五歳になつてもまだ卒業が出來ず、三十歳になつても一本立ちは難かしい。甚しきは胡麻鹽頭になりかけてもまだ親の脛を嚙るものが獨逸では少くない。これは獨逸に於ては昔から高尚なる學識を要する職業が多過ぎる爲めに生じた禍害で有る。斯の如く一定の年齡を過ぎてもなほ久しく他人に依つて纔に生存を維持する居候的境遇を苦々しく思はぬものが有らうか。そこで發するに由なき青年の活氣と實力とは欝屈して不平となり憤激となり終に革命的思想を釀すやうになるのも尤も至極と言はなければ成らぬ。

なほ一つの事情は三四十年來國民の生活が著しく安樂になつた事である。從て青年の教育も柔弱になり、其結果終に被教育者の意思の薄弱を來した。十八世紀及十九世紀の前半の學生の如く少年時代に嚴格に仕つけられたものや、貧賤に育つたものは、少々の生活難や不自由に遭つても齒を喰ひ縛ばつて奮鬪したが、今の青年はそんな目に遭ふと何より先きに感情を害し、恰も自分の正當の要求が容れられないやうに思ひ、社會人生と戰ふの勇氣はなく、徒らに悲歎の聲を發し、不平を唱へ、社會の改良を論じて世の中にうるさがられる許りだ。又彼等は喜んで大々的企望や計畫を喋々する、又空想を逞うして己の成すべき事業と實力を過大視する。所が其の遣り口を見ると、ちよつと手をつけて見て失敗するともう止める。だから其能力は實世間で鍛へられる暇のないうちに、自分の中で盡きて仕舞ふ。さうすると又もや社會を非難して、社會が自分を妨げると云ふ。斯の如き空元氣で且つ同時に愁訴的な神經衰弱患者は現代特有の人物で有る。ゲルハルト・ハウプトマンは其戯曲「寂しき人々」に於て此人物を描いて居る。ハウトマンは時代病を寫す目的でしたのか、又た主人公は眞に孤獨の偉人で有ると信じて居る

か如何かは知らぬが、現代の青年は斯樣な薄志弱行の輩に同情を寄せ、デカタン的感情を裝ひ、終には實際自意識の病氣に傳染するやうになる。自意識の病氣とは、自己は不遇だと思ひつゝ、その不遇を誇とするとて有る。

誠に現代の獨逸青年が耽讀する文學ほど不健全なものは何れの時代にも無かつた。勿論背理、狂妄、腐敗墮落の現象は何れの時代にも有つたけれども、文藝の客體主體として斯くまてに重きをなし、斯くまでに社會から重要視せられたとは無い。又大言壯語、薄志弱行の輩や、故らに異を樹て奇を衒ひ、天才を詐るの徒が眞の偉人として喧傳せられ、公衆は又かゝる現象に對して恒心を忘れ、判斷力を失へると今日の如きは無かつた。若し獨逸國民が科學、技術、經濟的及社會的生活の方面に於て、斯く優秀卓拔な功績を擧げなかつたなら、誰しも獨逸人は腦神經衰弱に罹つて居ると信ずるだらう。



併し絶望するには及ばぬ。かゝる病的な現象も一時の流行て有るからいづれ廢たれて來る時も有らう。又背理狂妄の言說によりて天才の名を增して居る詐僞者も、其眞相を觀破されて醜態を掩ひ能はざる時が來るだらう。亦彼の先進後進との關係も恒常に復する時が有るに違いない。若し天下に溯

漫せる革命的精神が勢を失ひ、獨逸に於ける國家、敎會、社會の形式が固定したなら青年も亦權威に對する順當なる關係に復歸するだらう。

そもそも品位ある君子の特徴は口喧ましい、落着のない、差出がましい擧動では無くて、謹愼持重である。一定の矩繩の中に於ける確實なる行動である。それと同じく偉大なる國民の特徴は呼號的な、革命的な態度でもなく、又外國に向つて愛國心をひけらかすとてもなくて、冷靜に自國の價値を意識し、國內の秩序の已むを得ざる所以を認むるとて有る。自分は獨逸人が現代の弊習を脫却して、かの品位ある大國民の資格に近づきつゝ有るとを確信して居る。國民の氣風が一變したなら、青年も亦適當なる生活の形式を得るだらう。



青年をしてこの品位修養の目的を認識せしむるに最も有効なるものは、自由と必要との適量で有る。人間と云ふものは必要に迫まらるゝとが無いと、絶えず新なる欲望を生じて而も終に何物をも得ることとなく、我れと我が氣隨氣儘に苦むやうになる。年長者は其境遇より生ずる實際上の必要に制せられて氣隨氣儘を抑へ、自己の活動を規定して行くのが通例で有るが、青年には職業と云ふものが無い、一定の仕事を行つて直接の需要に應じなくてはならん必要が無い。そこで青

年は實際上の必要の代りに教育者の意思によつて强制せられる。是れが先進後進間の一切の不和葛藤の原因で有る。小兒は年長者に强制されるのを當然のことと信じて居るが、少年青年になると自意識が漸々强盛になつて、自己に加へらるゝ長上の意思を故なき壓制のやうに思ふ。だから子弟の教育に於ては出來るだけ年長者の强制を變じて、青年自身の理性によりて承認されたる實際上の必要とすることが大切で有る。此點に於ける教育者の成功が大きければ大きいほど、青年の無意義なる革命的反抗に遭ふことが益々少くなるだらう。

元來獨逸では政治、社會、宗教の公共的方面は言ふに及ばず、學校家庭の小範圍に於ても、新時代の精神と調和し難い舊時代の獨裁制が多量に殘つて居る。殊に學校に於ては軍隊的組織が幅を利せて居る。學務委員は教師の指導者、代表者、助言者ではなくて儼然たる君主、監察官、裁判官で有る。校長はまた同僚を指導するのではなくて、部下の教員を使役して居る。この軍隊風がまた教師に傳はり、生徒を見ること恰も部下の如く、命令に從つて一定の事物を學び且つ行はしめるやうになつて居る。この弊風は早晩改むべきもので有る。

モルシュ氏は其最近の著書に於て、教員と其長官との關係と、校長及學務委員の權限を定めた現行の教育制度は普魯西に於ては大抵前世紀の五十年代に出來たと言つて居る。然るに此時代は政府が人民の自由や憲法政治を嫌ひ、行政命令によりて新制度の効力を制限した時代で有る。其の影響が教育界に殘つて斯の如き軍隊主義となつたので有る。其後時勢は幾度か變動した。今は早や舊時代の遺制を改めて新時代の精神に適應せしむべき時期に達しては居るまいか。

學校に於ける宗教科の教授法も根本的改革が必要で有る。これも十九世紀の五十年代に、十六世紀の信仰告白の形式を基礎として作つた制度で有るから、今日にて其用をなさぬのは勿論で有る。十六世紀では聖書が百科的知識の主要なる材料で有つたが、今日では小學校の生徒すら自然や歷史を觀察するに、近代の自然研究法や歷史研究法を用ゐるやうに教へられて居る。生徒等が聖書の教ふる所と近代の研究との矛盾を認め、此矛盾に於て近代的科學的學說に傾くのは當然で有る。そこで宗教科に於て神の默示と教へらるゝ聖書は、科學から見れば荒唐無稽の空言で、臆病者か僞善者かでなくては之を信ずることは出來ぬ。社會民主黨

ては基督敎を屬つて「官用信仰」と名つけて居るが、之はこの黨派に限つたとては無い。かゝる宗敎を强ゆる結果は宗敎のみならず一切の權威に對する不信用と反抗とを招く基て有る。宗敎科敎授改正の切要なる所以は玆にある。自分は過激派の如く宗敎科の廢止を唱へるものでは無い。聖書の知識なくしては歐洲各國の歷史的生活を理解するとは不可能であるから、宗敎科の廢止は策の得たるものでない。併し宗敎科敎授の目的は絕對永遠の眞理即ち信仰を敎ふるにあらずして、人類の倫理的、宗敎的生活の紀念物、即ち過去の人心を支配せしものなるが故に、吾人の生活と思想とを束縛する權利は無くとも、吾人は之に對して敬意を失ふ可からざるものとして敎ふとて無くてはならぬ。宗敎は大切で有るが、吾人の生活より生じたる活ける宗敎でなくてはならぬ。死せる宗敎は生命と信仰とを殺すのみならず。强く一切の信憑と畏敬の念を失はしめるもので有る。

以上はパウルゼンの論文の大意で有る。逐語的に譯した所もあれば、一章一節の大意をとつた許りの所も有るが、少くともパウルゼン氏の主意を誤り傳へた所は無い積りである。

（終）

新春文壇に於ける各作家の武者振

樗陰生

正月といふ月は何となく、心忙しい、氣のそはくする月で、落附いて讀書などするには不適當な月である。其癖、正月程出版界の賑かな景氣のよい月はない。殊に雜誌はどれもく澤山の小說を揭載するので、正月に出る小說の數はすばらしいものだ。其讀書に不適當な月に、そんなにどつさり小說が出るんだから、一々精讀、再讀して、動きのとれない批評をする事などは、非常の難事である。僕は今こゝに、僕が讀んだ丈けの範圍に於て、各作者の武者振の如何であつたかをざつと紹介するを以て滿足しやうと思ふ。尤も同じく「讀んだ」といつても、朝、早く机に向て讀んだのと、夜、遲く床の中で讀んだのと。心持のよい時讀んだのと、わろい時讀んだのと。天氣のよい時讀んだのと、わろい時讀んだのと。叮嚀に讀んだのと、ザッと讀んだのと、批評の標準がキチンと一致し難きものあるべきを恐れる。又ちよいく新聞雜誌に出た批評などと自分の考の違ふのを見れば、自分の批評眼といふものゝ高いのか低いのか疑はれる。然し僕は自分で讀んで、自分の趣味に照らして、自分で判斷して、自分の信ずる處を正直に書く丈けである。不充分な所、間違つた所は勿論あらうが、故意に筆を曲げたり、若くは他人の說を受賣して附和雷同した批評よりは、いくらか取得があるかも知れない。少くとも僕は自ら諂からざるを快しとする者である。

田山花袋氏

花袋氏は此正月に最も目覺ましい活動をやつた一人である。「文章世

界」に出した「古事」は紀行文と抒情文と交ぜたやうなもので、且つ叙景は文字を多く使て居る割合に、印象が不明で、抒情は妙にセンチメンタルの所が多く、花袋氏の寧ろ短所ともいふべき方面を暴露した作であるが、「早稲田文學」に出た「一兵卒」。「中央公論」に出た「土手の家」。「太陽」に出た「縣道」の三篇は皆相應に讀み應へのある作であつた。「一兵卒」は日露戰爭に出た一兵卒が脚氣で重い足を引ずりながら、前方にある自分の隊に加はらうと思つて、病院を出て、荒漠たる滿洲の野を歩く。……目に入るもの、總て戰爭の光景。彈丸の轟く響は遠く耳に入る。彼は妻の顔を思ひ出す。子供の時代の事を思ひ出す。神樂坂の縁日の事を思出す。かくいろ〳〵の事を思ひ出して歩行いて、一寸とした洋館のやうな處で休む。脚の疼痛が激しくなつて非常に困しむ。遂に脚氣衝心になつて、見ず知らずの二人の兵隊の通り一片の言葉――「本當に可愛想です、何處の者でせう」などいふ言葉――を聞きながら死ぬと云ふ趣向である。近頃段々流行つて來たとか聞く内觀的、内部的描寫で、戰爭、戰場といふものを大きな背景にして、其前に便りなき、哀れな、病める一兵卒――殊に其一兵卒の心的苦悶を描いたものである。世間では非常に傑作、又は非常に深酷な作だといふ人もある樣である。材料は成程深酷なものである。然し之を讀んで正直の所、僕は深酷だとも何とも思はなかつた。これ丈けの材料を使て、自分の頭で今一度組み直し考へ直して見なければ深酷にならないやうな氣がした。今少し藝術らしく、印象を殘すやうに書けないものかしらと思つた。今少し順序よく描寫したら二十頁の此作と同じ感じを十頁以内で感じさせるによささうなものと思つた。僕は同じ脚氣衝心を書いたものだが、去年の「閑室」の方がもつと感じが深かつたやうに思ふ。然し此篇で僕の最も感じた事は、今迄概して粗略な書き方であつた氏が、餘程文章に骨を折て來て、文調なども大いに重んずるやうになつた事である。「銃が重い、背嚢が重い、脚が重い」なども其一例である。之れは甚だ慶賀すべき事であると思ふ。概していへば此篇は技術の上に於て氏の從來の作よりも優れ、又材料の選擇もよいが、全體の描寫の上に於て深酷なるべきものを深酷に感ぜしめ得なかつたといふ、缺點がある。然し兎に角注目すべき一作品といつてよからうと思ふ。「土手の家」に至ては確かに作者第一の佳作。―前代には貸座敷であつて今は旅店兼料理屋をして居る家がある。其家の主婦を初め、女中共が朝から晩まで、情夫の話、食物の話、着物の話を爲通し。殊に其主婦は其實母と情夫を奪合ひして居るやうな淫風に染み込んで居る家である。其處に使はれて居るお源といふ子守女が、みんなが未だ小供と思て居るのに、人知れず船宿の息子と出來て、川ぞへの土手の家であひびきをやつて居るといふ事を書いた者だ。全體が隨分ひどい事實であるが、作者の態度が超然的で、只事實を事實として書いて居るので、何等の醜惑を起さしめないのは氏の非常なる長所である。殊に此編に於ては氏の何時も陷り易い筋書風を脱して、具體的に描かれて居るのは非常の進歩である。且つ背景などもアッサリ書いて、而かもよく出て居り、お源が船宿の息子に引張られて舟に入た、其舟の中の趣などもハッキリ出て居る。處々に同じ言葉の重複などはあるが此篇によつて氏は簡潔に而かも具體的に書く手腕をも持て居ることを示したものと思ふ。「縣道」は少し散漫な作である。溺死した夫の死骸を、妻たるものが、其冷たさも、醜さも忘れて、裸體になつて自己の膚で温ためて生き歸さうとして居ることに興味を以て書いたとすれば、前後の釣合のわるい作である。背景などもクド過ぎる樣である。然し決して惡い作ではなく、隨分見所のある所もある。只作者は此女の所爲が愚民の迷信で、且つ夫たるものに對する熱情から出て居るもののやうに見て居るらしいが、溺死した人には焚火よりも人の

児の溫もりが有効といふのは實際事實な相で、何處の漁村でも、見ず知らずの溺死した男を抱いて寢る女が澤山にある——又是丈けは夫も欺つて許して置くといふ話である。作の價値に關係のない事かも知れぬが、参考の爲めに一言して置く。

小栗風葉氏

「新小説」に出た「嫁えらみ」。「新思潮」に出た「七人め」。「趣味」に出た「解脱」。「中央公論」に出た「歪力」。以上の四編が風葉の名を署して正月の文壇にあらはれた。而かも「嫁えらみ」はトルストイの「アンナカレニナ」の第十二回から第十五回までの飜譯で、「七人め」は三十七年の「文藝界」に出した「親と子」の上と下を書いて、其中丈けをちよつと書き直した丈けのものである。尤も「嫁えらみ」は趣向もよく(長篇の一節を切り離してもこうキチンとよく出來る所を見てもトルストイなどは實にエライものだ)又文章も力もあり、調子もよく、殆んと飜譯と思はれぬ程よい作になつて居る。(譯した人は風葉でなからうが、文章は無論風葉が大いに筆を加へたものだらう)只、飜譯とも何とも斷はらぬのは餘り感心せぬ、又「七人め」の如きは前後をとつた爲めに却てわるくなつて居るやうに思ふ。右のやうな譯だから風葉の創作は「解脱」と「歪力」の二篇丈けである。「解脱」は長篇の一部であるから、悉しく批評する譯に行かぬが、餘程力を籠めて居るものらしく、短い割合には讀み應へがする。只今少し多く出して貰ひたい氣がする。「歪力」は文章は氏のことゝて流石にむだがなく、締つて書かれて居るし、又人物もモデルがあつて、其モデルを僕等が知て居るので、作以外の面白味もあるが、普通の人には餘り面白いものでないかも知れぬ。要するに正月に於ける氏は大した武者振を示さなかつた一人である。

徳田秋聲氏

「新小説」に出た「殘骸」は氏も斷はつて居る通りモーパッサンの飜譯で、(英譯には Reilex of the Time とあるもの〻)飜譯文も大したものでないから許をせぬ。「趣味」に出た「背負揚」も何だか飜案物のやうな氣がされる作で、前半は確かに氏の筆と合點されるが、後半は前半と少し調子が違つて、趣向文調もすつくり合て居ないやうな氣がした。わるい作と思ふ。ひとり、「文章世界」に出た「かくれ家」は氏ならでは到底書けぬ作で、新春文壇中に於ける一佳作である。奥さんも、旦那も、仲働のお仲も、此三人の關係も、此三人の住んで居る所謂かくれ家も、其家に起た事件も、落附いた、底光りのする、幽韻のある筆で實によく描かれて居る。讀んで居ると揚景ありくと眼に寫つて來る。非常によい作である。要するに秋聲氏は此「かくれ家」一篇を以て新春文壇に大いなる寄與をなしたといつてよいと思ふ。

國本田獨歩氏

氏の作は「中央公論」に出た「竹の木戸」。「文章世界」に出た「二老人」。共に見所のある作である。「竹の木戸」は氏が「窮死」に書いたやうな「生活問題」の方面へ、進んで行た作でお源といふ植木屋の女房が、貧故に隣家の炭を盗み、其事が露見し相になつたのを恐怖し、夫に向て量り炭も買ひ得ぬ今の境界を愁訴する。すると物も言はずにひよいと出て行た夫が炭を一俵持て來た。處が其炭も亦炭屋から盗んで來たのだといふ事が分たのでお源は遂に自殺をするといふのが中心の思想で、これに隣家の人物——殊に其下婢のお德などを取り合せて一篇をなして居る。自殺をするといふのが、少し唐突で、且つお德との軋轢も今少し結末があつて欲しい氣もするが、氏の作風が明かに一轉化して來たといふ事實は極めて注目に値するし、又隣家の諸人物の性格も一々よく書き分けて居る處は流石に獨歩である。傑作とはいへぬが、獨歩氏に興味を持て居る人は充分

注意すべきものと思ふ。「二老人」は石井翁といふ仙人主義の人と、河田翁といふ世路のせち辛いのに躊躇して居る人とを描いたもので、暢びりした、ゆとりのある、趣のある作である。終りの方で河田翁に「私は大變な事を仕て居るんだ」云々と自分の身の上を語り出させた處はちとわざとらしいが(少し終りを急いだのだらう)面白く出來て居る。兩者を比較して見やうならば「竹の木戸」は研究的に苦心して書いた作で、「二老人」の方は興味を以て、書いたものだらうと思ふ。要するに正月に於ける、氏の武者振より推測するに今後は從來と異つた見地に於て大いに活動をするだらうと想像される。

眞山青果氏

「中央公論」に出た「男五人」は、其キビ〳〵した筆致、其精細緻密な觀察に於て、容易に他人の及ぶべからざる力量あることを充分に示して居る。「男五人持ちや」の唄を歌ふ、放縱な、勝氣な、頁嫌いの女主人おせんは固より、脇師のつばくろ爺さんも、又房州のローカル、カラーも充分によく出て居る。那古の海岸の叙景など殊によい。只東京へ來てからの所が、說明式になつて居るのは少し慊らないが、說明式に出來得る程度のことは遺憾なく書き盡されて居る。惑興橫溢の作ではないが、苦心慘憺、氏の力量の甚だ恐るべきを示した作である。之に反して「趣味」に出た「妹」は寧ろ惑興の作で、三分の二位まで、ずつと一息に氣が張つて、妹も、兄もなか〳〵よく出て居る。只終りの方が稍々書き足らぬ惑があり、初めと少し釣合がとれぬので、切角の作をそれ程でなくしたやうな憾がある。然しなか〳〵よい作で、一月の「趣味」では無論第一等の出來であらう。只「男五人」に比ぶれば、少し讀み應へがせぬやうな氣がする。「文章世界」に出た「紫」は餘り概念に過ぎ、且つ餘り理智で以て書いたやうな——作者の弱點をあらはしたやうな作でよくない。只「秋晴の朝、日は冷たく白芙蓉の瓣に射して居た。紫苑、秋萩、秋の草、秋の花の盛りである」の句は好きな句だ。「新潮」に出た「癌腫」は未完であるから、今後の發展は分らぬが、描寫の精細な割合には情趣がないやうである。「新聲」に出た「別れ際」は舊作と聞いたが、威程筆にも幼稚な所もあり、趣向も大したものでない。要するに氏の作は五篇で、例によつて其數は最も多いが、見所のあるのは「男五人」と「妹」の二篇で、此二篇によつて、氏の力量手腕、所謂大家の壘を摩するものあるを充分に示して居る。氏も正月文壇に最も活動した一人である。

泉鏡花氏

「草迷宮」といふ單行本はまだ讀まぬから兎角の評を下し難いが、「新小說」に出た「雌蝶」は一讀するに大分骨が折れた。骨を折て一讀したが何等の惑興が湧かぬ。寧ろ非常にイヤナ惑じがした。文章もわざとらしく、思想も作り物らしく、僕は實につまらぬものだと思つた。

廣津柳浪氏

「新小說」に出た「壁一重」は滿洲に居る馬賊の頭領の妻君大柳假名子なる變チキな女性を描いたものである。餘りに芝居向きなもので、一向に面白くない。氏の如き描寫的手腕を持て居る人が、こんなものを書いて居るとは情けないものだ。「文藝俱樂部」に出た「眞か僞か」は讀まず。

米光關月氏

「趣味」に出た「鋼鐵人。」可もなく不可もなし。

德田秋江氏

「新潮」に出た「人影。」餘りに事實に忠實ならんとしたもので、作としては價値の少ない者となつた。去年の「早稻田文學」に出た「食後」などには到底比較されぬ。只橫濱の埠頭の景色を書いた所丈けはなか〳〵よく

出來て居る。

吉江孤雁氏

「太陽」に出た「まなし兒。」一種の紀行文のやうなもの、文字を多く使て居る割合に、情景が明瞭に出て居らぬ。氏の何時もの作より遙かに劣る

窪田空穗氏

「趣味」に出た「預品」は小島といふ自分の昔の先生の性格を描いたもの、可もなく、不可もないが、表面の事實ばかりでなく、今一歩深く切り込んで書いて欲しい。こういふ種類のものなら、獨歩氏などは夙くの昔に數段の上の作品を出して居る。「太陽」に出た「昔の家」は讀まず。

岡田八千代女史

「新小說」に出た「驚」は、俳優と名家の令孃との間に生れた一女子が、父の華美な、贅澤な生活を思ひ起して羨ましく、自分も父の血統を引いて俳優たる資格ありと小學校教員を辭して、自分と關係あつた男の後から直ぐ上京して某俳優の内弟子となつて見たが、芝居の事は一向やらせずに毎日の行儀や仕事が七面倒なので、面白くなく、又男をこしらいたから、やがて其家を飛び出すだらうと云ふ事を書いた、つまらぬものだ。書き方など荒くさくつて一向見榮がしない。「新思潮」に出た「白蛇」は讀まないから評なし。

嵯峨の屋氏

「新小說」に出た「その正月。」は夫の名は八郎兵衞、妻の名はお妻といふから「餓谷」のやうな悲劇でも書いたのかと思つたら、大違ひ、アーメンだの、神樣だのつて馬鹿に西洋くさいものであつた。のんだくれの夫が、妻子の窮狀、信仰に動かされて、正月元日にクリスチヤンになつて、洗禮を受けるといふお目出たいものだ。今少し旨く、眞實らしく書かれさうなものだ。つまらぬ作だ。

坂本四方太氏

「ホトヽギス」に出た「長靴。」書き方には流石に老練な所はあるが、大したものでない。

寒川鼠骨氏

「ホトヽギス」に出た「烏」寫生的の所に面白い所がある。前半がよい。

大塚楠緒子女史

「趣味」に出た「蛇の目傘。」嫌やな作だ。「顰むもよし、笑めば猶よき句やかな」云々以下數行、濱香の容貌を形容した文字など、漱石氏の「虞美人草」でも模したやうで非常に惡味だ。女史は好んで藝者のことなど書くやうだが、只文字ばかり艶麗なのを選んで、情趣といふものが出て居ないので甚だ慊らぬ感がある。

小山内薫氏

「趣味」に出た「掏摸」も。「文章世界」に出た「手」も「新小說」に出た「騎兵士官」も、みんな僕は嫌ひだ。何か外國のものでも讀んで、趣向を得てそれを才で以て捏ねつて書いたやうな氣が見えて面白くない。此中では「騎兵士官」が比較的よからうが、矢張り漱石氏を模したやうな、輕薄なやうな處があつて嫌だ。一體模するといふ事が甚だわるい事だ。「掏摸」などは、摸の例を以て弟に關係あつた女に弟を思ひ切らするといふ、實に薄つぺらな、わざとらしい嫌なものだ。作物に對する氏の態度は甚だしく、才と智に囚はれて居るやうだ。

野上八重子女史

「新小說」に出た「紫苑」の書き方の明晰な點は女史の從來の作物よりも一段進歩して居る。只父から貰つて來た短刀を夫に示したら夫の心が解け

たとあるが、夫が妻を餘所〳〵しくした動機が分らぬて、　此理由も胸に響かない。(妻君が妻君としての決心が固まつて居なかつた爲めとしか受取れぬ)作全體としては價値はないが、部分〳〵としてよい。父の刀劍をいぢつて居る處などは少しわざとらしいがよく出來て居る。「ホトヽギス」に出た「柿羊羹。」これも惡くはないが、吉田さんの戀物語なるものが、神秘くさい、小供らしいもんて(作者は暢氣て趣味ある積りかも知れぬが)嫌やだ。

鈴木三重吉氏

「中央公論」に出た「引越。」大變に評判のわるい作てある。之を辯護すれば、自分の雜誌に出たものだから褒めるのかと邪推する人があるかも知れんが、實際僕はわるい作と思はんから、少し之を論ずる。此作は趣向丈けをいへば、下宿屋の冷やかな、温かみのない生活に厭いて、素人屋に移つた書生が、其おかみさんのやさしく情味のあるやうなのを、大いに喜んて居た所が、其情味といふものは全く口ばかりて、自分が大事にして居た鶯を、自分の留守中に物も喰はせずに殺して了つたのに、腹が立つて宿更へをするといふ事を書いたもので、作者はアッサリと、其主張があらはに出ないやうに勉めたもの、いはゞ澤消しのやうな作品てあるから一般の人が其光りを認めぬのも無理はない、殊に鶯に關する幼時の事をエピソートとして、而かもシヤッチの扣鈕を附けながら話させる所の手際などは、氏の非常なるアーチストたるを示して居る。この作の一般に受のわるかつたのは、かゝる趣味を持た人の比較的少いことを證據たてたものに過ぎないと思ふ。

小栗籌子女史

「新潮」に出た「媒酌」女史の處女作てある。某事業家の妻君が、郷里に歸て、昔の親友——男女と渾名された澤子といふ、今年廿七になつてまだ夫もなく、容貌も餘りよくない女を訪ふ。澤子は日頃の元氣に似ず、愚痴をならべて淋しさうにして居る。これは夫欲しさの爲めてあると分る。因て婿を世話しやうと自分の遠縁の醫學士に口を掛ける。すると其學士の母も乘氣になり、學士も異議がないとふいので、何だか話が纒まり相になる。處が媒酌に立つた自分が學士と逢て見ると立派な男て、自分の夫よりも數倍優つた男て、澤子さんには過ぎた男て。何だか此話を毀して了いたいやうな氣になる。一寸澤子にケチをつけて見たが、學士は平氣て、貰ふ氣てある。家に歸れば澤子は來て返事を待て居る。嫉ましいやうな、馬鹿にしたいやうな、卑しむやうな感がむら〳〵と湧くが兎に角出來さうな事丈けをいつて了ふ。其結婚の時は祝ひの席に臨まず歸國してはがきて祝てやるといふ趣向を、しまつて、むだのない、鋭い筆て書いてある。確かに一佳作てある。風葉氏の「弟姫」よりも、もつと自然なよい作てある。

水野葉舟氏

「新思潮」に出た「再會」。自分の感情に囚はれて了つて、他には其感情が餘りよく徹らぬものとなつて居る。モデルの人を知て居て讀めば興味があるが作としては感服せぬ。「新小說」に出た「北國の人」は誰だかもいつたやうに「東北の人」といはなければなるまい。全體としては纒まつて居ないやうだが、部分〳〵には氏一流の感じをよく出して居る處がある。「太陽」に出た「さあちやんと安井」は讀まぬ。

長谷川二葉亭氏

「趣味」に出た「血笑記」アレドンフの作の一節の飜譯である。感じを書いたものであるらしいが、何となく誇張のやうに思はれて僕は好か　然し全體出て見なければ何とも評は出來ぬ。

夏目漱石氏

「虞美人草」の後でもあり、且つ三十回位の短篇といふやうな時だから「坑夫」といふ題を、「東京朝日」に見た時は、今度は極めて痛快勁抜なものて、「べらんめい」口調て、坑の中て火花を散らすやうな事を書くんだらうと思つたが、出て見ると、想像とは正反對、極めて理屈つぽい、學者めいた、暢氣過ぎたものて、今日まて廿二三回出たがまだ鑛山に着かないて居る。自分のいつた一語、一話悉く、心理的解説を施し、自分のなした一擧一動悉く學理的説明を附したもので、讀んで、ウンザりする處が少くない。又「松原の方て發展して呉れなければ」とか、「自殺はいくら稽古をしても上手にならないものだと云ふ事を漸く悟つた」とか「牛から馬、馬から坑夫」といつたやうな、茶化した悪戯言が多いので非常に嫌な處がある。「虞美人草」以前の氏は變幻出没睨端すべからざる概があつたが、近來は少し型に入り過ぎたやうな氣味のあるのを慊らぬやうに思ふ。

柳川春葉氏

「新小説」に出た「殘者。」少し拵へ過ぎて居る氣味があつて餘りよくない「新潮」に出た「出勤前」。全體としてはわるくなく一句、二句非常によい處もあるが、又不穩當な形容詞や、不自然な會話などもちよい〱ある。要するに中作てある。「趣味」に出た「飯時分」。今少し深酷になり相な作を左程深酷てないものにして了つたのは惜しい。而し氏の中てはこれが一番よいやうだ。母を死なしめ、許嫁をこはして了つた恨があるといふが、どういふ事をしたのか具體的の事が分らぬので、相手の男に對する感情が不明てある。又終りの方からいへば題名も「空腹」とでもいつた方が妥當だやう思ふ。

三島霜川氏

「新小説」に出た「ドブ」。よい作だ。尼と虚無僧との間に出來て、ドブの中に棄てられて、顔に大きな痣のある男が棄兒だといふ事を知てからグレ出して、大酒を飲んで、世人を敵として、終にドブにはまつて社會を呪いながら死ぬといふ趣向は別に新らしくもなく又筆も少し乾いて居るが、居酒屋で酔ばらつて居るあたりの筆は旨いものだ。氏の一佳作だ。氏は理屈の入つたものを書いては却て隙間のある作を出すが、箇様な世から見離された、又世を見限つたやうな人物を書かせては他人が及ばぬ手腕をそなへて居る。「新聲」に出た「雨の夜」はよくない。

伊藤左千夫氏

「ホトヽギス」に出た「隣の嫁。」非常の佳作てある。田園の氣に充つ満ちた作品て、情景共に双絶、ツルゲネフの戀物語にも比し得べきものと思ふ。最後の二頁許りは少し收りがわるい、が其他は一點の批難がない、おとよさんは素より、其他の人物おはまも省作も、清藏も、政さんも兄の夫婦も皆よく出て居る。只如何に崇拜して居ればとて、おはまがおとよさんを悪まぬのは少し妙だが、人物も先づ無難といつてよい。殊に雨の日の仕事場の光景はあり〱と描かれて只々敬服の外なく、おとよさんの家の風呂場の處もなか〱艶に出來て居る。此前の「野菊の墓」よりは僕は更らによいかと思ふ。

生田葵山氏

「明星」に出た「神經衰弱」はゴルキーの「二狂人」からでも思ひ附いたやうなものてつまらない。又「趣味」に出た「味噌汁」も失敗の作てあるが、「新小説」に出た「姑」はなか〱見所ある作てある。が處々にわざとらしい誇張の筆使ひもないてはないか「自分は先づ嘲笑ひたくなつて、一女は直ぐ之だ。自分の情を動かした愉快な部分は忘れて了て其れから來た苦痛を他人に塗り付けたがる！」とか、「長く男の情に接しない飢渇が歴々」——云々とかなか〱好い處がある。又全體の着想も、若く夫に別れて永

い間寡婦を立て通した姑が、其嫁も早く夫に別れて淋しいのを見て自ら慰めて居るやうな、若い男の嫁に近付くのを妬みて、自分は酒などを呑めば妙に若々しくなつて、男の手にさわるのを嬉しがつて居て、而かも世間體は何處までも堅氣な感心なお婆さんとして通て居るといふ姑をよく描いて居る。此姑を迷はさうとする所など確かに眞山の特徵を出して居る

正宗白鳥氏

「早稻田文學」に出た「何處へ」は氏の從來に比類なき長篇である。五十八頁出て未だ未完である。未完であるから全體の出來榮はよく分らぬが、僕は世間でいふやうなエライ作ではないやうに思ふ。主人公健次の性格が餘りに風變りなので、今の世には一寸あり相にも思はれない。あつても僕等には左樣同情のない人間である。桂田の奥さんの會話などは餘程まづい。氏の骨を折つた事丈けは充分に分るが、骨が折つた割合には見應へのしないもの丶出來るのを恐れる。而し細評は完結の上にする。

「太陽」に出た「玉突屋」は寥々たる短篇であるが、佳作である。最後の「百年も千年も云々」の句は少し誇張だが、其他は一點の批難もない、玉突屋の光景、ゲーム取りのボーイの樣が、アリ〳〵と浮んで、氏の從來に比類ない程具體的によく描かれて居る。氏の一段の發達と見て可なりと思ふ。「文章世界」に出た「六號記事」は木版業者の津坂某の性格(キアラクター)スケッチにして一通り描かれて居る。先づ可なりの出來といふべきである。要するに今年に於ける氏は又昨年の花々しい後を受けて充分活動すべき意氣込も力量も充分なることを示して居るやうに思ふ。

高濱虛子氏

「ホトヽギス」に出た「病兒」は啻に虛子作中第一の佳作たるのみならず又新春文壇に於ける佳作と思ふ。澤子といふ五歳になる病兒をいたはる親心、此病兒の病氣を中心として陰晴する家庭の空氣、實によく描かれて居て、一點の批難ない。渾然たる名什、永く文壇の飾りとするに足るだらう。殊に最後に安倍から歸て來て、病兒の寢姿を見る一段の如き、印象明確、餘情搖曳、何等の巧手、何等の妙腕。此篇に比すれば「新小說」の「有閒」など劣ること數等

其他の作家、作者、僕の見ざるもの、知らざるもの極めて多からうが、これで御免を蒙る。作者を以て言へば二十九氏。作品を以て言へば五十餘篇。之れを僅々數頁の間に網羅せんとす、其孟浪杜撰固よりいふまでもない。謹んで罪を作者及び讀者に待つ。(一月廿一日)

頁數增加の爲め小室白也氏の「吾輩も猫である」は組置きとして次號に廻せり

新刊批評

▲譯文筌蹄 附用字格 小泉秀之助編 須原屋書店發行

荻生徂徠の「譯文筌蹄」は東涯の「操觚字訣」と共に同訓異義の文字の使ひ分けを辯明したるもの丶双璧也。殊に徂徠のゝは直截簡明、引例も多く俗談平話の間に求めたれば讀んで趣味あり。然るに坊間、前編のみ多きも後編は殆んど絕無にして偶々あるも其價廉ならず、加ふるに文字の排列次序なくして、一字を探すに無用の勞を重ねざるべからざるを憂ひ小泉氏は前後二篇を合して一冊となし、韻音によつて文字を排列し、附

するに用意周到なる索引を以てしたれば、操觚者は固より苟くも文を學ばんとするものには極めて必要なる書なりといふべし。附錄として東涯の「用字格」を加へたれば益々作文の便を添へたり、たゞ其の用紙は少し粗惡なるも八百頁を超ゆる大册を成るべく廉價にて賣らんとする目的上、蓋し止むを得ざらんか。（定價一圓五十錢、一月中特價一圓廿錢）

▲鷄頭

高濱虚子著　春陽堂發行

虚子の小說を集めたるもの也。收むる所、「風流懺法」「斑鳩物語」「大內旅館」「八ヶ岳」「雜魚網」「畑打」「秋風」「欠伸」「樂屋」「勝敗」の十篇、此中過半は昨年中の製作にかゝり、又佳作も昨年中の製作中に多し。虚子の昨年中の活動については前號「丁未文壇概觀」中に述べたれば今はいはず。虚子の作、概して清楚、冷艷、才情共に見るべし。「大內旅館」「風流懺法」「斑鳩物語」は卷中の白眉也。卷頭に漱石氏の長き序あり、虚子及び寫生文の小說を詳論せり。（定價七十錢）

▲うた吉心中（後篇）

橋本埋木庵著　隆文館發行

「都新聞」に掲載せられて、ヤンヤと喝采せられしもの也。下町の、ねえさんや、あにいに喜ばれ相なもの也。製本用紙餘りに粗惡也。（定價四十五錢）

▲英作文構成法

佐々木文美著　有樂社發行

斯道に於て多年の經驗を有する著者が、英作文の構成に就て、簡明に說明し敍述したるものなり。（定價三十五錢）

▲有明集

蒲原有明著　易風社發行

現今の詩壇に於て獨步の觀ある有明氏の第四の詩集にして長詩數十編を收む。氏の詩風漸々象徴的になり、一度諷誦して詩情の勃發するが如きこと少きも、反覆數回、幽邃なる詩思の徐ろに生ずるを覺ゆ。殊に音調、字面等の苦心の跟歷々として數ふべし。我儕は我一般の詩風の今少し分り易く、今少し平民的にならんことを望むものなりといへども、本卷の如き佳什名作に對しては固より深き敬意を表するもの也。（定價七十五錢）

▲思ひざめ

後藤宙外著　樋南堂發行

數年前の「新著月刊」に出でゝ好評嘖々たりしもの也。今日より見れば多少の嫌らぬ所なきにあらねど、概してゆるみなく、落附いたる書き方氏作中の佳作たるを失はず、製本の體澤、見る目甚た美はしく、持て居て心持のよい本也。（定價八十五錢）

▲新寫生文

四方太、虚子、等著　東亞堂發行

坂本四方太の「夢の如し」、寒川鼠骨の「踏査雜事」、長塚節の「佐渡が島」、高濱虚子の「斑山詣」の四寫生文を收めたり。何れも皆著者得意の作一讀再讀するに足る。四方太の圓熟老練、虚子の清倡飄逸、天下の已に熟知する處なるも、長塚氏の文才の如きは世多く認めざるが如し。而かも「佐渡が島」の如きは、詩思蕩搖、文品亦溫藉。容易に得易からざるの出來榮なり　兎に角本篇の如きは寫生文の好模範なりといふべし。（定價五十錢）

▲七花八裂

杉村楚人冠著　鷄聲堂發行

「大英遊記」一度出でゝ著者の文名、一夜にして海內に喧傳したるの觀あるも、著者の文才は昔よりして斬然として群を抜けり。此篇著者が過去十三年間に書きたる文を集めたるもの、諧謔あり、記實あり、放語あ

り。文、題と、時と場合に應じて變化し、而かも筆、往く所として可ならざるなきの有樣なるも其最も得意の作は飄逸輕妙の分子多きものに於て之を見る。氏は大思想家、大文學者にはあらざるも、其獨自一個の思想を、獨自一個の文體を以て、縱橫に書きたる所痛快此上なし。且つ其文體も和と漢と、雅と俗と渾然融和して些の不調を感ぜしめざるの文才に至ては他人の容易に希求し難き所、好文の士の熱讀を推奬す。此書・卷頭のヂヂケーションより卷末に至るまで悉く奇拔。殊に著者小傳の如き直らに奇拔其者の權化なるかの如き觀あり。(定價六十錢)

▲懺悔錄(アウガンスチン)　宮崎八百吉譯　警醒社發行

「國民新聞」に自己の懺悔錄を書きつゝある著者が、セントアウガスチンの名著を飜譯したるもの也。著者の文才甚しく荒さみて讀んで慊らざる節少なからざれど、此篇は原本は名著丈けに興味を以て通讀し得べし。宗教上の煩悶を有する者には大いなる益を與ふべし。(家價七十錢)

▲沙翁物語十種　小松月陵譯　博文館發行

ラムの沙翁物語より「夏の夜の夢」其他十種の物語を譯したるもの也。譯者は先きに同書の一部を譯して好評を博せる人、此篇亦概して難少き筆也。(定價四十五錢)

▲貝原益軒言行錄　秋山悟庵編著　内外出版協會發行

▲ルーテル言行錄　松本赳編著　内外協會發行

前者は「偉人研究」の第十一篇にして、後者は第十二編也。青年の讀物として有益也、(定價各三十錢)

▲女子大學　深江種明譯　東西社發行

テニソンの「プリンセス」を小說體に譯したるもの也。新思想と舊思想との衝突を描いて、女子の教訓となることは頗る多きも、彼の如き名著を餘り巧みならぬ散文に譯したるは殘り惜しき心地す。只英文を讀み得ざる人、又た達者ならぬ人には至極便利なる書也。(定價六十錢)

▲秀存語錄　佐々木月樵撰　浩々洞出版

是れ故清澤師の衣鉢を傳へて精神主義の鼓吹に勤めつゝある佐々木氏が、故德秀存師の語錄を蒐めたるもの、全篇二百五十六章、長きは一頁中にわたるものあれど、大低は五六行位の短かき斷片に過ぎず、されど詞句にたるみのなきと、奇警の比喩に富むと、選者の附したる題目の新なるとは、優に求道者の好侶伴として袖珍訓話たるを得べし。(定價六十錢)

▲大石良雄(後篇)　塚原澁柿著　隆文館發行

前篇に次いて、孱弱の身敢て虎穴に投じて虎子を得んとする輕の苦心その才辯その辣腕、迂氣者の吉良親子ゝ手球に取つて、上杉よりの附人たる小林等の監視の間を巧に游泳するところ、更に之に點綴せられたる世慣れぬ浪子の可憐なる義膽とを寫して錯路周匝、能く情趣の機微を盡す、以上を結構の中心として、更に大石以下の一味の魂膽を擬すところ描き來つて風神奕々、宛ら彼等を眼前に見るの想あり、一般には歷史小說の受けられぬ今日、著者が十年一日心を專にして斯る好文字を作るを喜ぶ。(定價金九十錢)

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝 神田裏神保町	上田屋
仝 京橋尾張町	東海堂
仝 日本橋呉服町	北隆館
仝 本郷本富士町	盛春堂
仝 京橋區銀座町	良明堂

關西大賣捌所

大阪備後町	盛文館
仝 京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾五錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

○壹冊定價金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數／國別	内國	國外
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割増の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へられたし

明治四十一年一月廿八日印刷
明治四十一年二月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所 反省社（電話下谷九一九）
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場